

奈良県御所市

# 鴨都波 11次 発掘調査報告

平成4年(1992年)3月

奈良女子大学蔵書



931001501006

御所市教育委員会

210.2

93

奈良県御所市

かうづば  
**鴨都波 11次 発掘調査報告**

平成4年(1992年)3月

93100150

御所市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、奈良県御所市大字二室104番地1に所在する鶴都波遺跡第11次発掘調査の成果を報告するものである。
2. 調査は、兼松都市開発株式会社の委託を受け、平成2年10月1日から途中約3カ月の中止期間を経て平成3年7月26日まで、実働137日間をかけて御所市教育委員会が実施し、平成2年11月23日には現地説明会を開催し、多くの参加者を得た。
3. 現地調査は、御所市教育委員会・技術職員　木許　守が、同会技術職員　藤田和尊、調査員　尼子奈美枝の参加・協力を得て、これにあたった。また、調査補助員として平尾今日子、高田加容子、藤村藤子、尾上昌子、木村英幸、長越和世が各部所を担当し、調査作業員として地元有志17名の参加があった。
4. 遺物整理、報告書作成には調査参加者全員であたったほか、次の方々の参加・協力を得た。

滝永貞子、藤井節子、久保千富美、梅田静江、森　好子、谷奥いずみ、小西智子、中まり子、藤井忠子、藤井浩子、吉川加代、中田安子、吉川浩子、吉川和美、吉川敦美、中村入美、藤井早苗

また、製図は、遺構を木許・藤村、遺物のうち土器を尼子、木器を平尾、石器を高田がそれぞれ担当し、遺構・遺物の撮影および本書の編集には木許があたった。

5. 自然科学的分野からの考察として、奥田　尚・松井　章・内川純蔵・金原正明・粉川昭平・金原正子（原稿到着順）の諸氏から玉稿を賜り、第6章に掲載した。
6. 本書の執筆分担は口次に記した通りであるが、特に第5章第3節中の骨角器についての記述は、松井　章氏のご教示によるものである。
7. 文献註・補註は、第6章は各節末尾に記し、それ以外は各章末尾に記した。
8. 出土遺物の番号は、挿図・図版中の番号ともすべて統一した。
9. 本文中に用いた“北”は、すべて座標方眼紙北である。
10. 現地調査および整理の期間中、多くの研究者の方々に來訪頂き、貴重な御指導、御助言、御協力を賜りました。御芳名を記し深謝致します（五〇音順、敬称略）。

青木勘時	泉森　皎	井馬好英	植田隆司	勝部明生	河上邦彦
合田茂伸	佐々木好直	菅谷文則	土井孝之	豊岡卓之	中井一夫
橋本裕行	藤田三郎	松木洋明	森岡秀人		
11. 現地調査および本書刊行に際して、事業者である兼松都市開発株式会社代表取締役太田眞一氏を始め、関係各位に全面的なご理解、ご協力を頂いた。記して深謝の意を表します。

## 本文目次

第1章 環境と既往の調査	（藤田）	1
第2章 調査の契機と経過	（木許）	3
第3章 基本解説	（木許）	5
第4章 造構	（木許）	7
第1節 古墳時代以降の造構		7
第2節 弥生時代中期後半から後期の造構		9
第3節 弥生時代前期後葉から中期前半の造構		18
第5章 遺物	（木許）	25
第1節 土器・土製品		25
第2節 石器		47
第3節 木器・骨角器		51
第6章 考察		54
第1節 石器の石材とその採取地	（奥田 尚）	54
第2節 出土の動物遺存体	（松井章・内山純蔵）	59
第3節 堆積土・木材の樹種・ 種実遺体の分析	（金原正明・粉川昭平・金原正子）	64
第4節 長頸壺からみた今次調査出土一括資料の 占める位置	（木許・藤田）	71
第7章 まとめ	（木許）	80

## 第1章 環境と既往の調査

御所市は奈良盆地の東南部に位置する。西部には金剛山、葛城山の峻峰が、南部には巨勢山丘陵が、東部には国見山さらには高取山などがあり、鴨都波遺跡などが所在する北側のみが盆地の平野部の一画を占める。鴨都波遺跡は葛城山麓に源流をもつ柳田川と、南方の金剛山麓付近に源流をもつ葛城川が形成した河岸段丘上に立地する、南北約400m、東西約300mの規模をもつと推定される、弥生時代前期から連續と営まれる集落遺跡である。

御所市内の弥生時代前期の遺跡としては、玉手遺跡、中西遺跡があげられるが、いずれもひとたび中期のうちに廃絶または衰退するようであり、鴨都波遺跡はそういう意味でも、南葛城地方の大拠点的大集落（母集落）<sup>(1)</sup>と言いうことができよう。御所市内の中期の遺構としては小林遺跡の方形周溝墓があり、後期の遺跡には巨勢山丘陵頂部に営まれた高地性集落の境谷遺跡、<sup>(2)</sup>中谷遺跡、<sup>(3)</sup>八伏遺跡などがあるが、それら以外の実態はほとんど知られていない。

鴨都波遺跡は、1992年3月現在、13次に及ぶ調査が実施されており、ようやく概要が知られるようになってきた。第1次調査は1953年に通り、遺跡の存在が知られる端緒となった。<sup>(4)</sup>第2次調査は1960年、第3次調査は1961年にそれぞれ実施され、後期の



図1 鴨都波遺跡調査地位置図

掘立柱建物、欠板列や大溝を検出したとされる。第4次調査(1972年)でも、人溝や後述の第12次調査で検出した護岸水路と何らかのかかわりを持つとみられる溝状の遺構も知られているが、当時の調査は上面を検出する程度にとどまっており、明らかにし得ないことが多い。第5次調査(1977年)ではピット群が、第6次調査(1978年)でも人溝と堅穴式住居の存在が知られた。第7次調査(1988年)では前期～古墳時代前期の堅穴式住居が計30棟以上や大溝が検出された。1989年実施の第8次調査は第12次調査地の試掘調査であり、同年の第9次調査も試掘調査で、遺物量の多さを再確認することとなった。第10次調査(1990年)は従来最も北側を調査したことになるが、溝や落ち込みもみられ、遺跡はさらに北側に広がりを持つことを確認できた。第12次調査は1990年から1991年にかけて実施し、護岸水路や集水マスの検出で注目された。第13次調査でも堅穴式住居跡と思われる落ち込みを検出した。

以上の調査によって、鴨都波遺跡の弥生時代の集落の在り方について、不十分ながらもある程度の材料が整って来たと言える。すなわち、鴨都波遺跡は、2～3本の手の指状の細い尾根もしくは微高地とその間の谷地形部分からなっており、居住区は第2・3・5・7・10・13次調査地のある北部または中部微高地と今次調査地のある南部微高地に分かれ、両者の間に第4次調査地や第12次調査地の谷地形があることになる。第2・3次調査以降、今次調査地も含め、多くの調査地で大溝が検出されているが、これは和泉・河内平野の各遺跡や奈良県内では出原本町の唐古・鍵遺跡でみられる環濠のように遺跡の外周全域を巡るものではなく、自然条件に規制され、各微高地ごとに部分などに掘削されるものなのだろう。

註

- (1) 小沢薰・林部均「御所市玉手遺跡第2次発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報』1987年度)、1988年
- (2) 木許守「奈良県御所市中内遺跡－第2次発掘調査報告－」(『御所市文化財調査報告書』第9集、1990年)
- (3) 御所市教育委員会「小林追跡群の調査－現地説明会資料－」(1986年)
- (4) 藤田和尊「奈良県御所市室巨勢山塊谷10号墳発掘調査報告」(『御所市文化財調査報告書』第4集、1985年)
- (5) 御所市教育委員会「ゴルフ場開発事業に伴う 第1回 巨勢山古墳群発掘調査成果の現地説明会資料」(1989年)
- (6) 御所市教育委員会「ゴルフ場開発事業に伴う 第2回 巨勢山古墳群発掘調査成果の現地説明会資料」(1990年)
- (7) 楠原考古学研究所編「近畿古文化論叢」(1962年)
- (8) 綱干善教「鴨都波遺跡」(『御所市史』、1965年)
- (9) 綱干善教(前掲書8)
- (10) 堀賢二・吉文文則・山村雅博・吉田二良「奈良県御所市鴨都波遺跡出土の石戈」(『考古学雑誌』第59巻第3号、1973年)
- (11) 伊藤勇輔「鴨都波遺跡 調査概報－」(1977年)
- (12) 伊藤勇輔「鴨都波遺跡発掘調査概報(県立御所高等学校内)」(『奈良県遺跡調査概報』1978年度)、1979年
- (13) 豊岡卓之「御所市鴨都波遺跡第7次発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報』1988年度)、1989年
- (14) 1989年10月、御所市教育委員会が試掘調査。第12次調査地の試掘調査。
- (15) 1989年10月、御所市教育委員会が試掘調査。
- (16) 1990年7月、御所市教育委員会が調査。
- (17) 藤田和尊・奈良県御所市鴨都波12次概報(『御所市文化財調査報告書』第12集、1992年)
- (18) 藤田和尊・木許守「平成3年度個人住宅等建築に伴う市内遺跡発掘調査」(『御所市文化財調査報告書』第13集、1992年)

## 第2章 契機と経過

平成2年5月10日、大阪市中央区南船場2丁目7番3号 兼松都市開発株式会社 代表取締役 太田眞一氏より、御所市三室字北浦104-1について、マンション建築を目的とする発掘届（文化財保護法第57条の2に基づく）が提出された。当該地は鶴都波遺跡として周知されているため、事前に発掘調査が必要と判断されることから、当市教育委員会は、これを奈良県教育委員会文化財保存課に達し、併せて発掘調査通知（同法第98条の2に基づく）を提出した。

当該地は、当初より、厚さ約3mに達する盛土がなされていたが、工事はこの盛土を除去して行われるものである。ただし、事業者からの申し出によって、敷地の西辺および南辺は直ちには盛土が除去できず、発掘調査を2次に分けて行う必要があった。協議の結果、第11-1次調査として本体建物の部分を、第11-2次調査として建物部分の一部と駐車場等の施設部分の調査を行うこととした。第11-1次調査は平成2年10月11日に開始し、同年12月30日に終了した。第11-2次調査は平成3年3月20日に開始し、同年7月26日に終了した。調査面積は、総計1,435m<sup>2</sup>、実働日数は137日である。

また、この間、調査が2年度にまたがるため、当市教育委員会は、平成2年9月20日に事業者と締結した受託契約を、平成3年3月30日に一旦清算し、平成3年4月1日に改めて受託契約を締結して、調査の体制を整えた。

第11-1次調査は、掘削により生じる堆土を敷地内に留め置く必要があったので、便宜上北区と南区に分けて順次行った。図2の1・2区がこれに相当する。なお第11-2次調査開始直前に一部設計変更があり、浄化槽が1区の北東部外側に設けられることになったため、この部分を1区拡張区として第11-2次調査中に調査対象とした。

また、1区の調査がほぼ終了した平成2年11月23日に現地説明会を開催し、多くの参加者を得た。第11-2次調査は、工事の都合上、3、4、5および1区拡張区に分けて順次行った。工事箇所のうち擁壁部分については、掘削深度が深い3区南西部は、工事による掘削の深さまでを対象として発掘調査を行った。一方、工事による掘削の深さが、当初から遺構面に影響を及ぼすものではないと判断された部分については、万一遺構を損壊するような状況があった場合には発掘調査に移行するという条件で、立会調査を実施した。結果、いずれの箇所においてもそのような状況は認められなかった。

なお、調査の過程において、後述するように、環濠的性格を持つと考えられた大溝が検出された。これをより詳細な記録に留めるために、4区での上層断面の剥ぎ取り転写を行う一方、航空写真測量を行って、コンターラインを入れた1/20の平面図を作成した。この土層断面はパネルにして、現在、御所市文化財資料室に保管している。

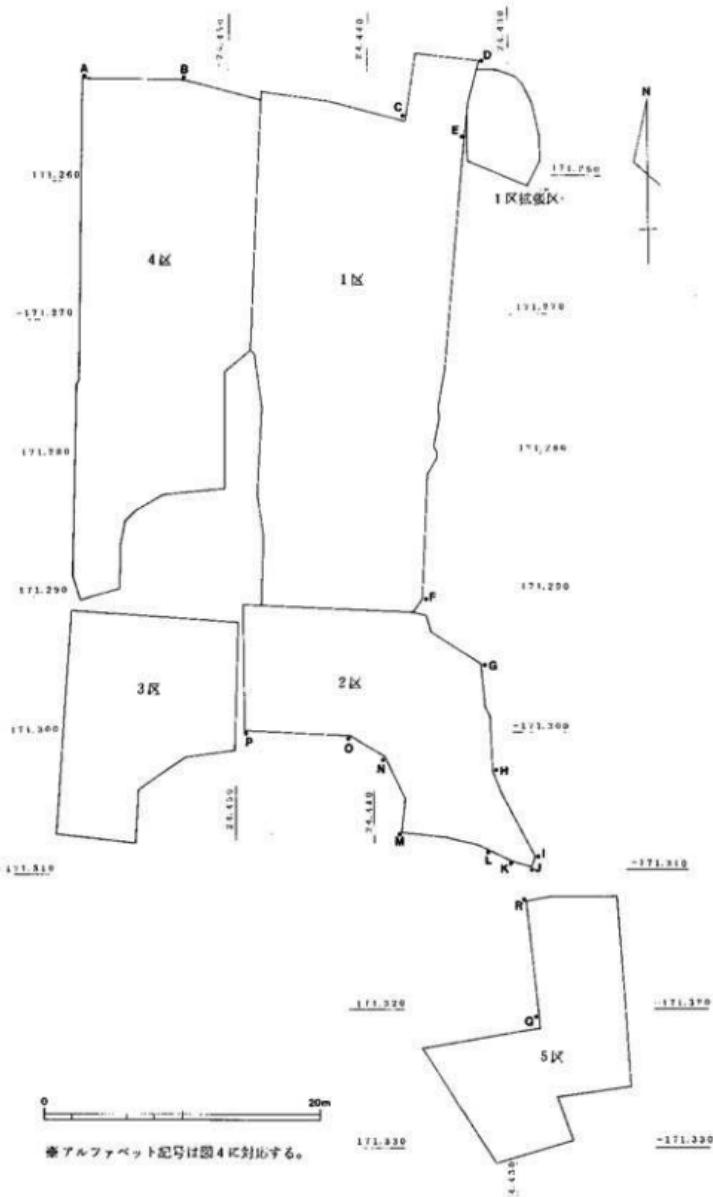


図2 調査区配置と土層断面ポイント (S.-1/400)

### 第3章 基本層序

調査地の層序は、図4に示したとおりである。調査地全体の地形は、北西方向が高くなっている、南および東に下がっている。また5区の南半部分は南方向に高くなっている、敷地に南接する丘陵へとつながる。つまり、調査区の全体の地形を微視的にみると、北半部分が、東から西に緩やかに下る尾根もしくはその南斜面に相当し、1・4区の中央付近から5区北半までが谷部分に相当する。そして、5区の南端が南接する丘陵の北斜面裾部に相当する。ただし、1区北西部および4区北半は、古墳時代以降、中世期までにはほぼ平らに削平されている。

さて、当該地は、当初は約3mの盛り上がりがなされており、その直下に旧耕作土（2層）がみられた。1区および4区の北端部の断面であるA-B-C-E間の西半分は、この旧耕作土・床土（3層）直下に地山がみられるが、この部分は先の削平部分と重なる。

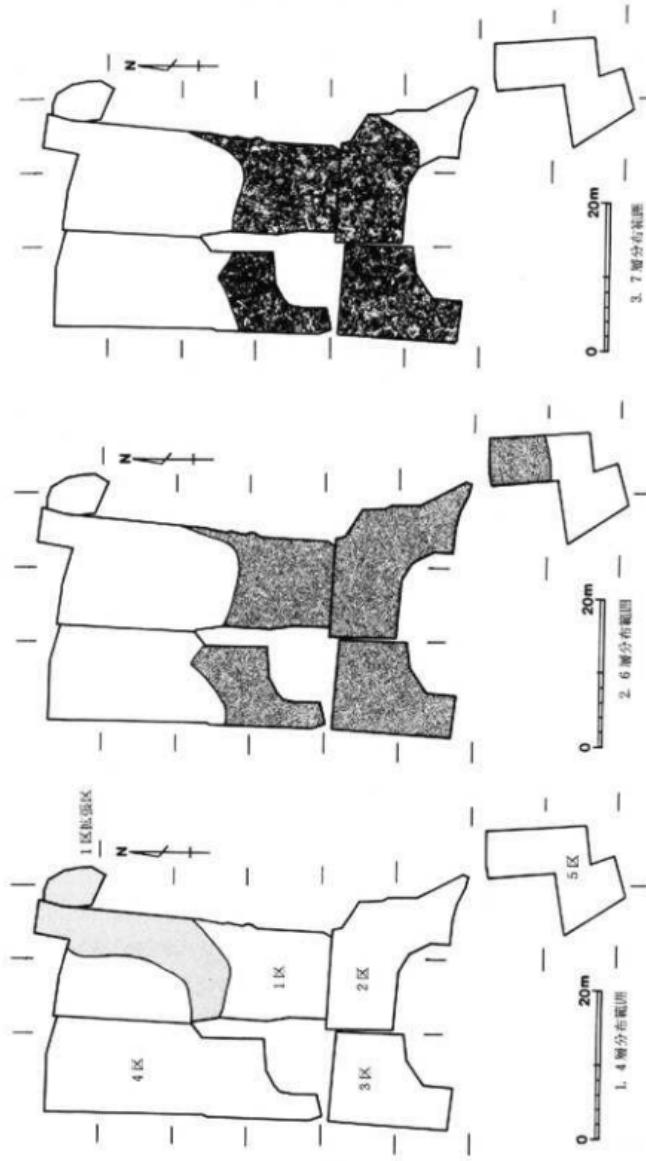
1区東端部の断面であるD-E-F間をみると、北半部には床土（3層）の直下に4層が堆積している。4層は、微妙な色調の違いによってa～cに分離できたが、その土質はいずれも粘土である。また、同層はいずれも遺物包含層である。いずれの層でも遺物の時期は同様であり、平安時代後半期を主体とするが弥生時代のものも散見された。ただし、4c層では平安時代後半期を主体とするという傾向がより顕著に認められた。遺物包含層はほかに南半部の6層、7層を検出した。6層は、黒灰色粘土であり層厚は60～70cmを測る。6層の出土遺物は、上面には古墳時代の須恵器なども散見されたが、弥生時代中期後半のものが主体を占める。これらが極めて濃厚な密度で含まれていた。7層は青灰色粘土であり細砂を含む。出土遺物は弥生時代中期前半のものであった。層厚は30～40cm程度で、出土遺物の密度は6層ほどには高くなかった。

これらの遺物包含層の調査区内での分布範囲については図3に示した。4区の北半部には、いずれの包含層も認められなかったが、これは前述した削平のためである。本来はこの部分についても分布していたものと思われる。6層は調査区全体の南半部に広がるが、5区南半には認められなかった。6層の分布範囲は微地形の谷部分に限られる。7層は、北限を6層とほぼ同じとするが、2区の南東部分には認められず、5区には及んでいなかった。

地山は1・4区北半は花崗岩質の岩盤であるが、南半は淡灰色粗砂（8層）である。それが、2・3区では青灰色シルトとなる。5区南半では、再び花崗岩質の岩盤がみられる。

遺構は、まず6層上面、4・6層直下、7層直下で検出した。それぞれ第1・第2・第3遺構面とする。第1遺構面では遺構の密度は低く土坑1を検出したのみである。第2遺構面は4層直下では地山を遺構ベース面とし、6層直下では7層を遺構ベース面としていた。この面では弥生時代中期後半から中世までの遺構を検出したが、これらは同一面としてとらえられた。第3遺構面は地山を遺構ベースとしていた。7層が、弥生時代中期前半の遺物包含層であることから、この面で検出した遺構はそれ以前のものといえる。

图 3 植物孢子分布检测模式图



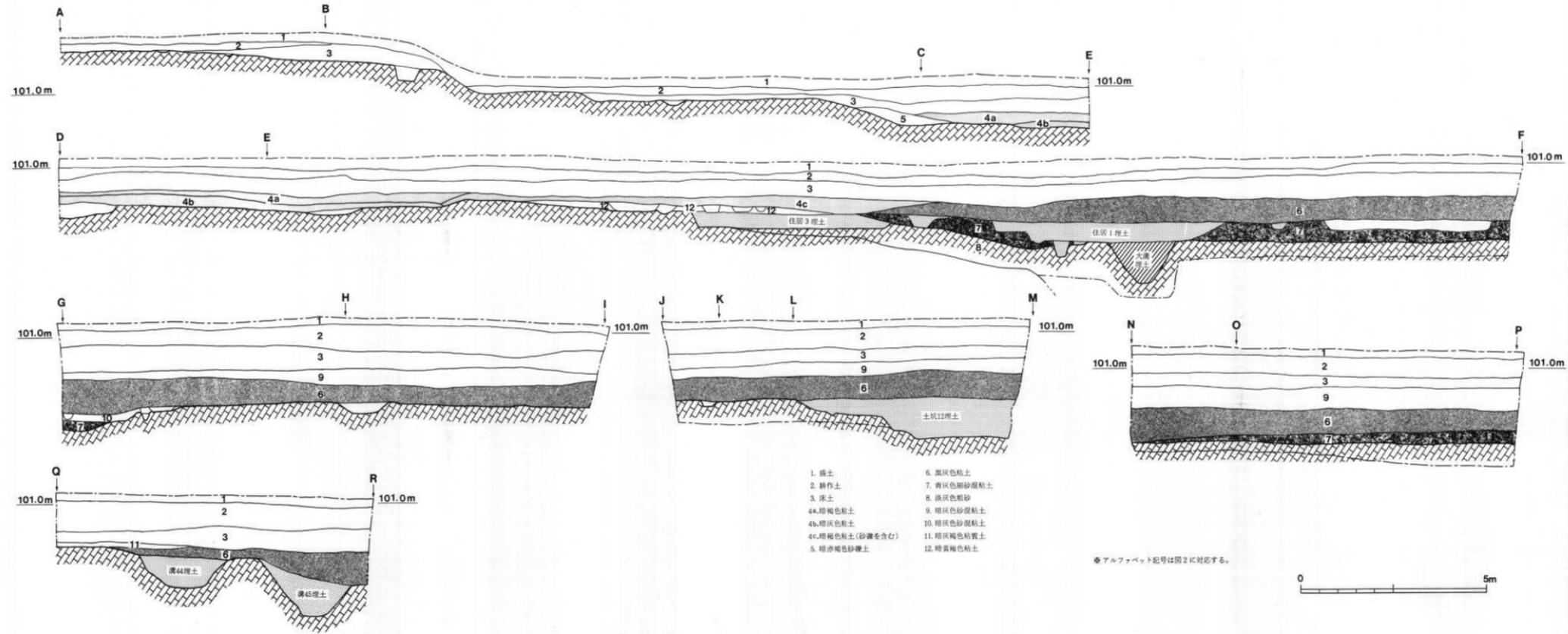


図4 調査区土層断面図 (S.=1/80)

## 第4章 遺構

今回の調査では、大溝、竪穴住居をはじめ、多くの遺構を検出することができた。以下にそれぞれの遺構について述べるが、遺構番号は別添図1～5に示した。ただし竪穴住居1・2内に存在したピットについては、図7・8に示した。

以下に、検出した遺構について、古墳時代以降、弥生時代中期後半から後期、弥生時代前期末から中期前半に分けて詳述するが、ピットについてその法量、埋土の色調・質についての記述は、紙幅の関係上、割愛をせざるを得なかった。ピットは長径20～40cm、深さは10～20数cmのものが主体を占めていた。それらの形成時期については、明らかに下層（第3遺構面）で検出した376～412を除いては、それを判断することは困難であった。その理由は、第2遺構面で検出したものは、まず出土遺物については、大部分が炭化不可能な細片になっており、時期の判るものであっても、例えば古墳時代以降の遺物と弥生時代のそれが同一のピットから出土するという場合が散見されたからである。また、弥生時代の遺物のみが検出された場合には、偶然にそれ以降の遺物が入らなかつたということも考えられ、形成時期を断定することはできなかつた。次に埋土であるが、多くのピットは柱材や柱痕跡を残しておらず、2層以上の分層ができない場合が大部分であった。埋土の色調・土質は、住居1内のものは、青灰色もしくは青灰褐色の砂を含む粘土を主体としたが、それ以外のものは、大別して黒灰色粘土と褐色系の粘質土に分けられる。出土遺物と埋土の関係をみると、この埋土の違いにかかわらず弥生土器は出土したが、須恵器・土師器が出土したピットは1区（別添図1）の59・69・79・83・85・87・89・133・135・138・139・149・152・156・189であつて、その埋土は灰褐色粘質土もしくは暗褐色粘質土（89のみ）であった。このことから、ピットの形成時期については、埋土の違いによって分け、褐色粘質土のものを古墳時代以降とし、黒灰色粘土のものを弥生時代とした。またこれらは直上の包含層（図4の6層）の出土遺物が中期後半のものが主体を占めるところから同期のものとした。出土遺物のない他の遺構についても同様に考えた。

なお、遺構の種別については、特に「ピット」について、原則として柱掘りかたを指すものとしたが、必ずしも柱掘りかたと断定できないものについてもピットと呼称しているものがある。また、遺構の番号は、1区の北西から順につけることを原則としているが、上記の大別した時期の、より新しいものに若い番号を付した。遺構の種別ごとに通し番号としたが、ピットについては1区は400番台まで、2区は500・600番台、3区は700番台、4区は800番台の数字を付した。

### 第1節 古墳時代以降の遺構

1区（別添図1）北西部に存在する暗渠は、現代の水田耕作にかかるものである。また、5区（別添図5）南半の斜面地に、検出地では4箇所の平坦面が形成されていた。この平坦面の形成時

期については、出土遺物など手掛かりになるものはなかったが、上層に現代の水田耕作土が認められたためそれ以前であることが判る。水田耕作以前に畠地として利用されていたものかもしれない。

次に各造構について記述する。

### (1) 土坑

土坑1は1区(別添図1)

のほぼ中央で検出された。

図5に示したように、図4の6層上面で検出した。径

1.3m、深さ1.38mを測る。

規模、形状から井戸と考え

られるが、井戸枠等の施設は何ら認められなかった。底は、後述する大溝の埋土に達している。大溝の、この部分の埋土は、木片・動物遺存体等有機質を大量に含む粘土である。当時、井戸として掘っていたところこのような層に達したため、途中で掘るのをやめたものかもしれない。

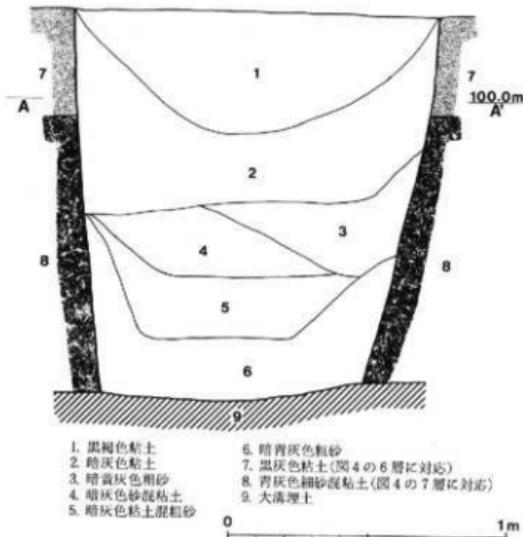
出土遺物は、弥生土器・須恵器なども含まれていたが、全層を通じて土師器Ⅲ(図31-76~80)、黒色土器碗など平安時代後半期のものが主体となっていたので、造構の形成時期も当該期に求められる。

### (2) 溝

溝の詳細な計測値は、表1(24ページ)に記したのでそれに譲る。以下、各時期の溝についても同様である。

1区の北半の溝1~6・12・13(別添図1)および4区北半の溝33~37(別添図4)は、中世以降に掘削された、畠作等耕作に関わる素掘溝と考えられる。これらの溝は、概ねその方向を南北に向けて平行して並んでいる。深さは、いずれも3cm前後から10cm前後と浅い。その形成時期については、出土遺物が細片になっているため、時期の特定は困難であるが中世の土師器なども散見されたことから、当該期と考えた。

1区(別添図1)では他に溝7・8・9・10がある。溝7は全長3.3mと短い。性格は不明であるが、埋土中から古墳時代の須恵器が検出されたので、形成時期も当該期に求められよう。溝8



垂アルファベット記号は別添図1、土坑1に対応する。

図5 土坑1 断面図 (S.=1/20)

0 1m

100.0m

A

A

100.0m

A

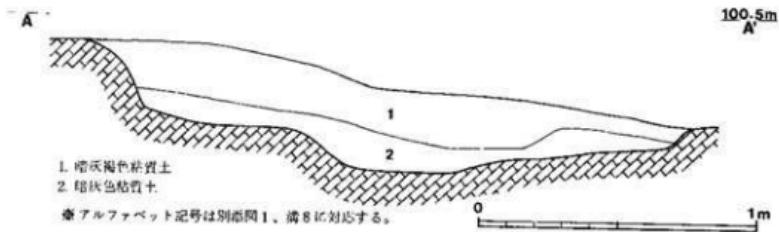


図6 溝8断面図 (S.=1/20)

(図6)は、1区中央よりやや東よりに南北方向に掘られていた。他の溝に比して、幅が1.9mから2.5mと大きい。出土遺物は弥生土器も含まれるが、5世紀代の須恵器を最新とする。溝9・10は1区拡張区で検出した。溝9の出土遺物は微弱であったが、須恵器壺の破片が含まれていた。外面のタキメをスリ消しており、5世紀代のものと思われる。溝10からは遺物が出土しなかったが、埋土が溝9のものと同様であり、その形成時期もほぼ同期と考えられよう。

1区(別添図4)では、他に溝38が検出された。溝38は北端近くで後世の搅乱を受けているが、調査区内での長さ20m以上に及ぶ。遺物は弥生時代から古墳時代のものが含まれるが、TK47型式の杯蓋(図38-163)が最新のものである。

### (3) ピット

当該期のピットは、1区(別添図1)および4区(別添図4)北半に分布するものである(図55-6参照)。既述の理由により同時併存するピットを抽出することができなかったこともあり、掘立柱建物等を復元的に見いだすことはできなかった。

当該期のピットで特筆すべきものとして、1区の48・50は、それぞれ径21cm・28cmの柱痕跡が遺存し、いずれも掘りかたは方形を呈していた。他に方形を呈するものは、66・73・82があった。

## 第2節 弥生時代中期後半から後期の遺構

1区北西部および4区北半には遺構の分布が見られないが、これは前述した削平によるものと考えられ、本来はこの部分についても遺構は存在したものと思われる。

### (1) 積穴住居

当該期の積穴住居は2棟を検出した。

住居1(図7)は、1区(別添図1)のほぼ中央から南よりの東端で検出した。外周を巡る溝とその内側に積穴が検出できた。遺構の東半分が調査区外に出るが、周溝は、幅40~70cm程度を測り、検出部分から円弧を復元すると径11m程度の数値が得られる。同様にして積穴は径9m程度の円形プランを呈することが判る。周溝と積穴は、その間隔が南部では狭くなることに見られるように

同心円にはならない。しかし図7の断面図に示したように、周溝・豊穴は同一層（5層）をベースとしていること、溝に伴う別種の遺構が存在しなかったこと、検出部分では、上面での切り合い関係が認められなかったことから、この2者は同時併存して機能していたものと考えられ、周溝は豊穴住居の壁溝と考えられる。

豊溝の底には径10cm前後のビットが検出された（ビット257～269）。住居の壁板を支えるための杭痕跡であろう。また、検出部分のはば中央の、豊溝と豊穴の間に浅く掘り進められている部分があるが、ここから住居中央に向かって階段状に削り出されていることから、この部分が出入り口であると考えられる。住居内には屋内高床部が造りつけられていた。この上面には径10cm前後の、杭を打ち込んだ痕跡が残っていた（ビット270～274・276～279・282～287・291・292・304～311）。また同様のビットは住居床面においても検出した。これらのビットの性格は不明であるが、あるいは、これらの杭を支えとして板材を上に横たえていたものであろうか。なお屋内高床部は、寝台が収納スペースと考えられているが、この場合は、階段を兼用した収納スペースと思われる。

遺物は、周溝・豊穴の埋土中から弥生土器（第Ⅲ様式新段階・図29-48～60）が出土した他、豊溝埋土から石包丁が、豊穴からは石包丁・骨針（図46-228）・動物遺存体などが出土した。

住居2（図8）は、1区南半の西端で検出した。西端部分が調査区外に出るが、検出部分からも径約5.6mの円形プランの住居であることが判る。豊溝は、幅20～24cm、深さ約10cmで検出された。豊溝は東側で1部途切れ、その両端部にビット323、324が存在した。この部分が出入り口に相当するものと考えられ、両ビットは、本末1m程度の深さのある住居の床から外に出るための梯子を支えるための柱穴と考えられる。

か跡（図9）は、中央からやや東よりに検出された。埋土には他に見られないような炭を含み、外側には炉内より掘り出されたとみられる焼土の分布が認められた。かは、上面での長径60cm以上、短径46cm以上あり、深さは56cmを測る。

住居内には支柱穴と考えられるビット350・378などの他にも多くのビットが検出された。しかし、上面が削平を受けている現状ではそれらすべてが同時併存するものか否か検証することはできない。わずかにビット365からは布留式土器が出土したので後世のものであることが明らかであり、他にもそのような新しい時期の遺構が含まれている可能性を考えておく必要がある。また住居内の溝は、溝19・20がある。溝20は浅く短いものでその性格等は不明であるが、溝19は、ビット364に切られているが、住居内を区切る間仕切り溝の可能性がある。

遺物は豊溝出土の図30-61・62を図化した。62は新しい要素をもつが、61は第Ⅲ様式（新）の土器であり、他の土器も当該期のものであったので、遺構の形成時期も当該期に求められる。

## （2）土坑

土坑2（図10）は、1区（別添図1）の南半で検出した。径120cm、深さ98cmを測る。埋土は3層に分けられる。遺物は全層を通じて比較的多く含まれていたが、1層からは細片化したもののが多

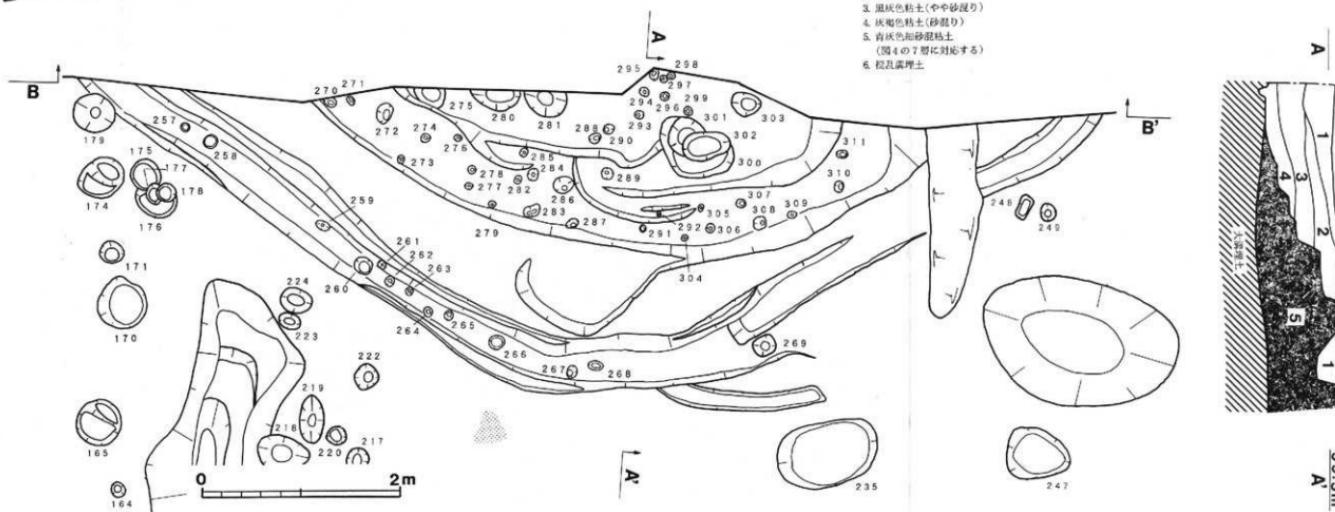
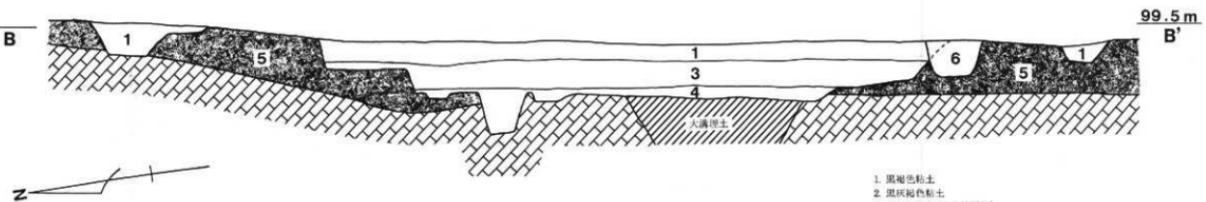


図7 住居1 平・断面図 (S.=1/40)

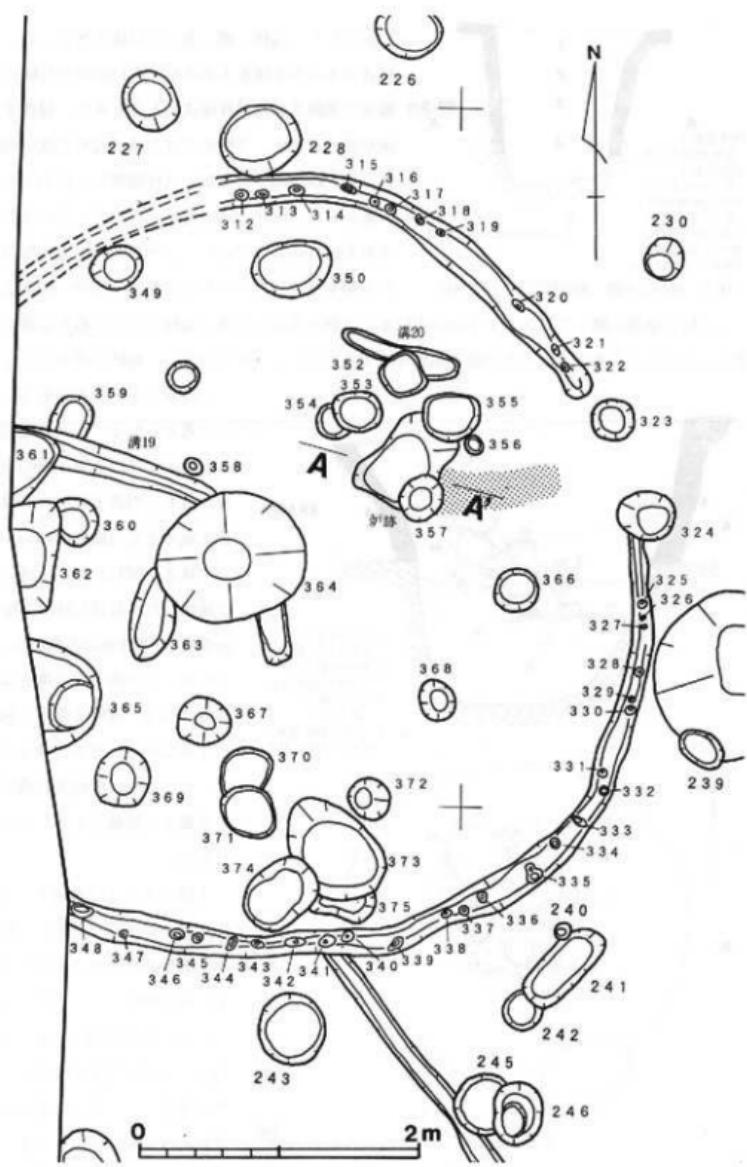


图8 住居2 平面图 (S.=1/40)

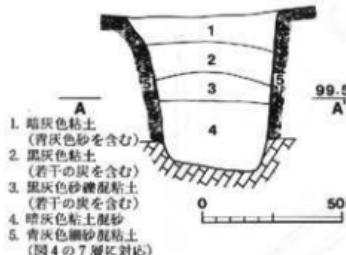


図9 住居2号跡 断面図 ( $S_r = 1/20$ )

く出土した。高杯、壺、壺、台付鉢等が見られ、第V様式のものが主体を占めるが、広口壺や台付鉢には凹線文で加飾された第IV様式のものもあり、混在する状況が認められた。2層からは、ほぼ完形に近い高杯・鉢の他、壺体部、壺体部、高杯脚部などが出土した。3層からは、高杯、壺、壺などが出土しているが、いずれも破片になっていた。2・3層出土の土器はいずれも第V様式(古)のものである。遺物の出土状況か

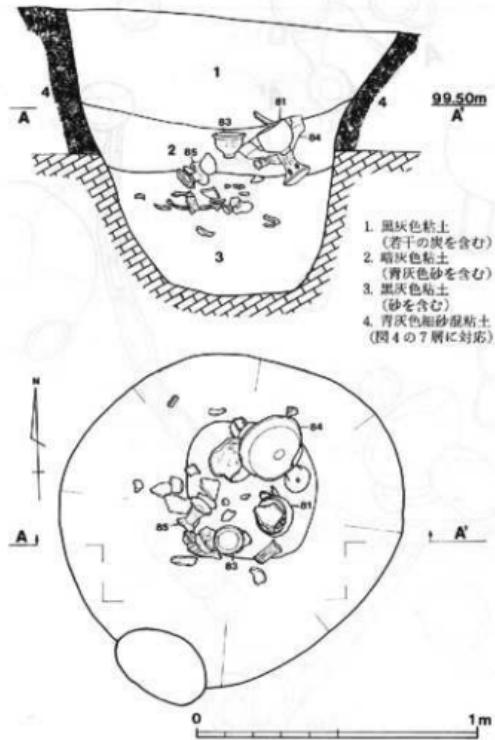


図10 土坑2 平・断面、遺物出土状況図 (S.=1/20)

て、時期の古い土器が混入したものと考えられる。また、完形のものが出土している第2層の土器組成からも、当該土坑がいわゆる祭祀土坑である可能性が高い。

土坑3(図11)は、1区の南端で検出した。長径1.34m、短径95cmを測る。検出面は西側が高くなっている。この部分での深さは1m程度になる。遺物は弥生土器片がわずかにみられたが、ほとんど出土しなかった。穀物等有機質のものを蓄えた貯蔵穴であったかもしれない。

土坑4・5(別添図1)は1区南東端で検出した。特に土坑5は東半部が調査区外に出るため、西半のみを検出した。土坑4は長径1.32m、短径1.06m、深さ20cmを測る。土坑5は長径4.4m、深さ23cmを測る。いずれも浅い土坑で、遺物もほとんど出土しなかった。

土坑7(図12)は、2区(別添

図2)の北西部で検出した。径130~145cm、深さ117cmをはかる。遺物は、1層・2層から弥生土器片が出土したが、底ではほぼ完形の長頸壺2、同口頸部のみ1、壺底部のみ1を検出した(図32-86~89)。長頸壺は第V様式のものであるが、壺底部は明らかに他の遺物に先行するものであり、混入品とみられる。

#### 土坑8(図13-1)

は、土坑7の東、調査区の中央よりやや西で検出した。長径84cm、短径70cm、深さ38cmを測る。遺物は1層ではほぼ完形の広口壺1、同体部のみ1、長頸壺口頸部・体部1、同頸部のみ1、同体部のみ1を一括で検出した(図32-90~94)。

#### 土坑9(図13-2)

は、2区西半南端で検出した。長径96cm、短径66cm、深さ63cmを測る。上面では不整形な楕円形を呈するが、底は隅丸方形を呈する。遺物は2層で長頸壺4、短頸壺1および板材が折り重なるように出土した。長頸壺のうち1固体は完形であった。また他の土器も1部を欠損している程度であつ

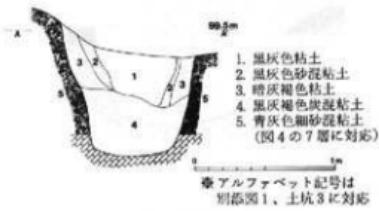


図11 土坑3 断面図(S.=1/40)

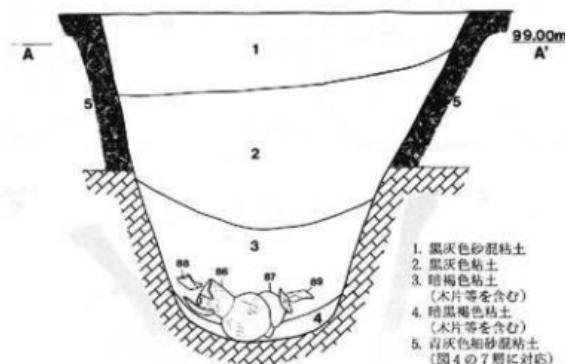


図12 土坑7 平・断面、遺物出土状況図(S.=1/20)

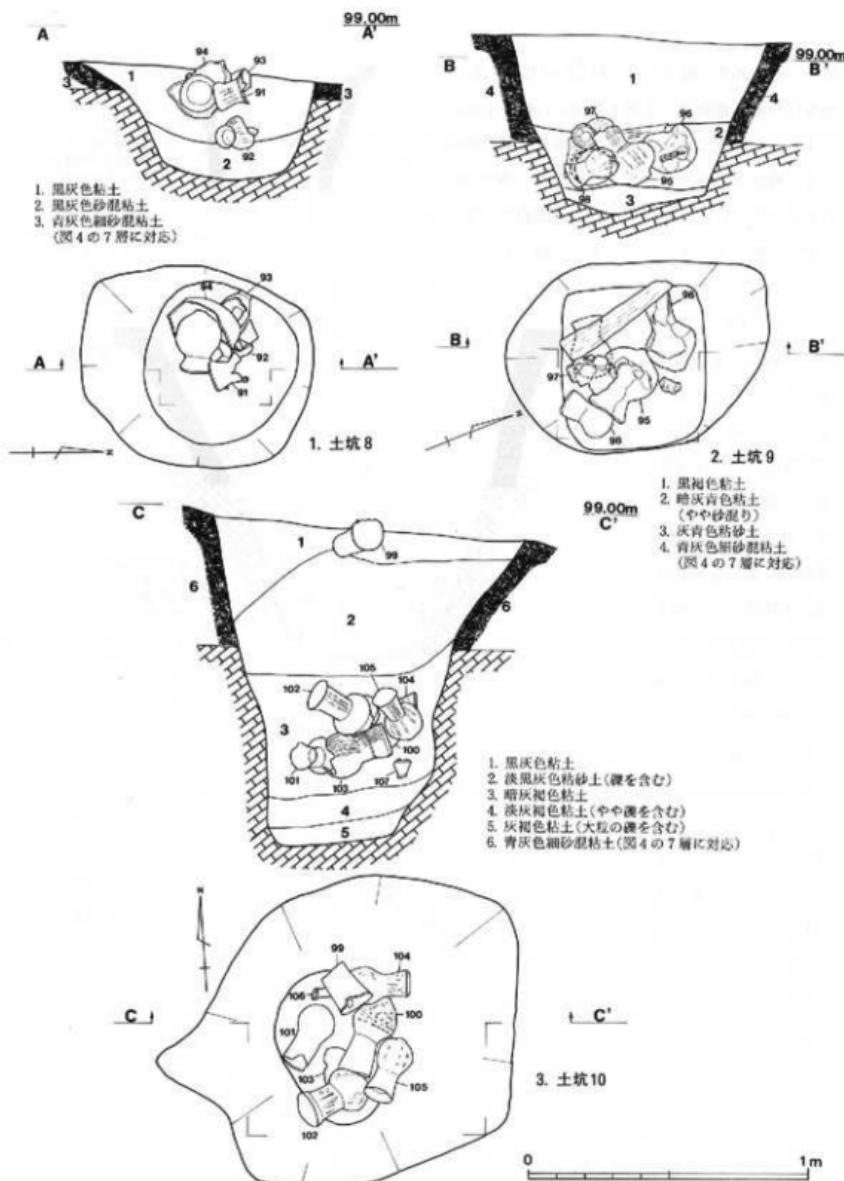


図13 土坑 8・9・10 平・断面、遺物出土状況図 (S.=1/20)

た(図33-95~98)。なお誠に遺憾ながら、図13-2中、土器番号を付していないものについて、現地調査終了後、整理作業開始までの間に紛失し、実測図を掲載することができなかった。

土坑10(図13-3)は、2区中央からやや東よりに検出した。西側の崩れている部分を除くと、東西・南北とも110cmを測る。掘りかたの東辺は直線的になり、北東、南東、南西部でコーナー状になるので、元は不整形ながら方形を呈しているものかもしれない。深さは120cmを測る。遺物は、1層および3層で顕著に認められた。1層からは長頸壺の口頸部のみが出土した。体部など接合できる資料は存在しなかった(図33-99)。3層からは長頸壺6、高杯脚部1、台付壺脚部1が一括で出土した(図33-100、図34-101~107)。

さて、土坑7~10はその規模、形状から井戸として使用されたものと考えられる。遺物はいずれも第V様式のものであり、遺構の形成時期も当該期に求められる。また、遺物は完形もしくはそれに近い状態で出土したのが多く、良好な一括資料として検出できた。その出土状況をみると、土坑7を除いては、一括して出土した土器の下層に1層ないし2層の粘土層の堆積がある。土坑7においても、上器86が遺構の底に達していたが、多くは3層中に含まれていた。このようなことから、井戸の廃絶に際しては、まず10~15cm土を入れその後土器を埋置もしくは投棄し、さらに井戸を埋め尽くしたものと考えられる。この間に当該期における井戸廃絶にかかる何らかの祭祀行為が想定できるが、土坑10に関してはその祭祀の最終段階で長頸壺(図33-99)を割り、その口頸部のみを投棄したものと考えられる。ただし、遺構の底に堆積している土については、井戸の使用期間内に自然に堆積したものかもしれない、特に土坑7の最下層の土は木片等を含んで黒褐色を呈しており、その感が強い。なお、藤田三郎氏は、弥生時代の素掘り井戸の断面形態を3つに分類されたが、上記のものはいずれもそのb形態に相当する。また、同じく遺物のあり方については①~⑦のパターンに分類されているが、土坑10についてはその⑥のパターン、その他のものは①のパターンに相当するものであろう。

土坑11(図14)は、2区(別添図2)の南西部で検出した。長径140cm、短径130cm、深さ40cmを測る。遺物は少ない。器種の判るものとしては、わずかに1層中から壺(図34-108)がある。遺構断面の形状などは上記した2区の土坑とは異なり、井戸とは考えられず、遺構の性格は不明である。遺物が第IV様式のものであり、遺構の形成時期も当該期に求められる。

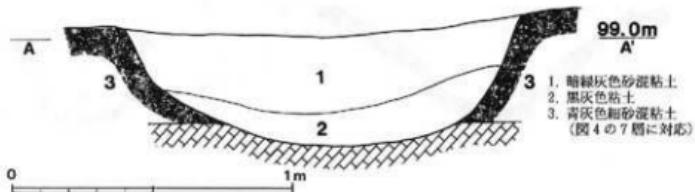


図14 土坑11 断面図 (S.=1/20)

### (3) 溝

溝14(図15-1)は、1区の北東端、1区拡張区にかけて検出した(別添図1)。北にどのよう伸びるのが不明であるが、南端はコーナーをなして直線的に終わっており、検出した他の溝とは様相を異にする。遺物は、2層では検出されなかったが、1層中から第V様式の土器(図35-118~120)が出土した。遺構の形成時期は、当該期に求められよう。

溝15は1区北東部で検出した。埋土中から第V様式後半期の土器(図36-121・122)が出土した。

溝17は、1区中央東半で検出した。遺物は、土器のはかサヌカイトのチップが他の遺構に比して多く出土した。土器は細片化しており時期の特定は困難であった。

1区では他に溝18~23を検出した。溝19・20については、住居2の項で述べた。溝18・21・22はいずれも浅く短い。溝21は住居1に、溝22は住居2にそれぞれ切られていた。

溝23(図15-2)は1区から2区にかけて検出した(別添図1・2)。2区北東部で途切れる。遺物は、土器が多くみられた。4層出土のもの(図36-132~135、図37-136~140)は第III様式(新)のものであり、遺構の形成時期も当該期に求められる。

2区(別添図2)では溝25・26・27を検出した。溝25は西端を土坑11に切られていた。溝26は中

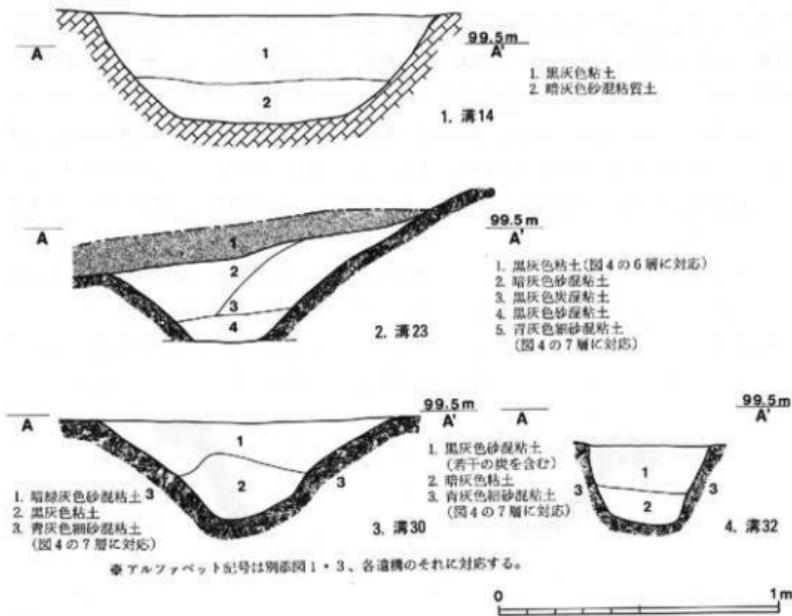


図15 溝14・23・30・32 断面図 (S.=1/20)

尖付近で、南北に5m伸びていた。一部で土坑10に切られていた。溝27は南東端で検出した。

3区（別添図3）では溝30～32（図15-3・4）を検出した。共に概ね東西方向に伸びる。遺物は溝31からは検出できなかったが、溝30・32から、第IV様式の土器が出土した（図38-152～161）。

4区（別添図4）では溝40・41を検出した。溝40は、上面に後世の削平を受けている斜面裾部に掘られていた。西半は調査区外である。溝41は次節で述べる大溝の埋土上面を掘り込んでいた。

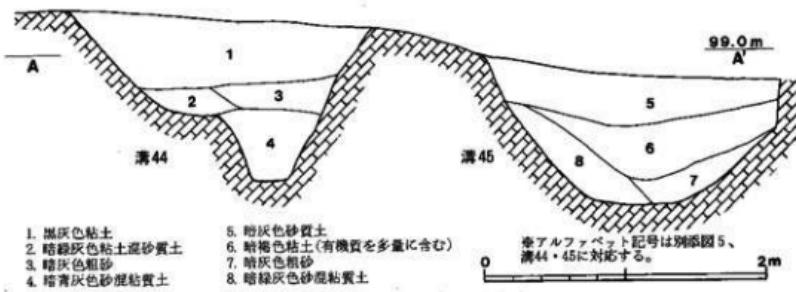
5区（別添図5）では溝42～44を検出した。溝42・43は共に浅く短い。その南端を溝44に切られていた。溝44（図16）は、5区北半を南西から北東方向に横切っていた。その一部を検出したに過ぎないが、この溝は、幅2.3m、深さも1mを越えるなど他の溝に比して規模の大きいものであり、また溝の位置が南側丘陵の裾部に近くこれより南に遺構がみられないことからも、溝形成期の集落の南端を区画する性格をもっていたのではないかと考えられる。その形成時期は、第III様式（新）の土器が出土している（図39-164～174）ことから、当該期に求められる。

#### （4）ピット

当該期のピットは、後世に削平を受けている1区（別添図1）北西部および4区（別添図4）北半を除いては、北端から5区（別添図5）の溝44に至るまで広汎に認められた（図55-3参照）。しかし、前節で述べたピット同様、堀立柱建物を復元的に見いだすことはできなかった。

ただ、特筆すべきこととして、2区（別添図2）の西半中央よりやや南において、土坑11の北から溝26にかけて、ピットが直線的もしくは帯状に並んでいる状況が看取される。どのような意味をもつものか不明であるが、柵状のものが存在したものかもしれない。

また、同じく2区において、ピット526は長径98cm、短径61cm、深さ41cm、582は長径61cm、短径60cm、深さ28cm、591は長径75cm、短径68cm、深さ47cm、599は長径60cm、深さ44cmを測り、他のピットと比して規模が大きいものであった。これらのうち、ピット526は柱材および隣板が遺存していた。またピット582・599はそれぞれ径24cm・25cmの柱痕跡が認められた。この4基のピットは柱間の距離1.7m～1.8mで直線的に並ぶが、これらに対応する西側のピットではなく、東側は調査区外となるので、この列を西辺とする建物が存在したと考えられる。



以上のはかに特筆すべきものとして、2区(別添図2)のピット535・572・574、3区(別添図3)のピット717には、柱材が遺存していた。

#### (5) その他の遺構

1区(別添図1)中央やや南西よりで埋甕(図17)を検出した。土坑は長径1.95m、短径1.75m、深さ80cmを測る。土坑の底には炭が混入した暗灰色砂混粘土が認められ、その上に甕が立てて据え置かれていた。甕は、復元口径30.2cm、高さ45.0cmを測るものである。甕(図41-181)は、その最大径を体部上半にもち体部外面にはヘケグリ後ヘラミガキを施す。口縁端部は面をなし、内面は横方向のハケメ調整を行う。このような特徴から、第Ⅲ様式(新)に位置付けられよう。

また、同じく1区中央よりやや南で焼土の分布を確認した。東西5m、南北は広い箇所で2mの広がりがあった。焼土中の出土土器は細片化していたが、直上に弥生時代中期後半期の遺物包含層(図4の6層)が堆積していたので当該期とした。屋外の火たき場跡と考えられる。

### 第3節 弥生時代前期後葉から中期前半の遺構

#### (1) 大溝

大溝(図18)は、4区(別添図4)から1区(別添図1)にかけて検出した。4区西半で古墳時代の溝38に切られているが、4区で12.5m、1区で13mの長さが認められた。幅は4区西端部分で1m、B-B'断面付近では3.9m、1区中央付近では、2.6mを測る。深さは図19に示したように、A-A'間で1.5m、C-C'間で1.1mを測り、北側の地形が高くなっているB-B'間付近では2.5m以上にも達する。西端部分での幅は50cm程度と浅くなっている。西端部分で、幅・深さ共に小さくなるのは、全体の地形が西の方が高くなっている。西端部分で、幅・深さ共に東側と同様の規模を有していたも

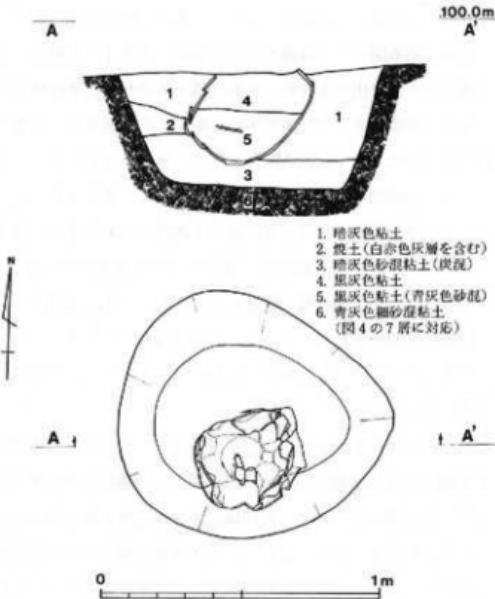


図17 埋甕 平・断面図 (S.=1/20)

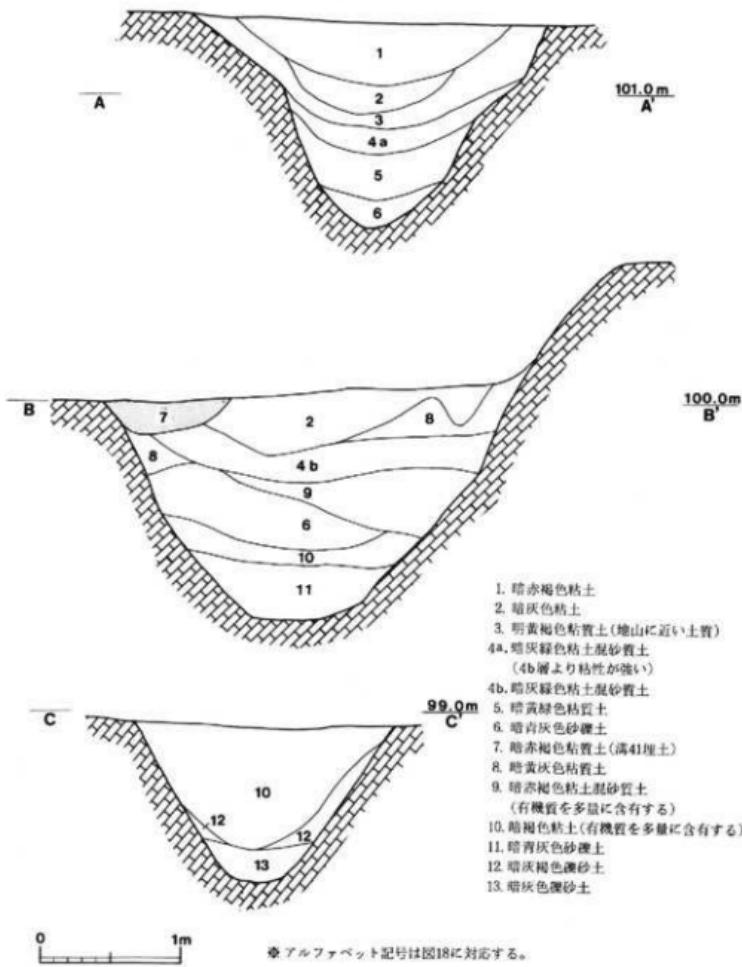


図19 大溝土壠断面図 (S.=1/40)

のが、後世の削平により遺構の上部が削られているためと考えられる。したがって、当初の遺構ベース面の高さを考慮すれば、西端付近でこの溝が途切れるものではないと考える。

埋土は木片・動物遺存体を多量に含む暗褐色系の粘土を含む砂質土である9層や、暗褐色粘土である10層のほか、それら粘土を含まない砂礫土などが検出された。9・10層はB-B'断面の西側付近からみられ、9層は途中で無くなるが、1区の大部分は10層で占められていた。地形測量図に示したように、B-B'断面付近から遺構底の傾斜がかなり緩やかになることから、1区では10層堆積の間、滞水状態にあったものと考えられる。

遺物は1層から10層に認められた(図25-28-17~47)。各層から弥生土器、石器、動物遺存体が出士した。完形の上器も多く含み、遺存状況は概ね良好であった。土器は第II様式の古相を示すものが多数を占めているが、遺物が出土した層のうち最下層に相当する第10層出土のものに、ヘラ描沈線文や貼付突帯を有する第I様式(新)のものが認められる(図28-44・46)。このことから、遺構は前期後葉に形成され中期初頭までに埋没したものと考えられる。

さて、当該遺構のような規模を有する溝は調査区内外では他に例をみず、また当該期の遺構分布をみると(図55-1参照)、後述する堅穴住居3、ピットが認められたのみであるが、いずれもこの大溝より北に存在する。これらのことから、この大溝は当該期の集落の南端を画する環濠的性格を有するものと考えられる。なお、埋土の堆積状況からは、大溝の南北いずれかに堤状の施設が存在した証左を得ることはできなかった。

## (2) 堅穴住居

堅穴住居3(図20)は、1区(別添図1)下層の中央付近東端で検出した。東半は調査区外にでるため、西半のみを対象とした。南北径10.4m以上を測る。深さは、北端で46cmを検出したが、南端では掘りかた部分の流出がみられ、18cmが遺存した。検出部分の東端ほぼ中央に焼土の分布が認められ、炉内から焼き出したものと考えられた。炉跡は検出できなかつたが、東側の調査区外に存在するものであろう。また図20の斜線部分は、地山岩盤が南に下がつて行く傾斜変換点を示している。この低い部分は住居形成以前の堆積である淡灰色粗砂が存在するのであるが、床面の軟弱さを防ぐためであろうか、暗緑黄色粘土を覆しておいた。なお床面は、地山であるか質土であるかの差を除いては、特に硬軟の差は認められなかつた。

またこの住居は、大溝および後述する柵によって囲まれており、住居の西側に占有の空間を有していたものと考えられる。

遺物は、床面で一括で出土した(図-30-65~70、図31-71~75)。器種構成は、広口壺4、壺6(底部・体部のみ5、底部のみ1)、甕1、鉢1であった。なお壺としたものは、胎土・焼成から明らかに別固体と判るもののみを数えた。これら上器は、多条化したヘラ描沈線文を有するもの(66・67・69・72)、貼付突帯を頭部に有するもの(68)など、第I様式(新)のもので、住居形成時期も当該期に求められる。

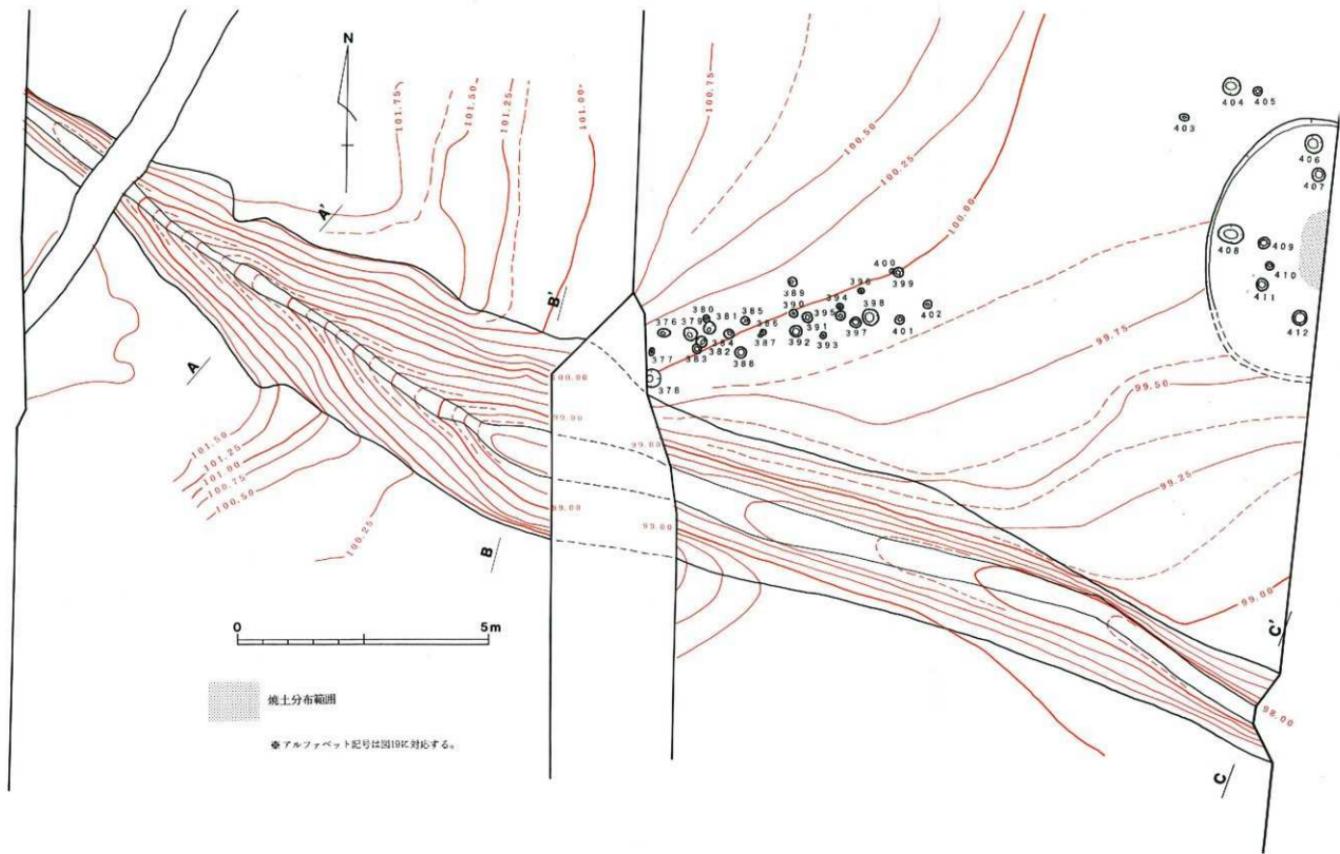


図18 大溝・住居3付近地形測量図 (S.=1/80)

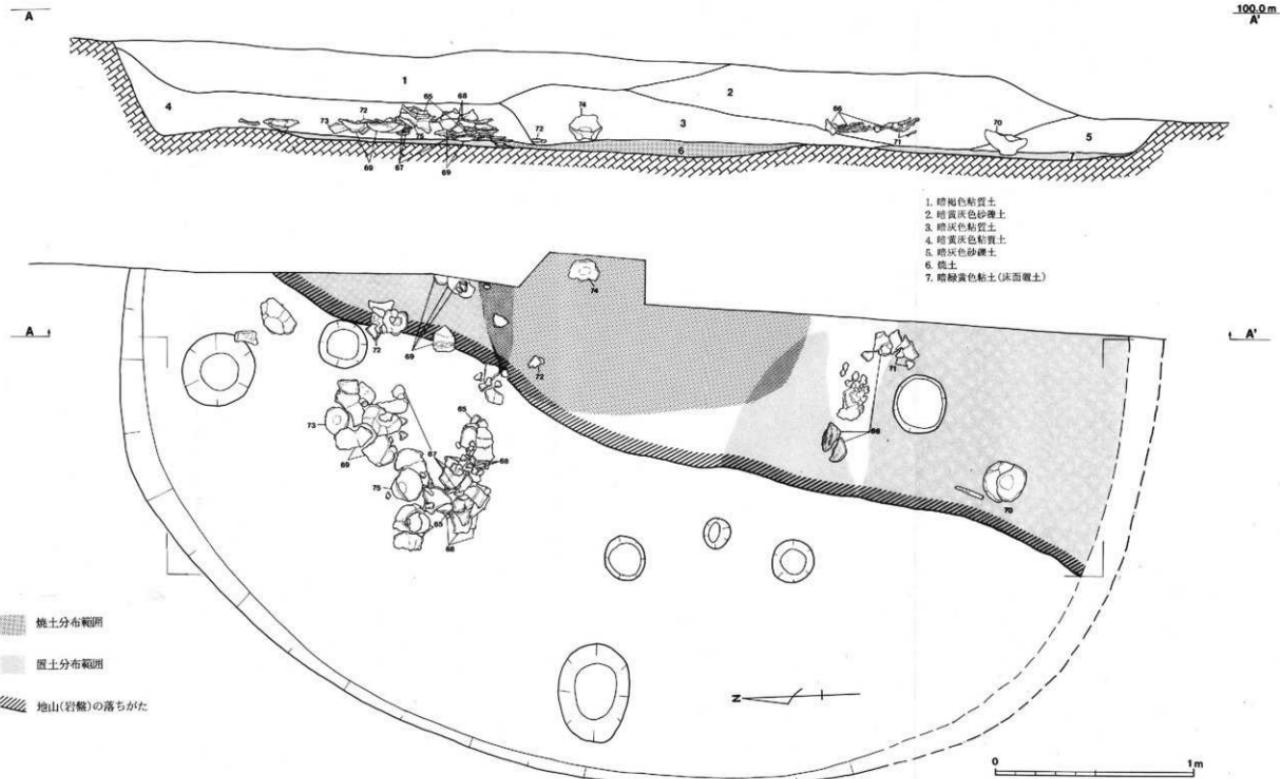


図20 住居3 平・断面遺物出土状況図 (S.=1/20)

### (3) 土坑

土坑は5基を検出したが、いずれも大溝、住居3より時期が下る第Ⅲ様式（古）のものである。土坑6（図21）は、1区（別添図1）南西部で検出した。長径2.0m、短径1.3m、深さ1.95mを測る。遺物は乏しく3層から付加状口縁を有する壺破片（図35-109）、底から壺破片（図35-110）および石器製作時に用いたと思われる鹿角（図46-229）などが出土したに過ぎない。遺構は、規模・形状から井戸と思われる。なおその断面形態は、藤田三郎氏の分類によるb形態に相当する。

土坑12（図22）は、2区（別添図2）南端で検出した。多くは調査区外に出るが、検出部分から長径6m以上あることが判る。この掘りかたの中には50cm程度の段差を有してテラスをもっており、2段掘りとなっている。下段の円筒状の部分は長径1.5m、短径1.3m、深さ55cmを測る。遺構上面から最深部までの深さは1m以上を有する。この部分の埋土は図22-6層に相当するものであり、1層のみの堆積であった。また遺構の東端部に、ピット611～613が検出された。遺物は上器・石器など多く検出された。大部分は細片化していたが、下段の円筒状部分の上位（6層）から出土した壺（図35-111）は完形であった。また凹線文を有する土器は認められなかった。遺構は、規模・形状からは井戸とも思われるが、金原正明・金原正子氏による当該土坑の堆積土の分析（第6章第3節1項）によると、「寄生虫卵が他に比して多く検出され、「糞便が混じった堆積物と判断される」とある。弥生時代の「便所」については、未だその解明が進んでいないが、今後、各地の遺跡における土坑堆積土の分析が進めば、このような土坑の実態も明らかになるものと思われる。

土坑13・14は、3区（別添図3）の下層（第3遺構面）で検出した。土坑13は、北端にあり北半分は調査区外に出る。検出部分から径3.8m以上の土坑であることが判る。深さは54cmを測る。遺物は細片化しているものがわずかにみられたのみであるが、凹線文を有する土器は認められなかった。土坑14は、同じく土坑13と同一面で検出したものである。径1.4mのほぼ円形を呈する。深さ30cmを測る。遺物の出土はみられなかった。

### (4) 溝

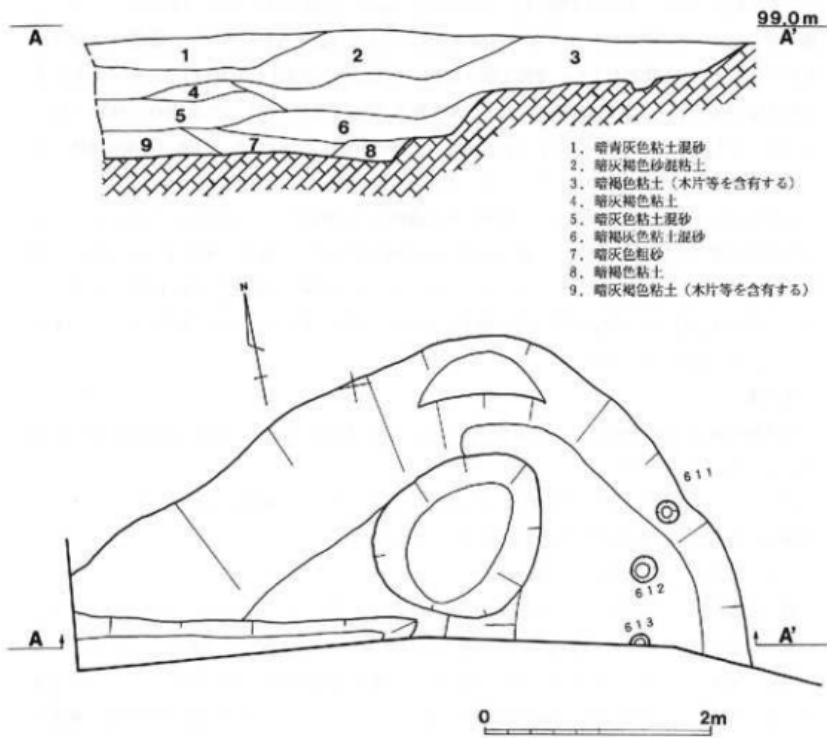
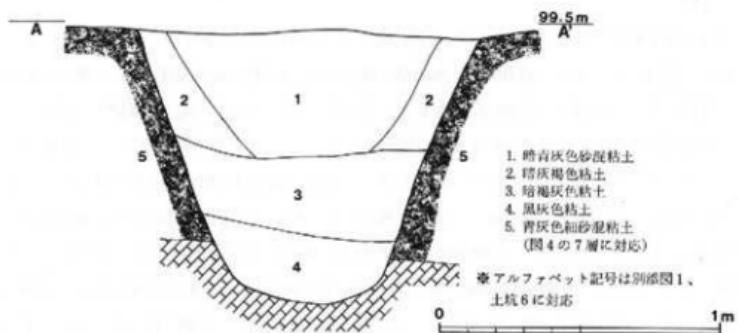
当該期の溝は7条を検出した。出土遺物は前述の土坑と同様、大溝、住居3より時期が新しい第Ⅲ様式（古）のものである。

溝24（図23-1）は1区（別添図1）中央を東西方向に伸びる。遺物は上器・石器が出土した。凹線文を有する上器は認められなかった（図36-128～131）。

2区（別添図2）では溝28・29を検出した。

溝28（図23-2）は南西から北東方向に伸びていた。途中で2条に分かれると、上面で切り合い関係など認められず、同一の遺構である。遺物は2層から土器が出土した（図37-141～151）。

溝45（図16）は5区（別添図5）北端で検出した。多くは調査区外に出るため北辺は、その西端で一部を検出したに過ぎない。遺物はほとんど出土しなかったためにその形成時期の特定も困難であった。周辺の遺構では、前節で述べた溝42・43・44があるが、溝42・43は、当該溝の上面を掘り



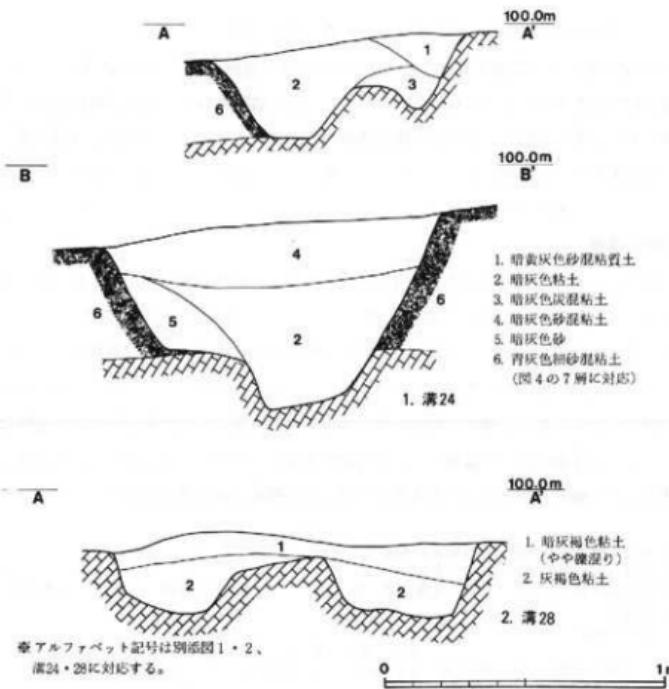


図23 溝24・28 断面図 (S.=1/20)

込んでおり、またこの2条の溝はその南端を溝44に切られている。このような遺構間の切り合い関係から、当該溝は、第Ⅲ様式（新）の土器が出土する溝44に先行することが判る。その上限については定かではない。しかし、図4の土層断面図に示したように、同図の6層が遺構の直上に堆積している。調査区全体では、この6層直下の遺構は第Ⅲ様式（古）の時期を上限とするので、溝45についても当該期と考えられよう。

溝45は、溝44と同様の規模を有している。検出された位置、他の遺構との関係などから、溝44は遺構形成期の集落の南端を画する溝と考えたが、溝45についても同様の性格を持ったものと考えられよう。

#### (5) ピット

当該期のピットは、ピット376～405および住居3内のもの（別添図1）である。これらのピットは下層（第3遺構面）で検出したものであり、また、上層のピットのうち弥生時代中期後半のものの埋土が、黒灰色粘土であったのに対して、これらのピットはすべて灰色粘土であって、上層のものとは明らかに形成時期が異なるものである。

さて、ピット376～405は、1区（別添図1）の大溝の北及び住居3の北西に見られた。ピット402とピット403の間に約6mの間隔あるが、ピット376～405まで直線もしくは帯状に並んでいるので、柵状の施設が存在したものと考えられる。ピットからの出土遺物はなかったが、層位的に大溝と並行する時期のものと考えられる。またこの柵は西端が大溝に当たっていることから、大溝と柵によつて、住居3が囲まれている状態になっている。この際、ピット402とピット403の間が、この囲いの出入り口になるものと考えられる。

#### （6）その他の遺構

2区（別添図2）北半中央付近に焼土の分布が認められた。遺物は焼土内から大形の壺（図40-179）、鉢（図41-180）が出土した。土器は、破片になっていたがこれが近辺に散乱しており、1/2～1/3程度まで復元できた。またこの土器は2次的な火熱を受けていた。遺物は第Ⅲ様式（古）のものであり、焼土の形成時期も当該期に求められよう。この焼土の性格については、周辺に並行する時期の住居跡がないことから、通常の屋外の火たき場とは考え難い。また上記のような遺物の出土状態は、ことさらに土器を割って投棄している可能性が高い。このようなことから、当遺構については、住居からやや離れた地点でのたき火を伴う何らかの祭祀の跡と考えられる。

#### 註

- (1) 佐原 真「近畿地方」（『弥生土器集成』本編2、1968年）  
以下、弥生土器の編年については同書による。
- (2) 藤田三郎「弥生時代の井戸—奈良・大阪の井戸を中心に—」（『考古学と技術』『同志社大学考古学シリーズ』IV、1968年）
- (3) 藤田三郎（前掲書2）

表1 溝計測表

※遺物の略号は、弥は弥生土器、須は須恵器、土は土器を示す。また弥生土器のうち、  
時期別の可能なものはそれを記した。

番号	幅(cm)	深(cm)	地盤長(m)	埋 土	遺 物
1	44～52	3～4	5.0	淡灰色粘質土	
2	36～65	2～5	11.6	〃	弥・須
3	24～28	3～4	5.2	〃	土
4	24～32	2～6	3.0	〃	弥・土?
5	32～44	6～7	4.1	〃	弥・須・土
6	20～32	2～5	3.6	〃	須
7	70～75	39～42	3.3	暗灰色砂質粘土	須
8	190～250	約40	20.7	図8 参照	弥・須
9	44～78	19～33	3.4	黒灰色粘土	須
10	33～35	8～9	0.9	〃	
11	25～85	15～30	9.8	暗褐色粘質土	弥・須
12	33～40	4～10	4.7	暗灰色粘土	弥・須
13	36～42	8～10	4.9	〃	弥（後）
14	120	30～40	3.9	図15-1 参照	弥V
15	45～123	7～30	5.7	暗褐色粘質土	須
16	37～44	6～17	8.6	黒灰色粘土	弥III(新)
17	39～40	9～15	5.0	〃	
18	24～30	2～11	3.4	〃	
19	19～23	5	1.3	暗灰色粘土	
20	12～19	3～6	0.8	〃	
21	18～21	9～10	1.6	黒灰色粘土	
22	14～17	3～7	2.3	〃	
23	65～108	28～35	15.6	図15-2 参照	弥III(新)

番号	幅(cm)	深(cm)	地盤長(m)	埋 土	遺 物
24	75～125	26～30	10.0	図23-1 参照	弥Ⅲ(古)
25	36～45	11～12	2.7	黒灰色粘土	
26	51～62	9～12	5.0	〃	
27	15～27	7～12	4.4	〃	弥
28	100	18～25	8.0	図23-2 参照	弥Ⅲ(古)
29	48～50	6～11	2.1	黒灰色粘土	
30	55～95	14～34	11.1	図15-3 参照	弥Ⅲ(新)
31	15～30	6～8	1.6	黒灰色粘土	
32	45～60	23～28	6.2	図15-4 参照	弥Ⅲ(新)
33	29～33	3～6	2.3	淡灰色砂礫土	
34	26～33	5	2.8	〃	
35	20～26	17	2.3	〃	
36	24～28	2～6	3.3	〃	
37	33～42	8	5.2	〃	
38	56～95	70	3.2 15.5	暗赤灰色砂礫土	弥・須
39	48	25	1.6	暗灰色砂礫土	
40	16～36	12	2.7	黒灰色粘土	
41	45～90	4～12	2.7	暗赤褐色粘質土	
42	29	4～17	1.5	黒灰色粘土	
43	23～39	17～29	2.5	〃	
44	230	126	6.8	図16 参照	弥Ⅲ(新)
45	210	80～92	7.1	図16 参照	

## 第5章 遺物

### 第1節 土器・土製品(図24~41)

今次調査では、コンテナパットにして約250箱分の遺物が出土したが、土器・土製品については、181点を図化できた(図24~41)。

遺物は出土地点、層位ごとに示し、同一ページに配列したもので、遺構が異なるものは実線で区画し、同一地点・遺構であるが、検出層位が異なるものは1点鎖線で区画した。また実測図中に薄いトーンで示したものは黒斑を、濃いトーンで示したものは煤または炭化物を表している。

図化した土器のうち多くは弥生土器であるが、1~5は黒色土器、76~80は土師器、163は須恵器である。また、178は2段に屈曲する口縁部をもつ台付鉢であり、古式土師器(布留式土器)である。土製品には紡錘車がある。14・114・127・161であるが、114・127は未製品であり、114は外形のみを作りだし、127は中心に穿孔をするための痕跡が刺突状に残っている。いずれも土器の破片を紡錘車に転用したものである。またミニチュア品として、土坑12出土のものに壺形土器2個体(112・113)があるが、112は類例の少ないものである。ミニチュア土器ではほかに溝23出土の壺形土器(140)がある。

弥生土器の胎土は、石英・長石・金雲母を含有するものが多くみられ、結晶片岩を含んでいるものに、26・37・96・110・161・170・173がある。26・37・96・161はそれが顯著であり、紀伊産のものであることが判る。また、これらのうち赤色粒を多く含むものは96・161・170である。

また角閃石を含むものに148・151・164・169があるが、土器は在地産のものである。灰色チャートを含有するものに175の広口壺がある。175は、頸部に貼付突帯2条を巡らせているので、北撰座のものと考えられる。このほか、121にはサヌカイト細粒が含まれていた。

また胎土は在地のものと変わらないが、図24-9は、口縁部が受け口状に立ち上がるもので、伊勢系の土器であろう。

さて、今次調査では、住居跡や土坑などから多くの良好な一括資料を得た。ここでは、今後当地域の弥生土器編年基準になりうる重要なものについて詳述しておく。なお、一括資料としては、第6章第4節に述べるように、溝出土のものについては、その一括性に疑問が持たれるところである。しかし、各時期すべてに良好な一括資料が無い現段階では、溝出土遺物であっても記述を進め、今後の検討の備えとしたい。

第I様式の一括資料としては、図30-65~70、図31-71~75に示した住居3出土土器がある。新段階に相当する。

壺のうち、頸部の形態が判るものは4個体あるが、いずれも広口壺である。頸部が短いもの(65)と長いもの(66・67・68)がある。また体部の形態が判るものは2個体ある(67・69)。最大径を

その中位に持ち、高さの割に径が大きくやや偏平な感を与えるものである。文様は、頸部に1条の貼付突帯を巡らせるもの(68)と多条化したヘラ描沈線文を巡らせるもの(65~67・69)がある。65は2条のヘラ描沈線文を施すが頸部を完周しない。

壺は1個体がある(71)。口縁部は外反して大きく開き、内面に横位のハケメ調整を行う大和形壺である。

第II様式の資料としては、大溝出土資料があるが、ことに2層出土遺物(図25-17~21、図26-22~31)は、器種・個体数共に比較的豊富である。

壺は、住居3出土のものに比べて頸部の長頸化が発達した広口壺を主体とするが、頸部が短いものの(23)や細頸壺(21)も存在する。体部は長胴化するもの(17)のほか、偏平な感を与えるもの(19)、球形に近くなるもの(18・22)がある。文様は櫛描文を主とするが、17は口縁端面に1条のヘラ描沈線文を施しその上下に刻目を施す。また頸部および体部上半は櫛描直線文で飾るが文様帶の上下端にヘラ描沈線文を施している。櫛描文は直線文・波状文(19)のほか、直線文の文様帶間に扇形文を対向する2方向に描くものがある(21)。

壺は口縁部が外反して開くもので、端部に刻目を施すものや、体部外面をハケメ調整で仕上げ、口縁部内面にも横方向のハケメ調整をする大和形壺(24・25)や、体部に櫛描文を施すいわゆる播磨形壺(27)、頸部外面をヨコナデ、体部外面をヘラケズリで仕上げる紀伊形壺(26)も見られる。26は、上記のように胎土おいても結晶片岩が認められることから紀伊産の搬入品と判る。

鉢は、直口口縁のもの(30)で、櫛描文で体部外面を飾り、内面をヘラミガキで調整している。大溝2層出土資料にはほかに甕用蓋(31)があった。

さて、当該資料の中にはヘラ描沈線文と櫛描文を同一個体に持つもの(17)が存在している点は注目される。従来の編年では第I様式と第II様式は、ヘラ描沈線文の消長および櫛描文の出現によって区分されてきたが、近年このようなヘラ描沈線文と櫛描文の共存段階を、その過渡期的段階と位置付ける考えも示されている。ここでは、文様構成が櫛描文を主とすることから、当該土器群を第II様式の前葉期に位置付けておきたい。

第III様式の資料は、個々の資料が必ずしも良好な遺存状態ではなかったが、古段階のものに、溝28下層出土土器(図37-141~151)が挙げられる。

広口壺は体部の形態が判るものはなかったが、口縁部の形態によって、3種に分けられる。すなわち、口縁端部が面をなすもの(144)、端部上端をハネ上げる傾向にあるもの(143)、端部を垂下させるもの(141・142)がある。垂下させるものはこの段階で、その屈曲がより明瞭になる。

壺は大溝2層にみられた紀伊形壺が消滅し、替わって、外面をヘラケズリで仕上げる四分形壺が出現する(146)。大和全体では四分形壺の出現は第II様式の内に認められる。今回の調査では第II様式の後葉に相当する時期の資料が明確ではないが、萬城地域においては第II様式の段階では紀伊形壺の影響が強く、四分形壺の出現が遅れる可能性がある。

鉢は、口縁部を下方に屈曲させるもの（147）、ほぼ水平に屈曲して開くもの（148）、体部が内弯して口縁端部が面をなすもの（149・150・151）がある。文様は、無文のもの（151）もあるが、147～150は体部に櫛描直線文を施し、149・150は文様帶間にヘラミガキを施す。また149・150は、口縁端部に櫛描波状文を施す。

第Ⅲ様式（新）の資料は、溝23出土資料（図36-132～135、図37-136～140）、溝44出土資料（図39-164～174）がある。

溝23のものでは、広口壺は、口縁端部のハネ上げが顕著になるもの（132・133）や、長頸のもの（135）が見られる。ハネ上げ口縁とするものは、口縁端面に櫛描列点文（132）、櫛描波状文（133）を施す。長頸のもの（135）は、頸部から体部にかけて櫛描直線文を施し、文様帶間に1条のヘラミガキを加える。壺にはほかに、受口状口縁を有するもの（134）、小形の台付無頸壺（139）がある。134は、口縁部外面に櫛描波状文、頸部外面に櫛描直線文を施す。139の体部外面は流水文によって飾られる。壺・鉢・高杯は各1個体を岡化できた。136は体部外面をヘラケズリする四分形壺である。137の台付鉢はほぼ直立する口縁部をもつ。口縁端部の折り返しは鉢部に密着し僅かに肥厚する程度になっている。外面は、口縁部に櫛描簾状文、底部にヘラミガキを施す。高杯138は、垂下口縁を有するものである。垂下部上下端に凹線文を施す。

溝23では、これらのはかにミニチュアの壺形土器（140）を検出した。

溝44では、壺、甕、甕用蓋等が出土した。

壺は、いずれも広口壺であった。口縁端部をハネ上げるもの（166）、口縁端部を上下に肥厚させるもの（167）のほか、頸部が外反して開き、口縁部は面をなすもの（164）、付加状の口縁をもつもの（165）がある。壺はいずれも櫛描文で飾るが、凹線文はみられない。甕は、外面をヘラケズリで仕上げる四分形甕（169）、体部外面を縱方向のハケメで、口縁部内面を横方向のハケメで調整する大和形甕（170）、口縁端部をハネ上げる瀬戸内系甕（168・171）がある。瀬戸内系甕は口縁端部外面に凹線文を施す。鉢（173）は椀形を呈するもので、口縁部に4条の凹線文を施す。体部はヘラミガキとする。高杯（174）は杯部に稜をもつもので口縁部に4条の凹線文を施す。

これら溝44の出土の資料には甕口縁端部に凹線文が施されるなど、新しい要素がみられるのであるが、第IV様式で壺の口縁端部に特徴的にみられる凹線文が、当該資料には認められず櫛描文で施文されている。このことを重視し当該資料をより古い第Ⅲ様式（新）に位置付けたものである。

第IV様式の一括資料は検出できなかったが、第V様式の一括資料としては、土坑2・7～10、溝14の土器がある。特に土坑出土のものは祭祀にかかわって埋置もしくは投棄された土器であり、その一括性は極めて高いものと思われる。また土坑7～8では長頸壺が多く出土し特徴的であった。

土坑2（図31-81～85）では、長頸壺（81）、甕（82）、鉢（83）、高杯（84・85）を岡化した。いずれも図10-2層出土のものである。長頸壺81は、体部のみが遺存した。下半部に長径2.8cmの焼成後の穿孔があった。甕82、鉢83はいずれも外面にタタキ痕跡を明瞭に残している。高杯84・85は、

いずれも、外面のヘラミガキが丁寧である。杯部の形状が判る84は、口縁部がわずかに外反して開くもので、端部は丸く收める。脚部には5方向に径1.1cmのスカシ孔を穿つ。

土坑7（図32-86～89）では、長頸壺（86～88）、甕（89）を図化した。長頸壺では、器高30cmを越え、頸部長が体部高にはほぼ等しく、頸部が直線的に外傾して開く86、およびそれとほぼ同様な形態を示しながら、器高が24.8cmとやや小形のものとがほぼ完形で出土し、同一層中に、頸部のみであるが、外反して開く88が共伴した。なお、89は、甕底部であるが、これについては古い時期のものと考えられるので、混入品と判断できる。

土坑8（図32-90～94）では、広口壺（90・94）、長頸壺（91・93）、細頸壺（92）を図示した。広口壺90は頸部が僅かに外傾して立ち上がり、口縁部は屈曲して開く。端部は丸く收める。外面はハケメ調整する。94はやや大形なものの体部である。外面は丁寧にヘラミガキを重ねる。長頸壺91は、外面をハケメ調整とし、93もハケメ調整を行うが、下半部にはタタキ痕跡が残っている。外面の調整としては粗略化の傾向が見られる。細頸壺92は、体部がやや扁平なものである。外面はヘラミガキを重ねて、丁寧に調整する。

土坑9（図33-95～98）では、長頸壺4個体を図示した。器高30cmを越え、頸部が直立して立ち上がる95に共伴して、頸部がやや短い96や、頸部の長さが体部高の1/3程度になる97・98が出土した。また97の頸部は98のそれに比して開いており、くびれ部分は98より明瞭である。外面調整はヘラミガキを重ねるもの（95・98）、ケズリ後ナデ調整するもの（96）、ハケメ調整するもの（97）がある。

土坑10（図33-99・100、図34-101～107）のうち、99は上層の出土で他と区別される。長頸壺は、100が器高29.7cmとやや大きくその他は25cm内外のものである。それらの形態をまず頸部の長さと体部の高さの比率でみると、頸部の長さが体部高と同程度かやや短いもの（100・101・102）と、それが1/3強となるもの（103・104・105）に分けられる。また口頸部の形態は、両者とも、頸部が外上方に直線的に伸び口縁端部が強いヨコナデによって外反するもの（100・104・105）、頸部が直立ぎみに立ち上がった後緩やかに外傾し口縁部が屈曲して開くもの（101）、頸部が緩やかに外反し口縁部が角度を変えて直立ぎみになるもの（102・103）がある。さらに体部の形態は、最大径が上半にあるもの（100・103）、ほぼ中央にあるもの（101・102・104）、下半にあるもの（105）がある。くびれ部分については、頸部が長いものは縦じて明瞭であるが、短いものでは、比較的明瞭なもの（104）と、不明瞭なもの（105）がある。また外面の調整では、タタキ痕跡を残すもの、ハケメ調整するもの、ヘラミガキを重ねるものがある。

溝14（図35-118～120）では、広口壺（118）、長頸壺（119）、甕（120）が図化できた。広口壺118は、やや小形のものであり、頸部は体部から直立ぎみに短く立ち上がった後、屈曲して開く。外面は体部下半にタタキ痕跡を残す。長頸壺119は、体部と頸部の接合部分である。体部最大径に比して頸部が太く、頸部は外反しながら開くものである。外面は縦方向のハケメ調整としている。甕120は底部を欠損している。

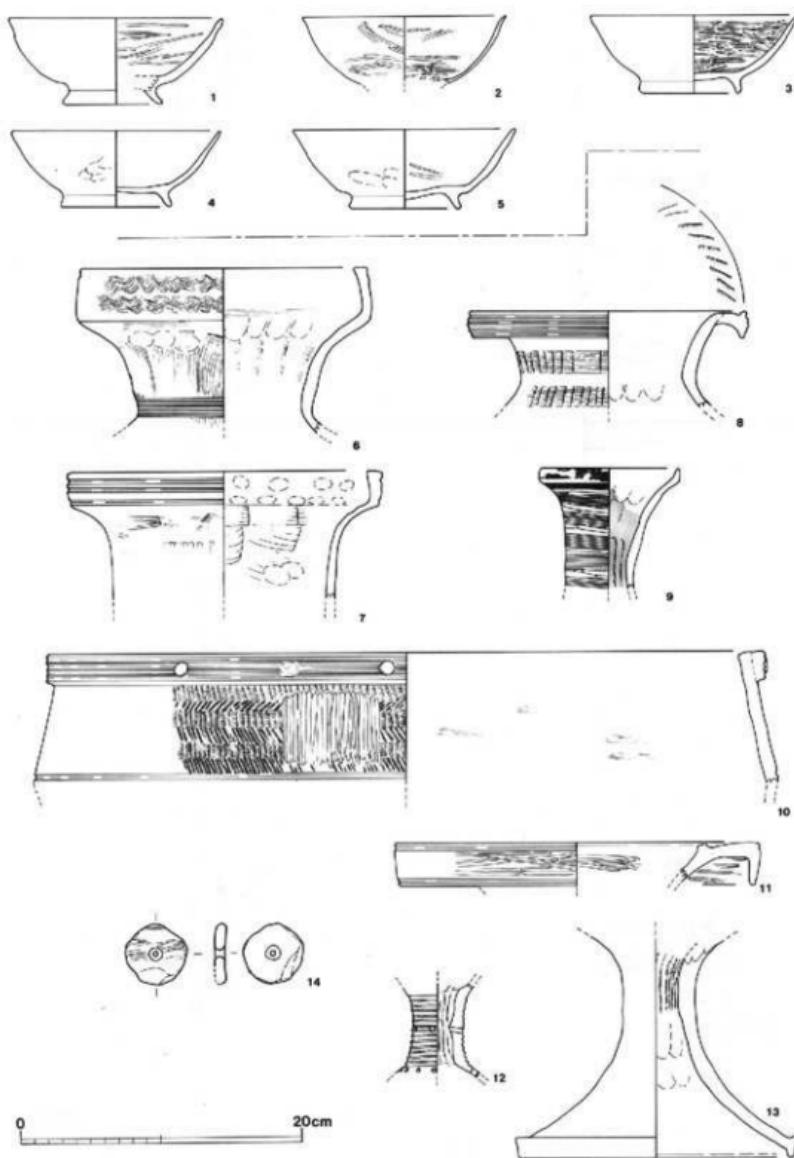


図24 出土遺物（上段：図4の4層、下段：図4の6層）S. =  $\frac{1}{4}$

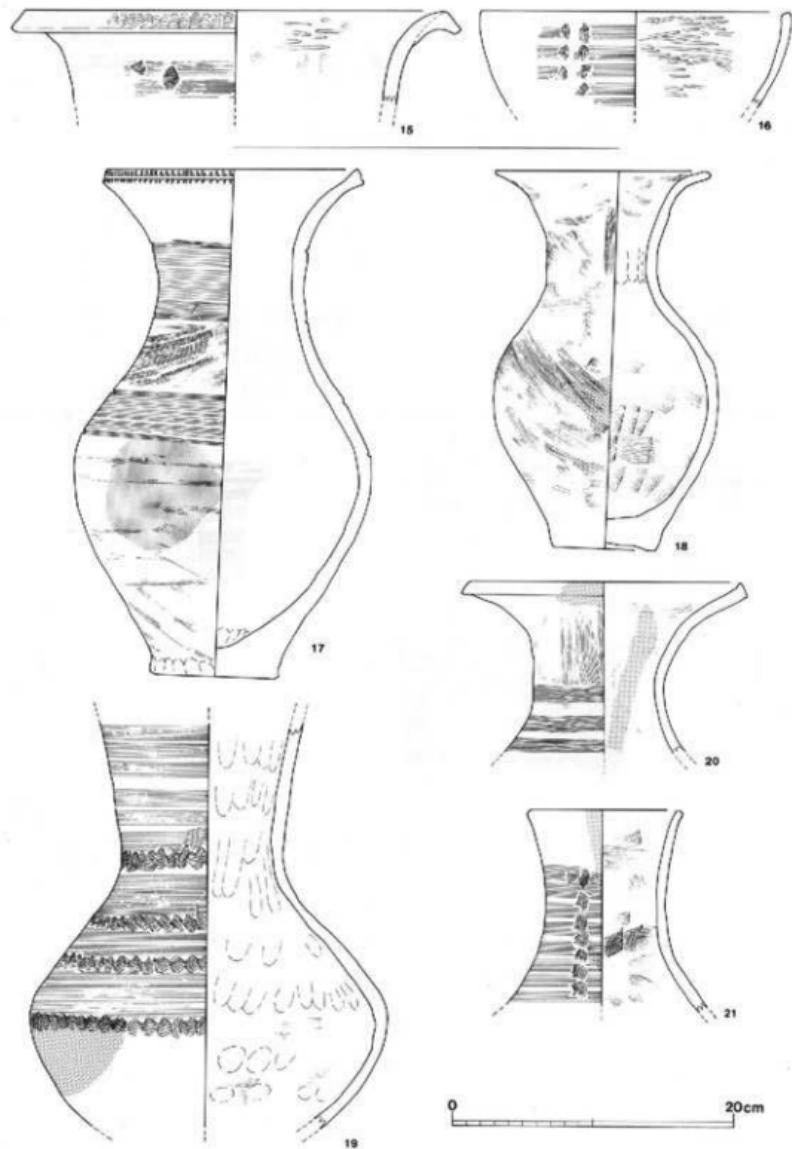


図25 出土遺物（上段；図4の7層、下段；大溝2層）S. = 1/4

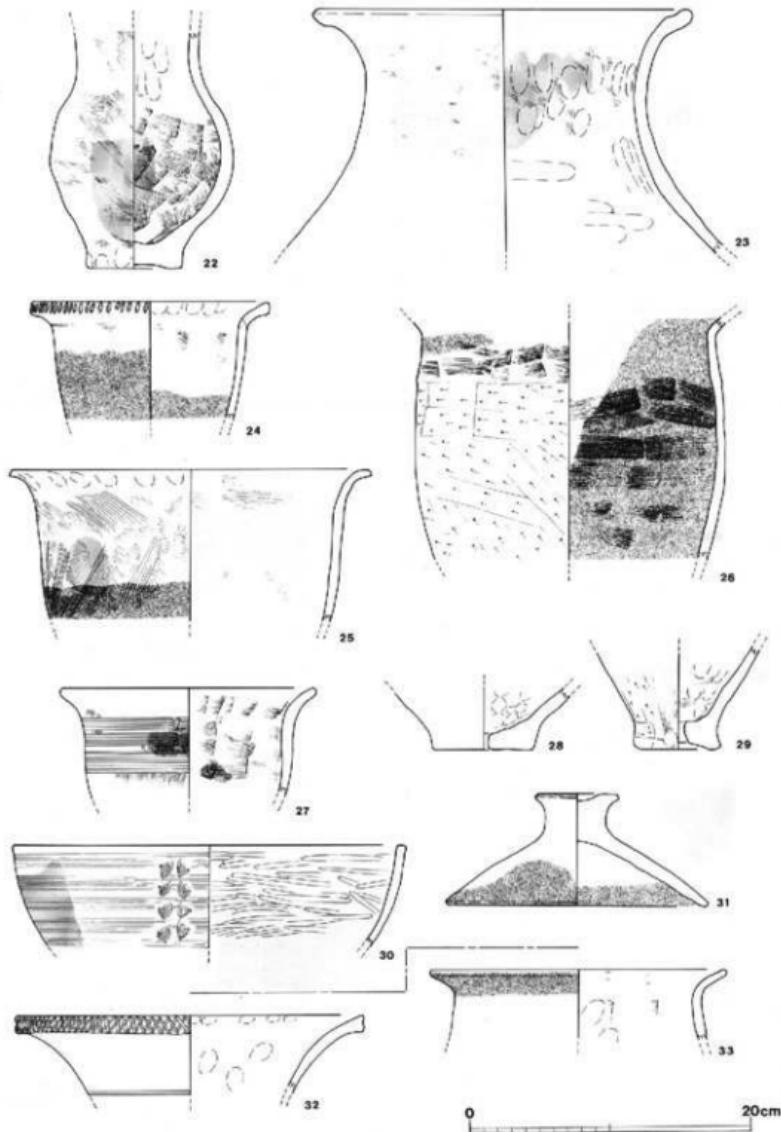


図26 出土遺物（上段；大溝2層、下段；大溝3層）S. =  $\frac{1}{4}$

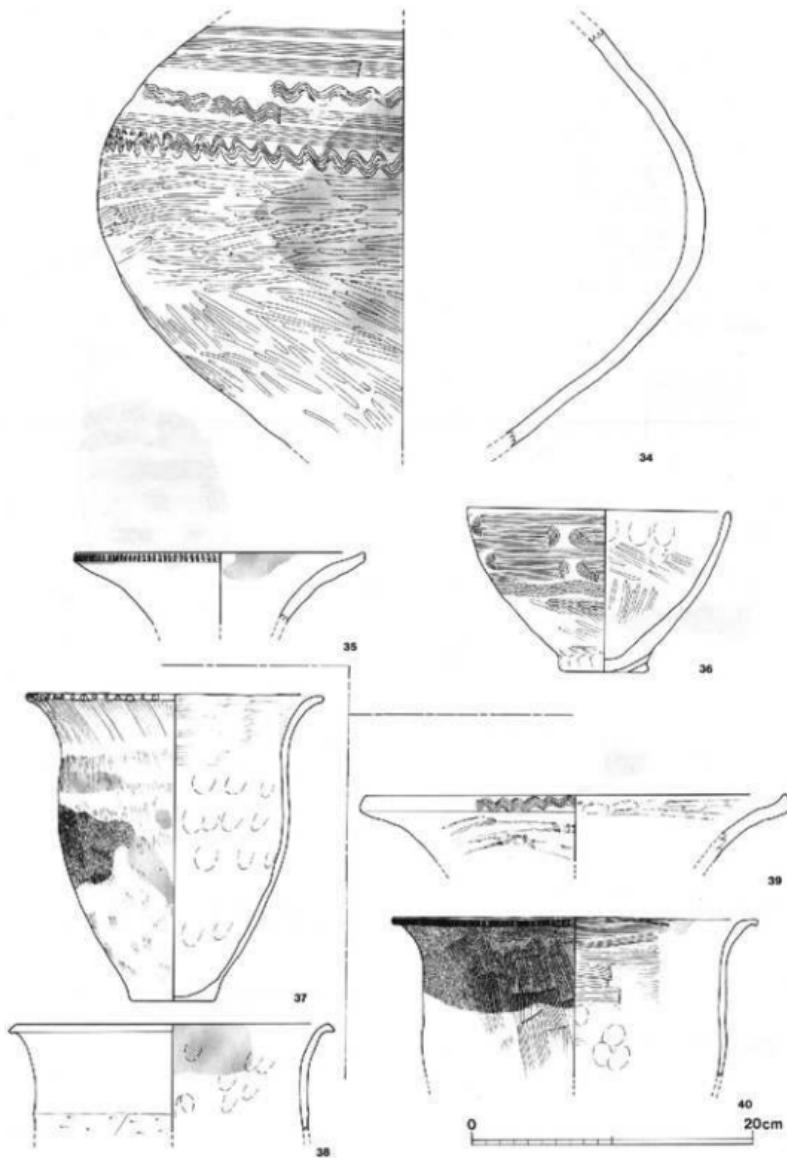
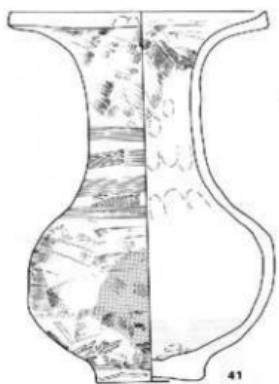


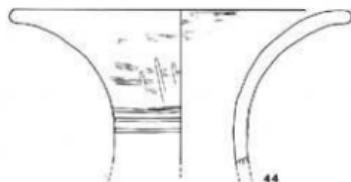
图27 出土遗物（上段；大溝4 a層、下段左；大溝4 b層、下段右；大溝6層）S. = ¼



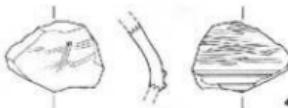
41

42

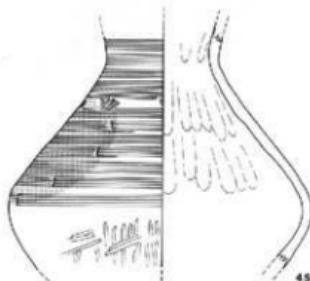
43



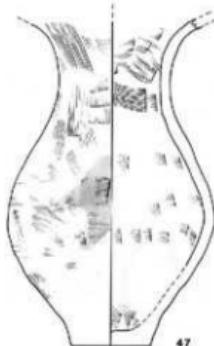
44



46



45



47



図28 出土遺物（上段；大溝8層、下段；大溝10層）S.= $\frac{1}{4}$

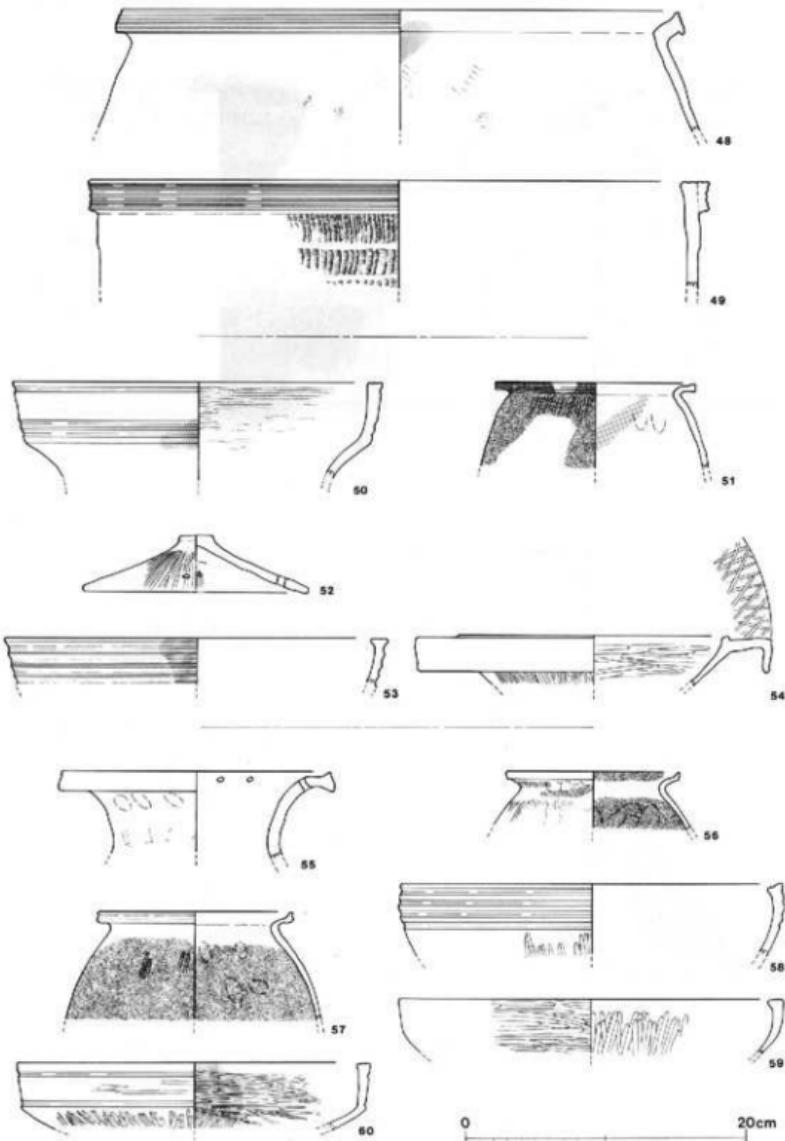


図29 出土遺物（上段：住居1-1層、中段：住居1-3層、下段：住居1壁溝）S. = ¼

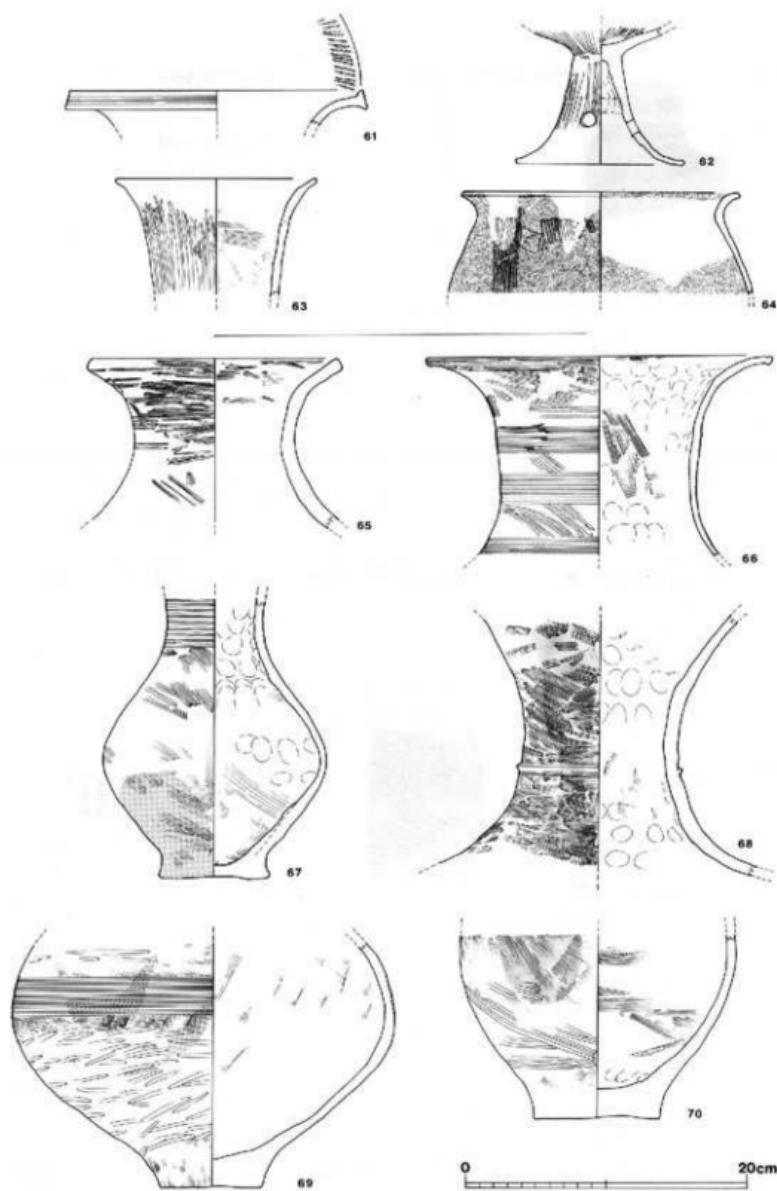


図30 出土遺物（上段；61・62住居2壁溝 63・64住居2 ピット364、下段；住居3）S.=1/4

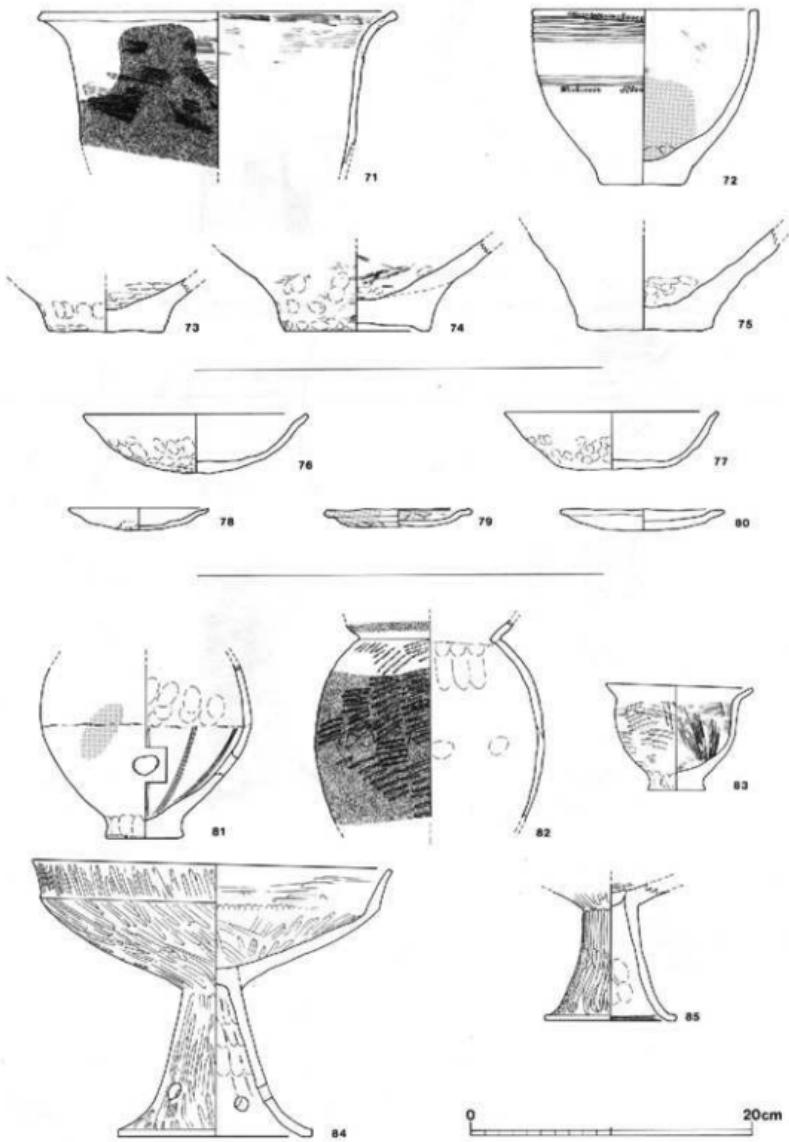


图31 出土遗物（上段；住居3、中段；土坑1、下段；土坑2）S.= $\frac{1}{4}$

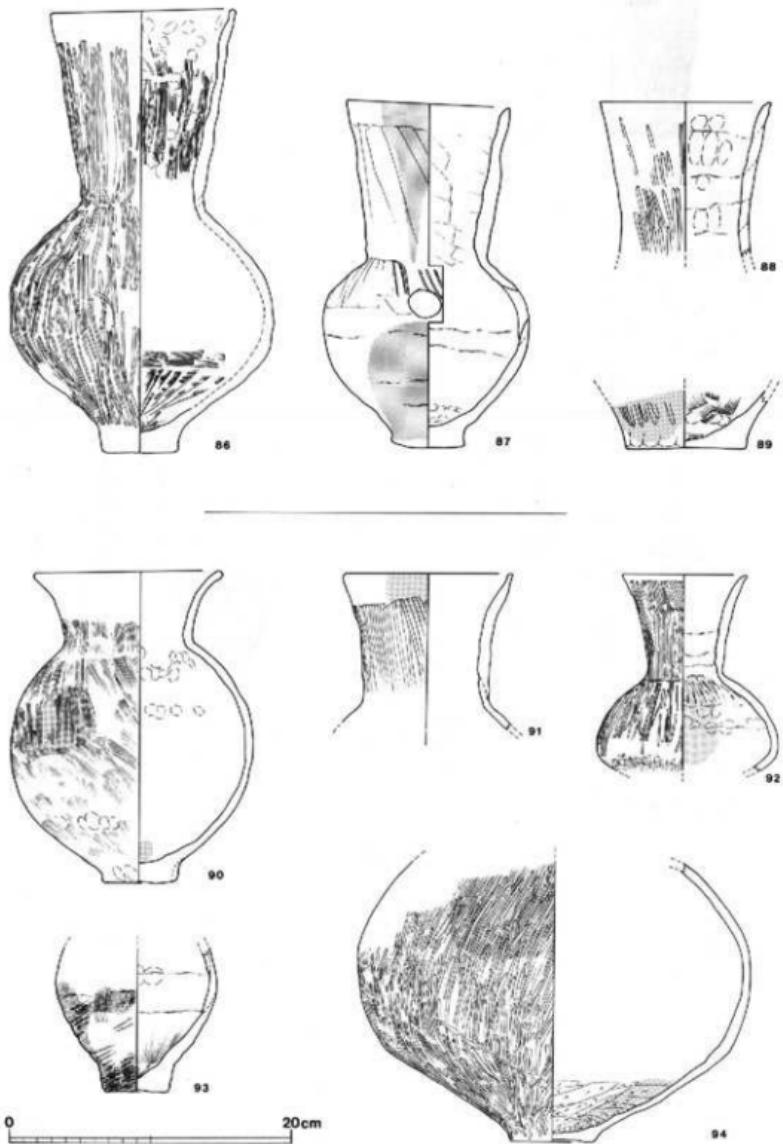


图32 出土遗物（上段；土坑7、下段；土坑8）S. =  $\frac{1}{4}$

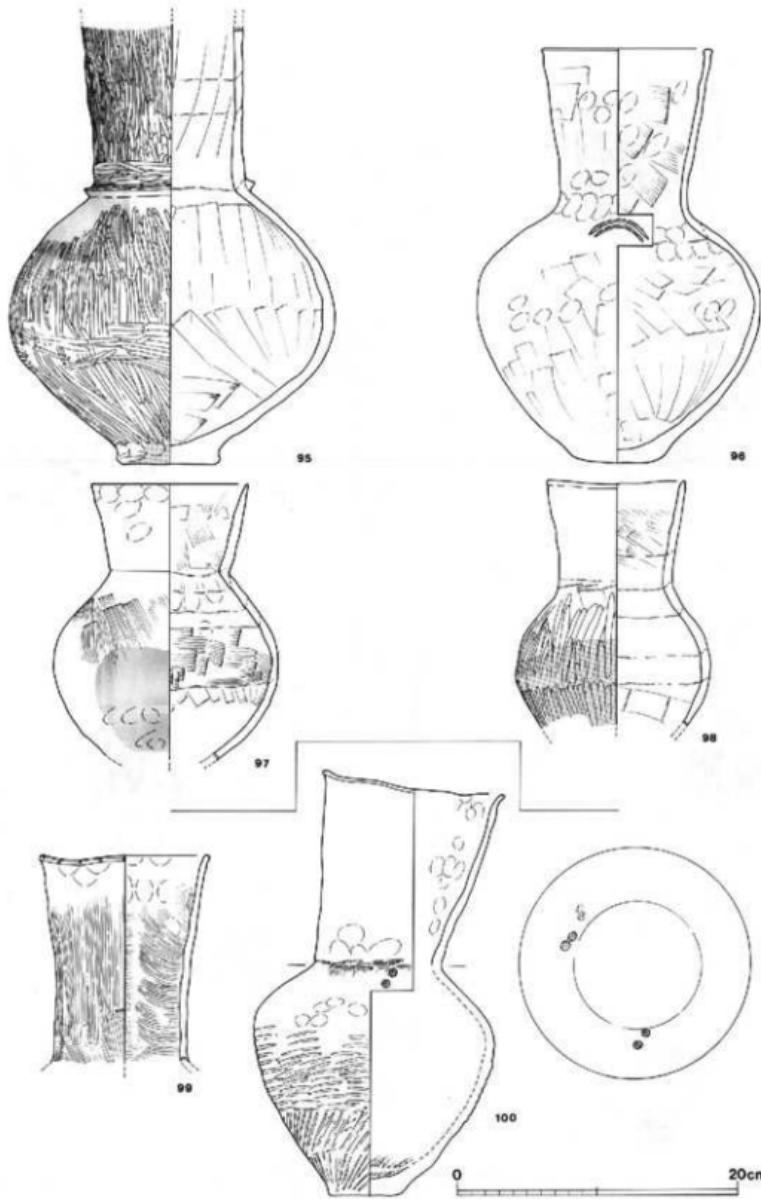


図33 出土遺物（上段：土坑9、下段：土坑10）S.= $\frac{1}{4}$

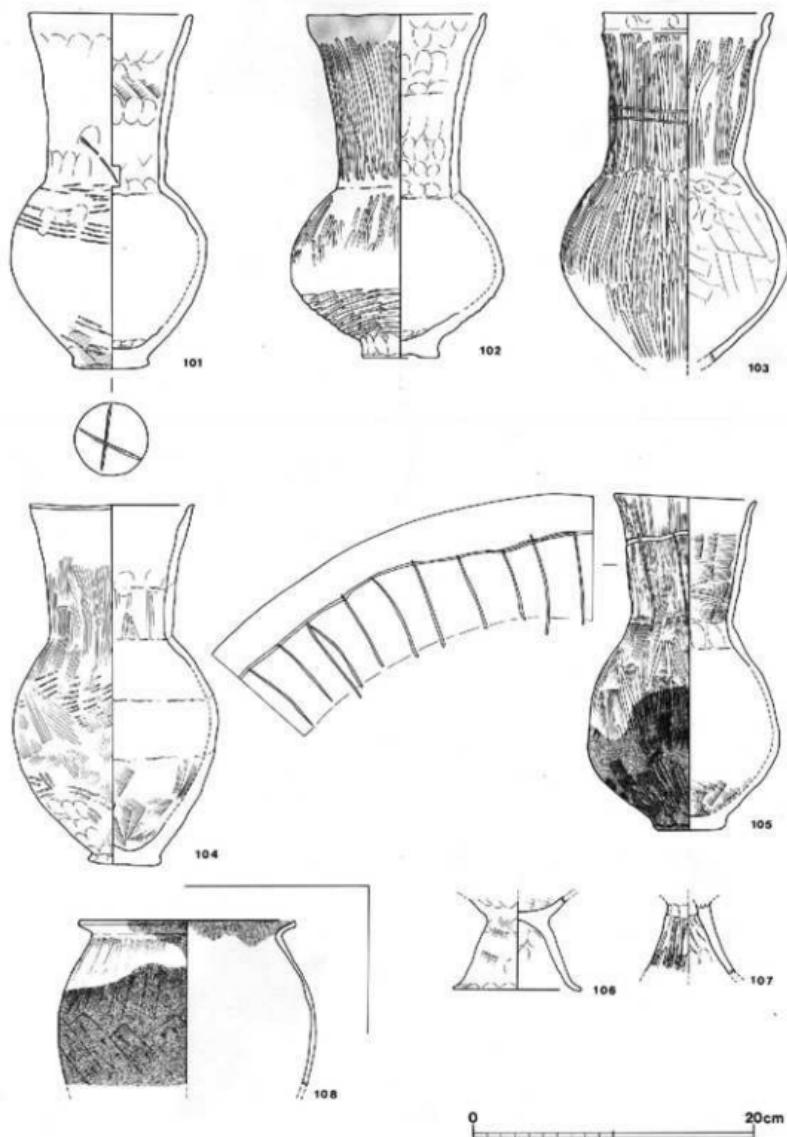


图34 出土遗物（上段；土坑10、左下；土坑11）S.= $\frac{1}{4}$

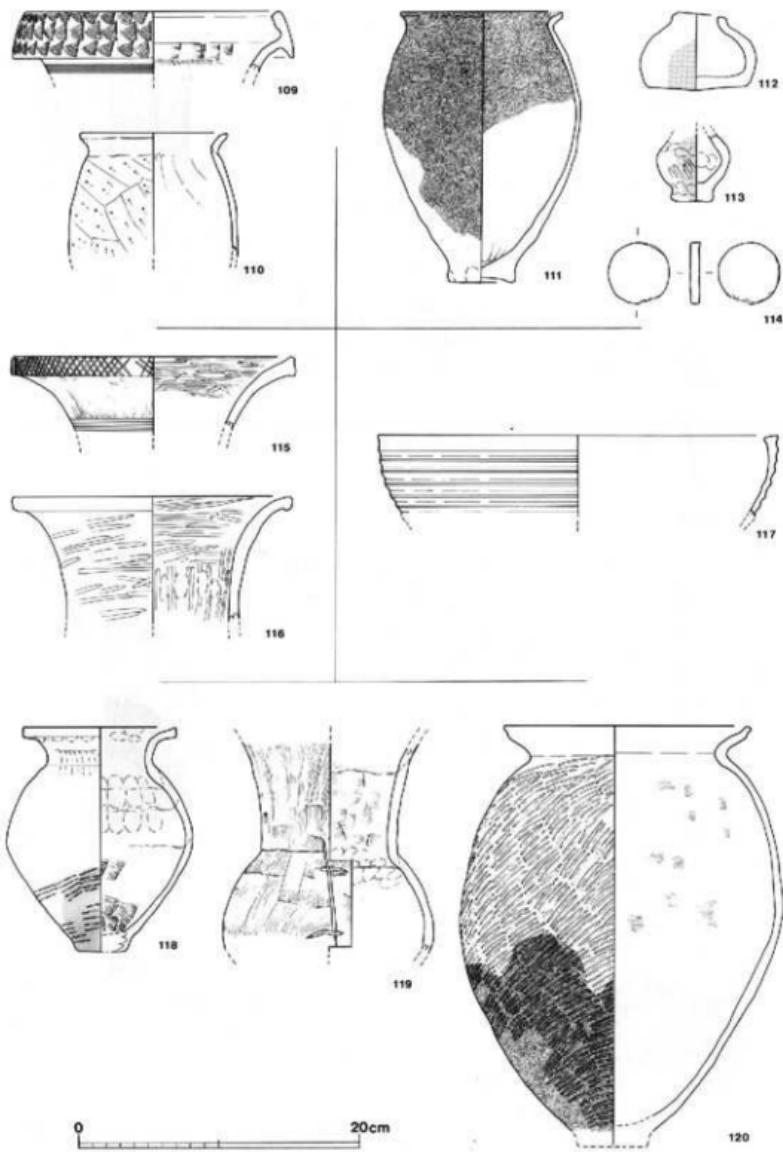


图35 出土遗物（上左：土坑6、上右：土坑12、中左：土坑13、中右：沟5、下：沟14）S.= $\frac{1}{4}$

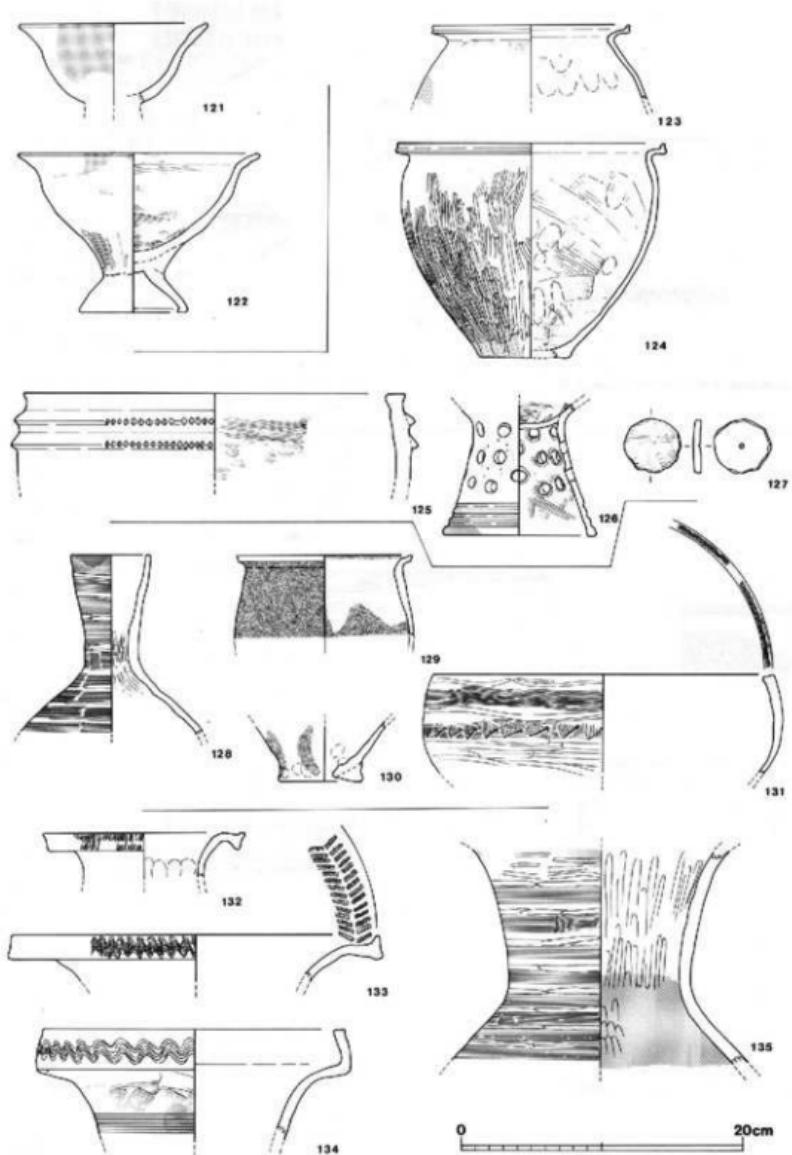


図36 出土遺物（上左；溝15、上右；溝16、中段；溝24、下段；溝23）S.=1/4

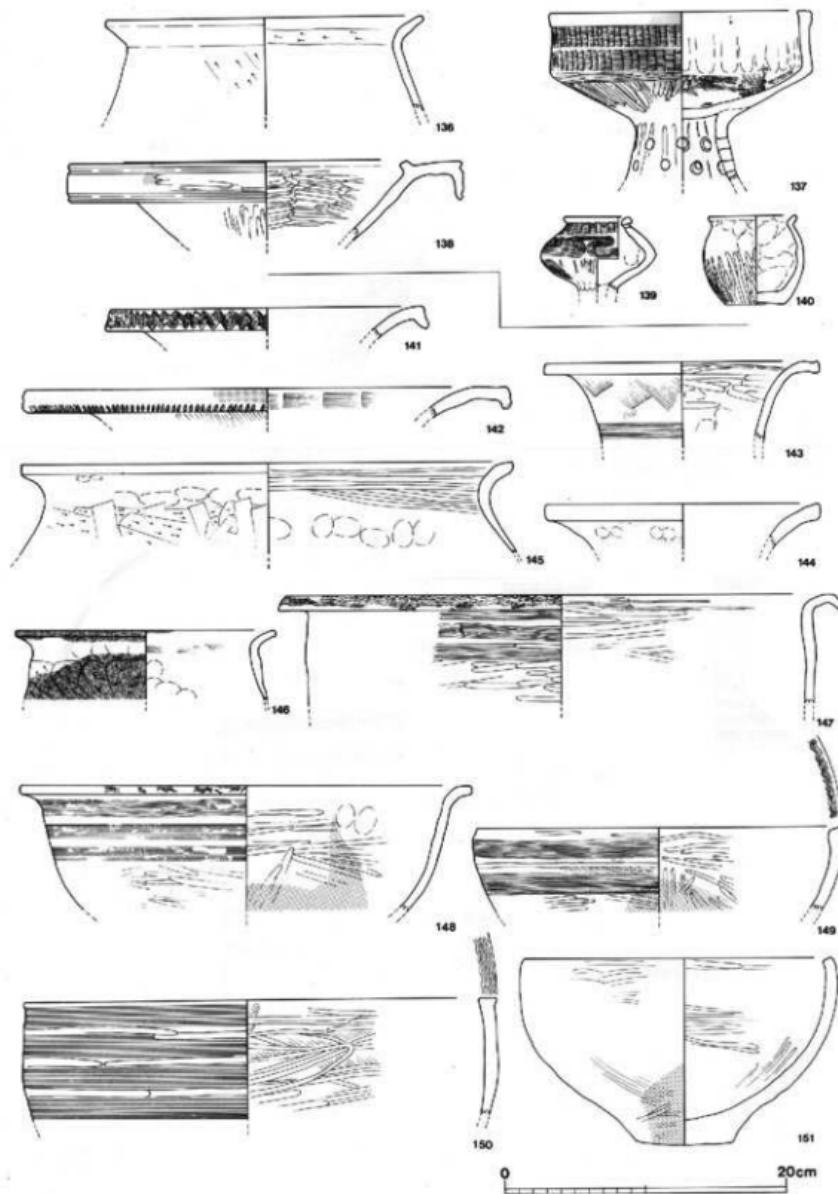


图37 出土遗物（上段：溝23、下段：溝28）S. = ¼

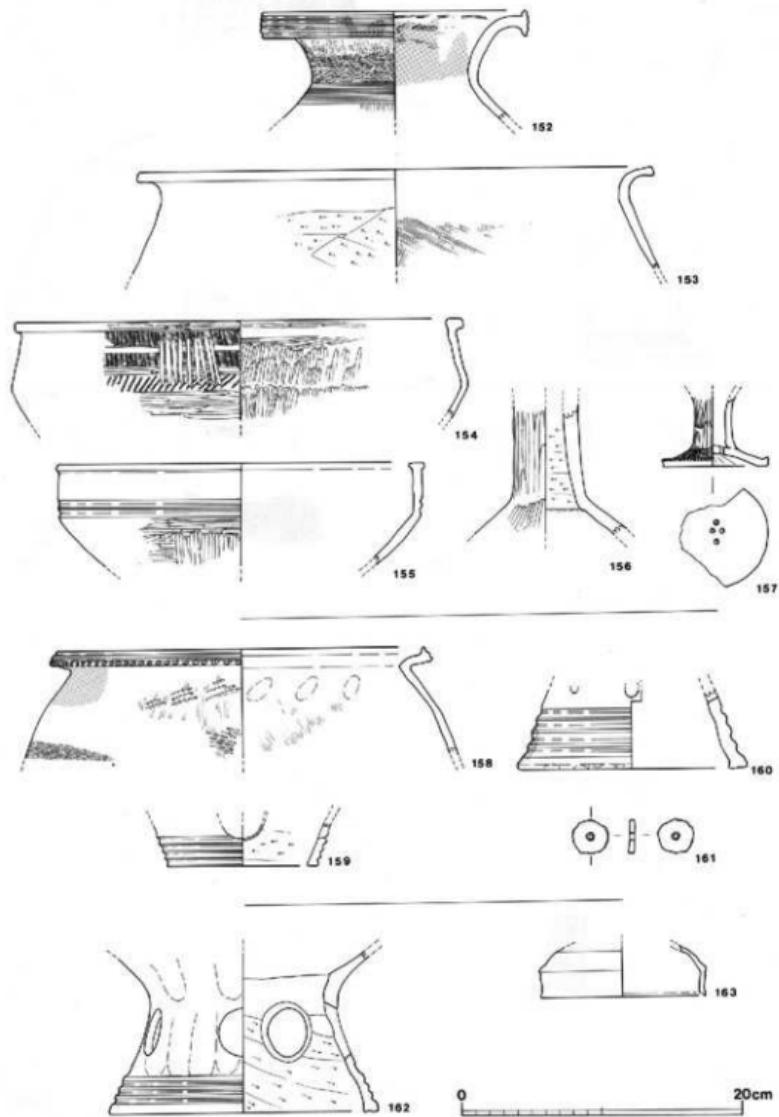


图38 出土遗物（上段；溝30、中段；溝32、下段；溝38）

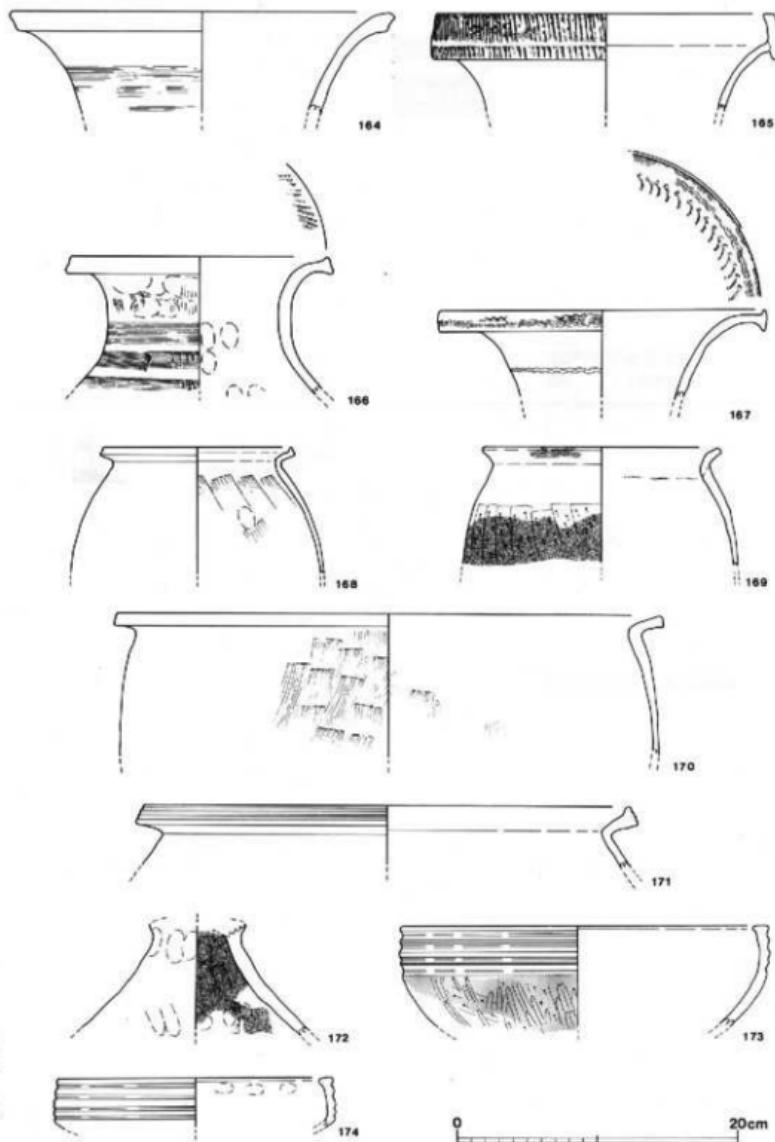


図39 出土遺物(満44) S.= $\frac{1}{2}$

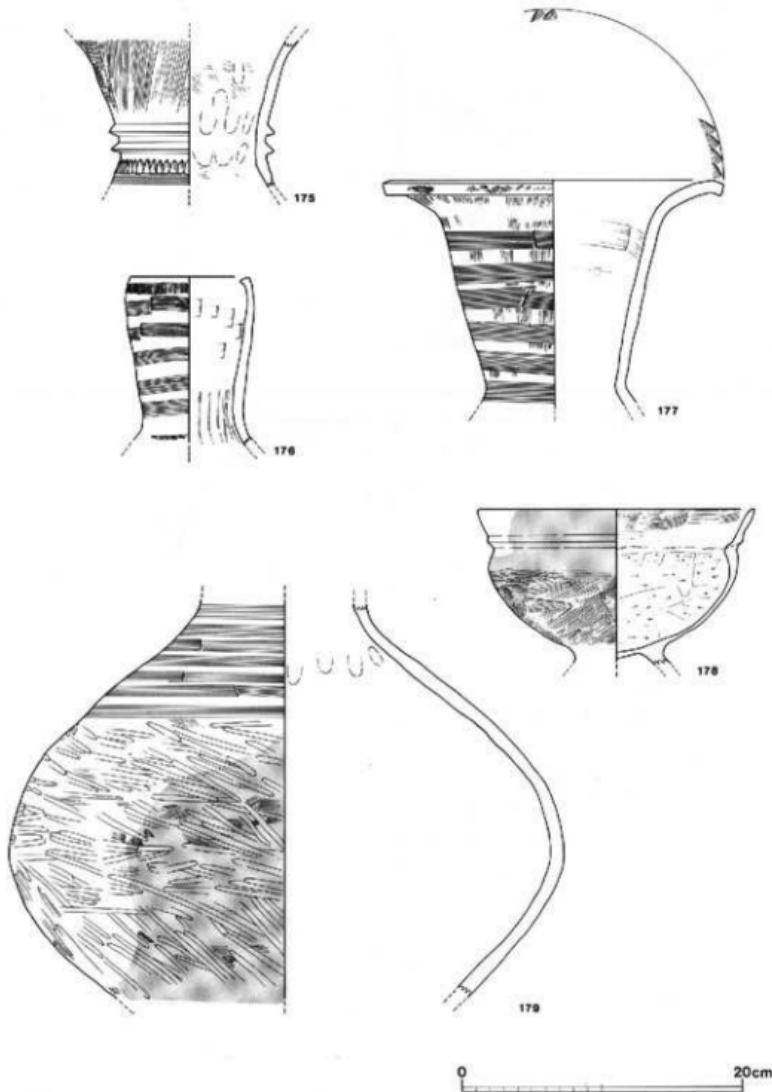
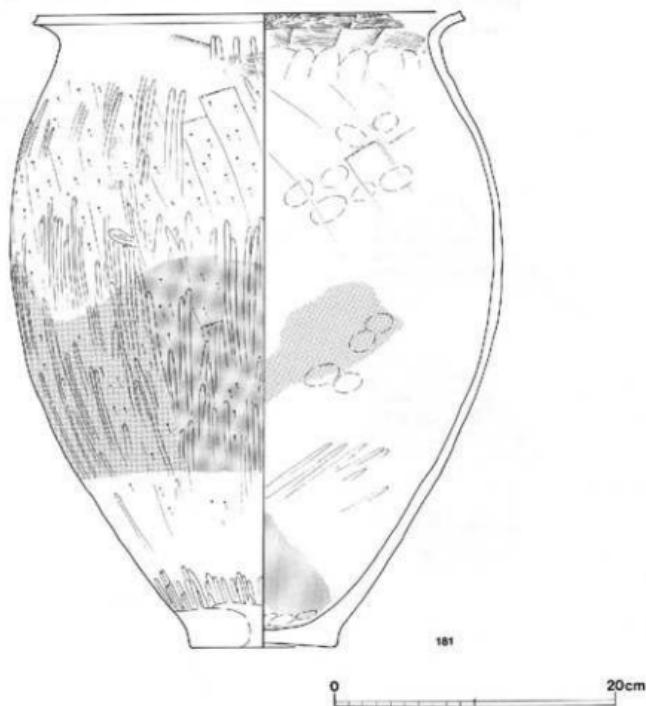
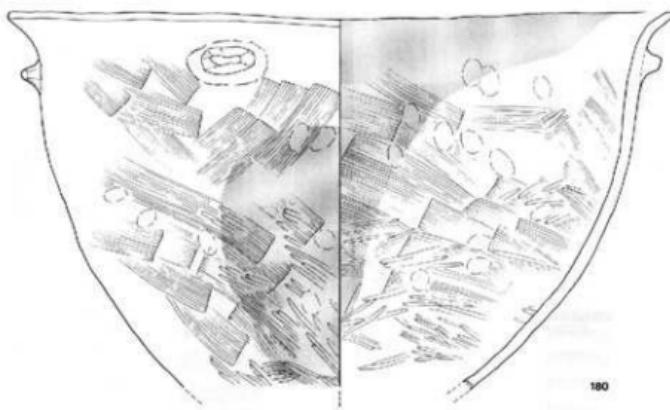


図40 出土遺物 (175・176; ピット204、177; ピット145、178; ピット365、179; 2区焼上) S. = ¼



0 20cm

图41 出土遗物 (180; 2区烧土、181; 埋甕) S.= $\frac{1}{4}$

## 第2節 石 器 (図42~44)

石器についても多量の出土を見た。ここでは、製品もしくはそれに近いもの、41点について図示した(図42~44)。石材種については、第6章第1節奥田報文を参照されたい。

各石器の出土地点は次の通りである。

182~185; 図4-4層	186~192; 図4-6層	193; 図4-7層最上面
194・195; 大溝10層	196~198; 住居1-3層	199; 土坑5
200~206; 土坑12-最下層	207・208; 土坑13-1層	209; 溝23-4層
210~214; 溝24-2層	215~217; 溝28-2層	218・219; 溝32-2層
220; 溝44-1層	221; ピット68	222; ピット913

図化できたものは、石包丁23点、石鎌6点、短剣3点、石斧3点および紡垂車(未製品)、石匙、石鍤、砥石、浮子、石小刀が各1点である。

石包丁の大部分は、背部が弯曲して刃縁が直線上を呈する半月形のものが主体を占めるが、刃部が外弯するもの(195・202・207・209・216・217)、刃部が内弯するもの(188・194・197・213)、全体の形状が楕円形を呈するもの(185・204)もある。刃の形状は片刃のものが多く、両刃のものは、185・195・204・218・213である。また217・219は紐孔が未完成である。217は一方に内孔径2mmで貫通しているが、一方は貫通しない。穿孔は厚さの半分程度まで窪められた状態で中止され、裏面の対応する箇所には穿孔のための刺突状の痕跡が残されている。219は、貫通するものではなく、217と同様の窪み、刺突状の痕跡が残る。使用痕については、188・195・196・197・198・203・204・207・213・218に認められた。刃こぼれは195・204に見られた。また、222は火熱を受けて変色していた。

石鎌は、凹基無茎式(182)、凸基無茎式(183・184・199・210)、平基無茎式(193)がある。それぞれの法量は、182は長さ3.1cm、幅1.5cm、厚さ0.4cm、重さ0.9gを測る。183は長さ4.3cm以上、幅2.3cm、厚さ1.0cm、重さ7.7g以上である。184は長さ4.0cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、重さ2.0gである。193は、長さ3.5cm、幅1.1cm、厚さ0.4cm、重さ1.6gである。199は長さ4.3cm、幅1.6cm、厚さ0.7cm、重さ4.1gである。210は長さ3.0cm以上、幅1.2cm、厚さ0.3cm、重さ1.4g以上である。

短剣は、従来石槍と呼ばれてきた形態のものである。189は長さ19.0cm、幅3.0cm、厚さ1.1cmを測る、完形のものである。基端から約7cmまでの両側辺は刃潰しが施されている。190は長さ15.2cm、幅3.0cm、厚さ1.7cmを測る。完形で出土した。189より調整が粗雑なものである。189と同様に、基端から約7cmまでの両側辺は刃潰しが施されている。205は先端部を欠損している。長さ6.1cm以上、幅2.3cm、厚さ1.0cmを測る。両側辺は刃潰しされている。

石斧は192・201・212がある。192・201は太型蛤刃石斧である。212は刃部を欠損していることから明確ではないが、基部は偏平なものである。いずれも外面は研磨されるが、201は特に平滑に仕

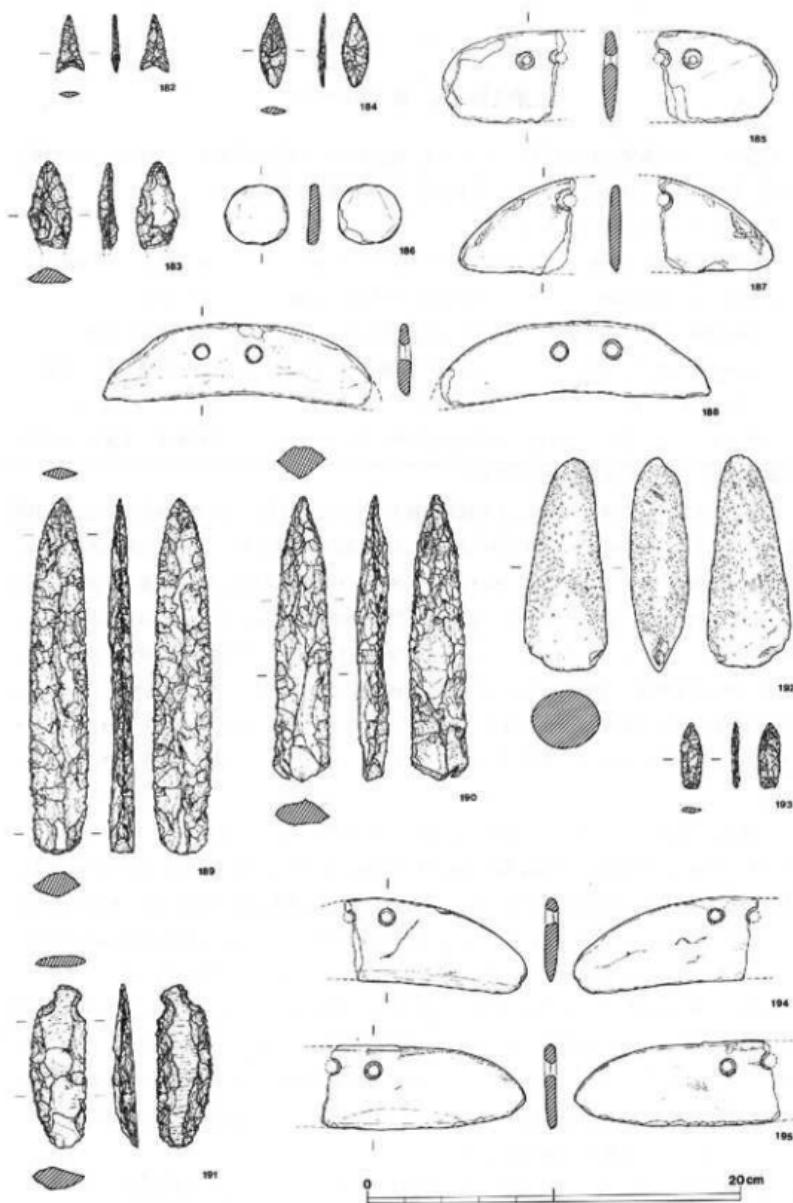


図42 出土遺物 石器 (S. =  $\frac{1}{2}$ )

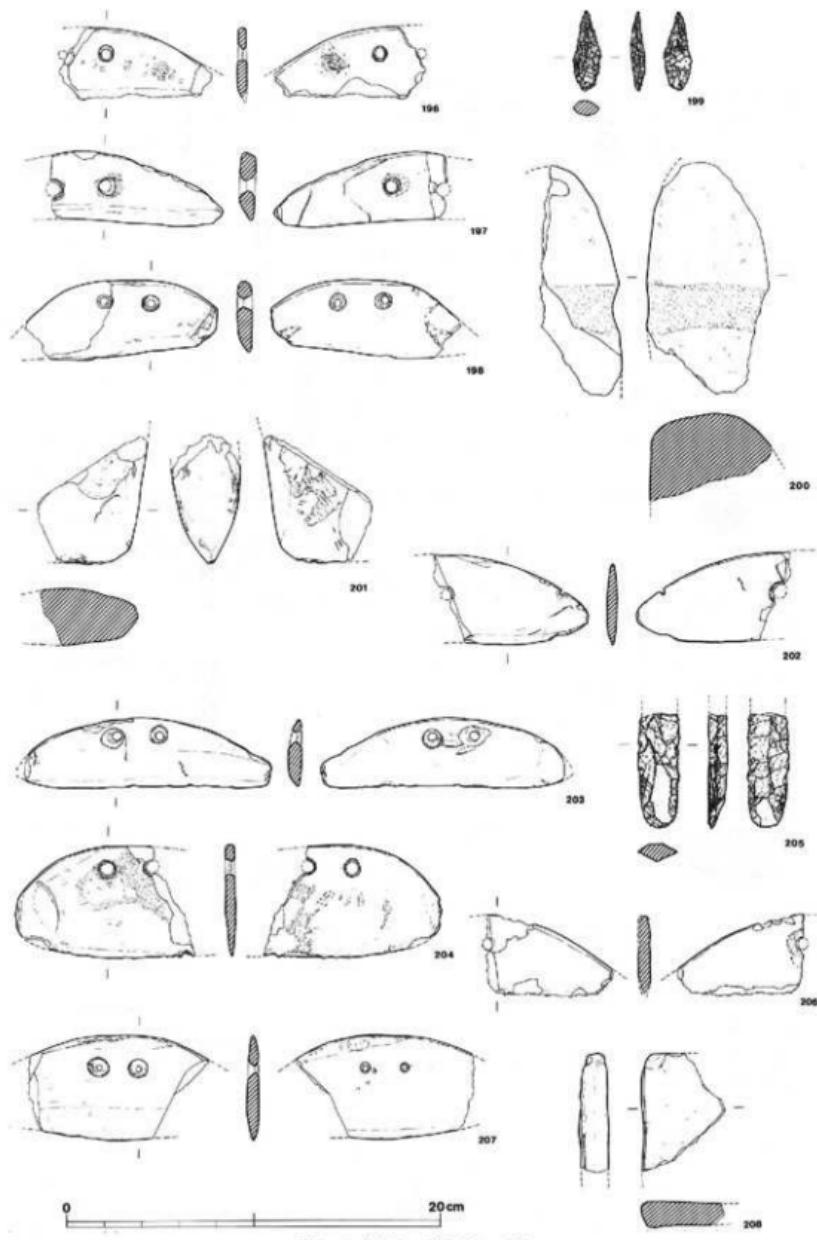


図43 出土遺物 石器 (S. = 1/2)

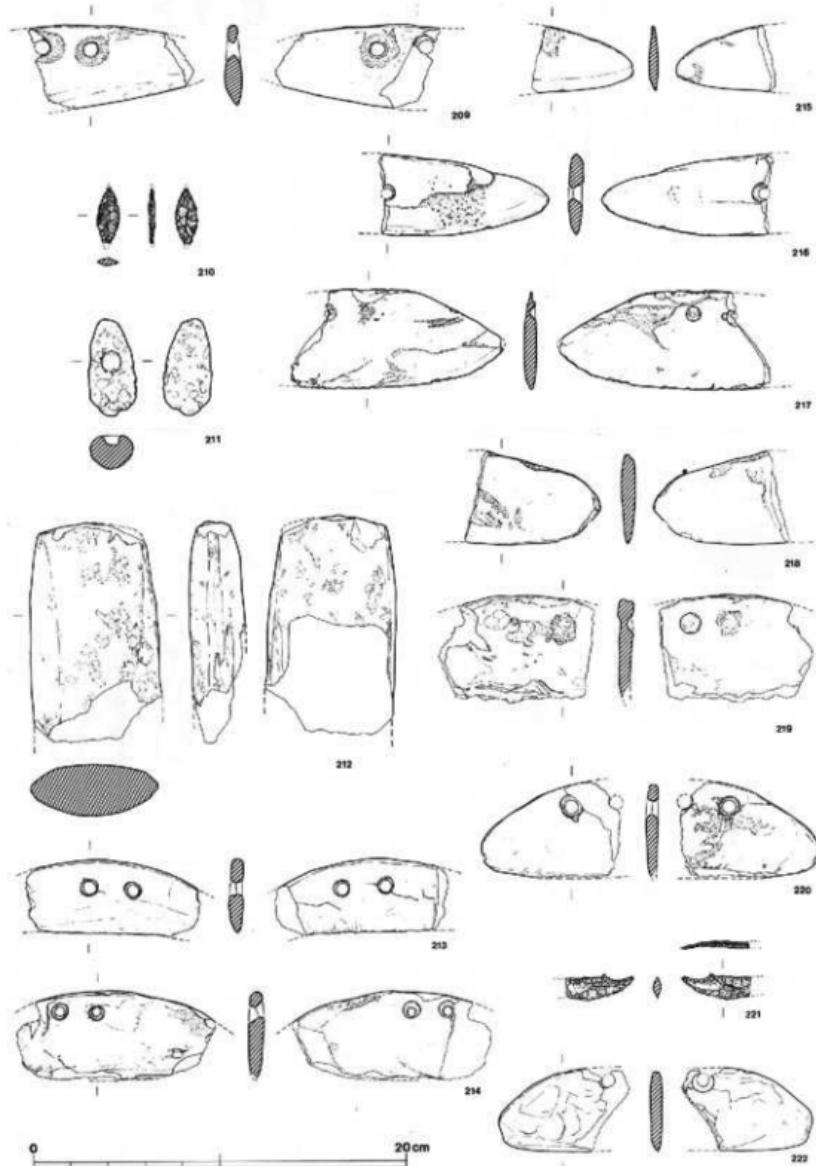


图44 出土遗物 石器 (S.=½)

上げられている。刃面の使用痕跡は192は不明瞭であるが、201は明確に認められた。

その他の石器の法量を記しておく。紡錘車（未製品）186は径3.3cm、厚さ0.5cmを測る。石匙191は長さ8.8cm、幅2.5cm、厚さ1.1cmを測る。石鍤200は、多くの部分を欠損しているが、遺存している部分から長さ15cm、幅6.5cm、最大の厚さ8cm程度の、やや大型のものになると思われる。砥石208は、端部が遺存したが、全体の形状は不明である。浮子211は径1.0cmの穿孔をしようとするが、貫通せず深さ0.6cmの窪みとなっている。石小刀221は、内刃側に突起がつくものである。基部は欠損しているためその形状は不明である。長さ3.7cm以上、幅1.1cm、厚さ0.4cmを測る。

### 第3節 木器・骨角器（図45～47）

木器は5点を図化した（図45・46）。骨角器については2点が図化でき（図46）、写真のみ掲載したもののは3点ある（図47）。

223・225は、大溝10層で検出した。223は臼である。口縁部を欠損する。底部径は12cmを測る。平面の形状は梢円形を呈する。内面にも工具痕跡を残すが、摩滅のため外面に比して不明瞭であり、比較的滑らかである。工具痕跡の幅は2.9～3.5cmで、断面はごく浅いU字状を呈する。木取りは継木取りで、心材を用いている。

225は、広歛の未製品である。頭部および舟形突起の一部が遺存していたものであるが、遺存部分から、頭部先端、側縁が直線状になって平面形が長方形を呈し、幅については16cm程度のものであったことが判る。後面には舟形突起をつくり出すが、柄孔はまだ穿孔されていない。工具痕跡は不明瞭であるが、幅2.0～2.6cmであり、断面はごく浅いU字状を呈する。

224は土坑13の1層で検出した。外面の形状は、223と同様であるが、底部が緩やかに突出し、上部もわずかに窪む程度である。臼の未製品と考えられる。上部での長径16.1cm、短径13.7cmを測る。底部では径11.5cm程度になる。工具痕跡は明瞭に残っており、幅は2.1cmで、断面は浅いU字状を呈する。

226は用途不明品である。溝28の埋土中より検出した。全体の形状は、長さ22.4cm、幅7.3cm、厚さ1.9cmの板状を呈する。両短辺から約2cmの所に、それぞれ長径1.6cm・1.3cmの穴を両側から穿孔している。工具痕跡の幅は1.7cmで、断面は浅いU字状を呈する。木取りは柾目材を使用している。

図46-227は、土坑12の1層で検出した。笄である。径0.6cmの細長い棒状を呈する。断面は円形である。一方の先端を尖らせ、他の方を、断面円形の突起が2段になるように削り出している。

図46-228・229、図47-230～232は骨角器である。

228は、住居1の最下層（4層）で検出した。骨針である。折れて一方の端部を欠損しているが、遺存した端部は、鋭くはないが尖らせている。長さ5.1cm以上、径0.4cmを測る。断面は円形である。

229は、土坑6の底で検出した。使用材は鹿角である。石器製作時にパンチとして使用したもの

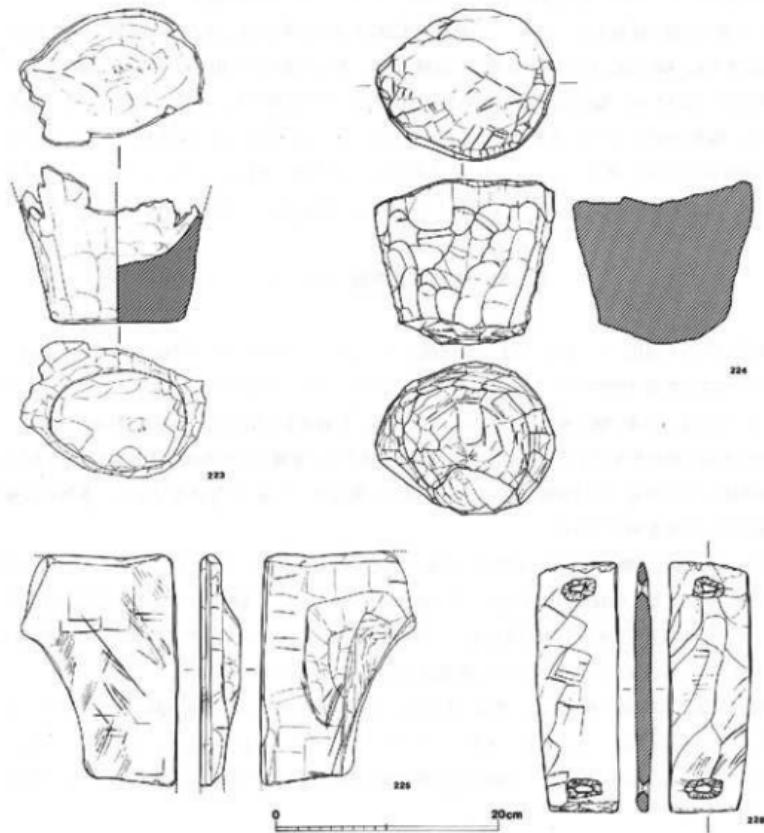


図45 出土遺物 木器 ( $S_r=1/5$ )

であろう。先端を削り出して尖らせている。先端には使用痕が認められる。

230・232は、刺突具である。230は、鹿角の弯曲の強い部分を利用して側面を削って先端を尖らせている。表面に鹿角特有の凹凸が見られる。裏面には海綿状組織を残している。231は鹿角の枝部の先端を粗く加工して尖らせている。金属器による削り痕が見られる。先端を欠損する。

231は、鹿角を筒状に切り取り、海綿状組織を取り去り穴を貫通させたものである。側面から目釘様の穴が穿たれる。工具の柄とも思われるが、長さが短い。両端は粗く削った痕跡が残る。

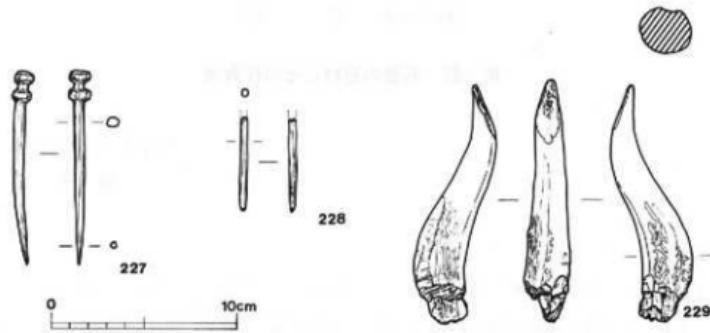


図46 出土遺物 木器・骨角器 (S.=1/3)



図47 出土遺物 骨角器

## 第6章 考 察

### 第1節 石器の石材とその採取地

樋原考古学研究所員

奥田 尚

#### 1.はじめに

出土した一部の石器の石種を肉眼で観察した。表面が光って見えにくい時は、水で濡らして観察した。観察した石器は石鏃、石劍、石小刀、石包丁、石斧、砥石、浮子、紡錘車等である。これら石器の石種は安山岩、輝石安山岩、石英安山岩質軽石、玄武岩、塩基性凝灰岩、塩基性凝灰岩質片岩、塩基性凝灰岩質点紋片岩、花崗岩質砂岩、砂岩等である。器種と石種の関係は表2のようである。

表2 石器の器種と石種（番号は表3・4および図43・44に対応する）

	石 鏃	石 剑	石 小 刀	石 包 丁	石 斧	砥 石	浮 子	紡 锤 車	石 熱	未 加 工 品	合 計
安 山 岩	3-8-10	5-8	11	6						1-7	9
輝石安山岩	2	4								12	3
石英安山岩質 軽石						■44 211					1
塩基性凝灰岩					29-30-40						3
玄 武 岩					20						1
塩基性凝灰岩質 片 岩				14-15-16-17 18-22-34-35 36-37				28			11
塩基性凝灰岩 質点紋片岩				15-19-21-22 23-24-25-27 33-38-39-41 42-43-44-45 46-47-25-31							20
花崗岩質砂岩								■43 200			1
砂 岩						■43 208					1
合 計	4	3	1	1	30	4	1	1	1	3	50

#### 2. 石種の特徴

各石種の特徴について述べる。

安山岩：色は黒色、裸眼では無斑晶である。灰白色の風化した自然面が一部に残るものもある。流理が認められるものもある。捕獲岩が含まれるものがある。捕獲岩には花崗岩質岩があり、粒形は角、粒径が最大1.5mmに及び、量はごくごく僅かである。斑晶をなす長石は無色透明、短柱状で、粒径が0.1~0.2mm、量は僅かなものや、中~多いものがある。石基は黒色ガラス質である。

輝石安山岩：色は黒色、裸眼では無斑晶である。灰白色の風化した自然面が一部に残るものもある。流理が認められるものもある。捕獲岩や捕獲晶が含まれるものもある。捕獲岩は花崗岩であり、粒形が角、粒径が最大6mmに及び、量がごくごく僅か~ごく僅かである。捕獲晶は石英であり、粒形が角、粒径が最大0.5mm、量がごくごく僅かである。斑晶をなす鉱物は長石と輝石である。長石

は短柱状で、粒径が0.2～0.3mm、量が中～多いものや僅かなものがある。輝石は黒色と青銅色のものがある。黒色透明の輝石は柱状で、粒径が0.5～1mm、量がごくごく僅かである。青銅色透明の輝石は柱状で、粒径が0.2mmや0.3～1mmのものがあり、量がごくごく僅かである。石基は黒色ガラス質である（表3参照）。

表3 サスキトイド製品の岩相

番号	規格号	岩種	長石	輝石	捕獲岩	捕獲品	石基
1	—	未加工品	0.1～0.2mm 中				黒色 ガラス質
2	183	石鐵	0.1～0.2mm 中	0.3～1mm ごくごく僅か	花崗岩 5mm 1個		黒色 ガラス質
3	182	石鐵	0.1mm 多い				黒色 ガラス質
4	205	石劍	0.1mm 僅か	0.5～1mm ごくごく僅か		石英0.5mm ごくごく僅か	黒色 ガラス質
5	189	石劍	0.1～0.2mm 多い	0.1mm			黒色 ガラス質
6	191	石鐵	0.1mm 多い				黒色 ガラス質
7	—	未加工品	0.1mm 多い				黒色 ガラス質
8	190	石劍	0.1～0.2mm 中		花崗岩1.5～1mm ごく僅か		黒色 ガラス質
9	193	石鐵	0.1mm 僅か				黒色 ガラス質
10	184	石鐵	0.1mm 僅か				黒色 ガラス質
11	221	石小刀	0.1mm 僅か				黒色 ガラス質
12	—	未加工品	0.2～0.3mm 多い	0.2mm ごく僅か	花崗岩1～6mm ごく僅か		黒色 ガラス質

石英安山岩質軽石：色は灰色で、発泡孔がおおい。火山ガラスは無色透明、貝殻状、束状で、よく延びている。斑晶鉱物は石英と輝石である。石英は無色透明、粒状で、粒径が0.5～1mm、量が僅かである。輝石は黑色透明、短柱状、柱状で、粒径が0.5～1mm、量が僅かである。基質は無色透明、ガラス質である。

玄武岩：色は黒色である。火山ガラスは無色透明、貝殻状で、粒径が0.3～0.5mm、量が僅かである。斑晶をなす鉱物は長石、輝石、橄欖石である。長石は無色透明、短柱状、粒径が0.5～0.7mm、量が多い。輝石は黑色透明、短柱状、粒径が0.5～1mm、量が僅かである。橄欖石は黄土色透明でレンズ状をなし、モザイク状に割れ目がはいる。粒径が0.5～1mm、量が中である。石基は黒色ガラス質である（表4参照）。

塩基性凝灰岩：色は暗灰色～暗緑灰色である。貝殻状、球状をなす火山ガラスが見られる。火山ガラスは淡緑色透明、黒色透明で、粒径が0.5～2mm、量が僅かや多いものがある。斑晶をなす鉱物は長石と輝石である。長石は無色透明、灰白色透明で、短柱状、粒径は0.3～0.5mmのものや1～1.5mmのものがあり、量が多いものや僅かなものがある。輝石は黒色、黒色透明で、短柱状、粒径が0.3～0.5mmのものや0.7～2mmのものがある。量は僅かなものや多いものがある。基質は黒色や濃緑色で、ガラス質である。

塩基性凝灰岩質片岩：色は灰緑色、濃緑灰色、濃緑色で、片理がある。火山ガラスは綠色透明で、貝殻状をなし、粒径は0.3～0.5mm、量が僅かである。斑晶をなす鉱物は長石、輝石、綠泥石である。長石は淡灰緑色透明、短柱状、柱状で、粒径が0.3～0.5mmのものや0.5～1mmのものがある。量は僅かなものや多いものがある。輝石は黒色、柱状や短柱状をなし、粒径が0.2～1mmや3mmに及ぶものもある。量は僅かなものや多いものがある。綠泥石は濃緑色でレンズ状をなし、粒径が0.2mm以

表4 緑色岩製品の岩相

番号	測定番号	長石	輝石	カシラン石	火山ガラス	緑泥石	二次長石	基質・基盤	片理	その他の	石種
13	197	石包丁				1mm以下 偏か レンズ状	多い	0.1mm 灰緑色 ガラス質	あり		堆積性凝灰岩 質点紋片岩
14	195	石包丁	0.3~0.5mm 偏か	0.3~1mm 中		1mm以下 偏か レンズ状		0.1mm 灰緑色 ガラス質	あり		堆積性凝灰岩 質点紋片岩
15	198	石包丁	0.3~0.5mm 偏か	0.3~1mm 中		1mm以下 偏か レンズ状		0.1mm 灰緑色 ガラス質	あり		堆積性凝灰岩 質点紋片岩
16	194	石包丁	0.3~0.5mm 偏か	0.3~1mm 中		1mm以下 偏か レンズ状		0.1mm 灰緑色 ガラス質	あり		堆積性凝灰岩 質点紋片岩
17	202	石包丁	0.5~1mm 偏か 多い	0.1~1mm 偏か		0.1~0.2mm 偏か 粒状		0.1mm 灰緑色 ガラス質	顯著		堆積性凝灰岩 質点紋片岩
18	187	石包丁	0.5~1mm 偏か	0.5~1mm 中				0.1mm 灰緑色 ガラス質	顯著	輝石は蛇紋石 化している	堆積性凝灰岩 質点紋片岩
19	218	石包丁	0.3~0.5mm 偏か 多い	0.2~0.5mm 中				0.1mm 灰緑色 ガラス質	あり		堆積性凝灰岩 質点紋片岩
20	192	石斧	0.5~0.7mm 偏か	0.5~1mm 中	0.5~1mm 偏か 粒状	0.3~1.5mm 偏か		0.1mm 黒色 ガラス質	なし		玄武岩
21	219	石包丁		0.1mm以下 中				0.1mm以下 多い	顯著		堆積性凝灰岩 質点紋片岩
22	207	石包丁	0.3~0.5mm 偏か	0.2~0.3mm 中				0.1mm 灰緑色 ガラス質	あり		堆積性凝灰岩 質点紋片岩
23	203	石包丁	0.2~0.3mm 偏か	1~1.5mm 中				0.1mm 灰緑色 ガラス質	あり	輝石は蛇紋石 化している	堆積性凝灰岩 質点紋片岩
24	188	石包丁		0.05mm以下 中				0.1mm 緑色 ガラス質	顯著		堆積性凝灰岩 質点紋片岩
25	204	石包丁	0.3~0.4mm 偏か	0.1mm 中				0.1~0.2mm 灰緑色 ガラス質	顯著		堆積性凝灰岩 質点紋片岩
26	185	石包丁	0.3~0.4mm 偏か	0.5~1mm 中				0.1mm 灰緑色 ガラス質	顯著		堆積性凝灰岩 質点紋片岩
27	215	石包丁	0.5~0.7mm 偏か	0.5~1.5mm 多い				0.1mm 灰緑色 ガラス質	あり	輝石は蛇紋石 化している	堆積性凝灰岩 質点紋片岩
28	186	砂岩車	0.5~1.5mm 多い	0.5~2mm 多い				0.1mm 灰緑色 ガラス質	あり		堆積性凝灰岩 質点紋片岩
29	212	石斧	1~1.5mm 偏か	1~1.5mm 偏か 多く		1~2mm 球状	多い	0.1mm 黒色 ガラス質	なし		堆積性凝灰岩
30	201	石斧	0.5~0.5mm 偏か 多い	0.3~0.5mm 中		0.5mm 貝殻状	偏か	0.1mm 黒色 ガラス質	なし		堆積性凝灰岩
31	213	石包丁	0.2~0.3mm 偏か	0.2~0.3mm 中				0.1mm 灰緑色 ガラス質	顯著		堆積性凝灰岩 質点紋片岩
32	206	石包丁	0.3~0.5mm 偏か 多い	0.5~0.8mm 中				0.1mm 灰緑色 ガラス質	あり		堆積性凝灰岩 質点紋片岩
33	209	石包丁	0.5~0.8mm 偏か	0.3~0.5mm 偏か				0.05mm 灰緑色 ガラス質	あり		堆積性凝灰岩 質点紋片岩
34	214	石包丁	0.3~0.4mm 偏か 多い	0.2~0.3mm 偏か	0.3~0.5mm 貝殻状	偏か		0.1mm 灰緑色 ガラス質	顯著		堆積性凝灰岩 質点紋片岩
35	222	石包丁						0.1mm 灰色	顯著	焼けている	堆積性凝灰岩 質点紋片岩
36	—	石包丁	0.3~0.4mm 偏か 多い	0.2~0.3mm 偏か	0.3~0.5mm 貝殻状	偏か		0.1mm 灰緑色 ガラス質	顯著		堆積性凝灰岩 質点紋片岩
37	220	石包丁	0.3~0.4mm 偏か 多い	0.2~0.3mm 偏か	0.3~0.5mm 貝殻状	偏か		0.1mm 灰緑色 ガラス質	あり		堆積性凝灰岩 質点紋片岩
38	196	石包丁	0.3~0.5mm 偏か	0.7~1mm 中				0.1~0.3mm 中	0.1mm 灰緑色 ガラス質	顯著	堆積性凝灰岩 質点紋片岩
39	—	石包丁	0.3~0.5mm 偏か	0.7~1mm 中				0.1~0.3mm 中	0.1mm 灰緑色 ガラス質	あり	堆積性凝灰岩 質点紋片岩
40	—	石斧	0.7~2mm 偏か		0.5~2mm 球状	多い		0.1mm 灰緑色 ガラス質	なし		堆積性凝灰岩
41	—	石包丁	0.7~1mm 中	0.1~1.5mm 中				0.1mm 灰緑色 ガラス質	顯著		堆積性凝灰岩 質点紋片岩
42	—	石包丁	0.7~1mm 中	0.1~1.5mm 中				0.1mm 灰緑色 ガラス質	あり		堆積性凝灰岩 質点紋片岩
43	—	石包丁	0.7~1mm 中	0.1~1.5mm 中				0.1mm 灰緑色 ガラス質	顯著		堆積性凝灰岩 質点紋片岩
44	—	石包丁	0.4~0.7mm 偏か	0.2~0.3mm ごくごく偏か				0.1mm 灰緑色 ガラス質	あり		堆積性凝灰岩 質点紋片岩
45	216	石包丁	0.7~1mm 中	0.1~1.5mm 中				0.1mm 灰緑色 ガラス質	顯著		堆積性凝灰岩 質点紋片岩
46	217	石包丁	0.4~0.7mm 偏か	0.2~0.3mm ごくごく偏か				0.1mm 灰緑色 ガラス質	あり		堆積性凝灰岩 質点紋片岩
47	—	石包丁	0.7~1mm 中	0.1~1.5mm 中				0.1mm 灰緑色 ガラス質	顯著		堆積性凝灰岩 質点紋片岩

下で、量が僅かである。基質は淡緑色、淡灰緑色で、ガラス質である。

塙基性凝灰岩質点紋片岩：色は濃緑灰色、灰緑色、濃緑色をなし、片理は弱いものから顯著なものまである。斑晶をなす鉱物は長石と輝石である。長石は岩石形成時のもの（1次長石）と変成した時に形成されたもの（2次長石）とがある。1次長石は淡灰緑色や無色透明、短柱状、柱状で、粒径が0.2~0.5mmのものや0.5~1mmのものがあり、量が僅かや中のものがある。2次長石は灰白色で球状をなし、点在する。粒径は0.1~0.2mmのものが多く、稀に、0.1mm以下のものもある。量は中~多いものまである。輝石が蛇紋石化しているものもある。基質は淡灰緑色、淡緑色で、ガラス質である。

花崗岩質砂岩：色は灰緑色である。構成砂粒は花崗岩質岩、チャート、石英、長石である。花崗岩質岩は灰白色、粒形が亜角、粒径が1~2mm、量がごく僅かである。石英と長石が噛み合った粒である。チャートは暗灰色、粒形が亜角、粒径が0.7~1.5mm、量が僅かである。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.5~1.5mm、量が多い。長石は白色、粒形が角、粒径が0.5~1.5mm、量が多い。

砂岩：色は灰色である。構成砂粒は中粒で、石英、長石、チャートである。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.3~0.5mm、量が多い。長石は灰白色、粒形が角、粒径が0.3~0.5mm、量が多い。チャートは暗灰色、褐色で、粒形が亜角、粒径が0.3~0.7mm、量がごく僅かである。

### 3. 奈良盆地南部の岩石分布

奈良盆地の南には龍門岳から高取山、風の森峠、金剛山へと分水嶺が東西にはしり、その南山麓に外帶と内帯に地質帯を区分している中央構造線が東西に走っている。中央構造線を境して南側に三波川帯の片岩類が分布し、北側の山地部から盆地にかけて領家帯の花崗岩質~閃綠岩質の岩石が分布する。

三波川帯の片岩類の上には新生代第三紀から第四紀にかけての地層（大淀累層や龍門累層）が不整合に覆っている。吉野町香東の大淀累層相当層では、戦後、亜炭が探掘されていた。片岩類は第三紀層や第四紀層に覆われて、山麓部では見られない。片岩類は変成鉱物の違いにより点紋帶と無点紋帶に区分される。この境は吉野町小名から下市、五条市南阿田を結ぶ線で、北側に点紋片岩が、南側に無点紋片岩が分布する。紀の川の川原では南阿田付近の川原石から点紋片石が見られたが、現在では護岸工事の石材として上流にも運ばれており、川原石のみから判断は出来ない。点紋片岩は大台ヶ原山の遊歩道にも使用され、北山川の上流の東川の川原石にもごくごく僅かであるがみられる。

領家帯の岩石は片麻状を示す古期の岩石と古期の岩石に貫入してきた新期の岩石とがある。また、中央構造線に近い付近では岩石が圧碎された圧碎岩や破碎された破碎岩が分布する。大淀町芦原にある採石場では灰緑色をなす閃綠岩質の圧碎岩がみられる。この採石は奈良盆地一円に運ばれており、盆地内の河川疊にもよく見られる。葛城山から金剛山、巨勢山にかけては灰白色で球状の黒雲母が散在する石英閃綠岩（葛城石英閃綠岩）が分布する。この石は巨勢谷の古墳や葛城山山

麓の古墳の石室材に使用されている。権原市南部から明日香村、桜井市南部にかけては暗灰色で、変輝緑岩のレンズが目立つ石英閃緑岩（龍門岳石英閃緑岩）が分布する。この岩相は東北部になると変輝緑岩のレンズが多くなり、斑臘岩となる。これらの石英閃緑岩体は新期の岩石に属する。これら岩体の周囲には古期の片麻状を示す岩石が分布する。葛城山と竹内峠の間にある岩橋山には片麻状を示す黒雲母花崗岩や閃緑岩、変斑臘岩が複雑な形状で分布する。南になる方が斑臘岩質になるようである。また北部では長石の斑晶が多く見られるようになる。

葛城山山麓では領家帯の岩石の上に段丘が見られる。竹内から屋敷山古墳をとおり、御所市小林、増に至る平坦な面は段丘にあたり、盆地の東部では桜井市倉橋溜池から栗原にかけて見られる段丘に相当すると言える。段丘には風化した花崗岩質～閃緑岩質の礫が含まれ、チャートや片岩は見られない。

#### 4. 原石の採石地

石器が出土した遺跡を中心として、近距離で原石が求めることができる地について推定する。前述のように、観察した石器の石材は遺跡近くでは採石出来ない石材である。サヌキトイド（安山岩、輝石安山岩）は香芝市西部のドンヅルボーリー北方の二上層群原川累層や大阪層群の地層に含まれる礫、大阪府南河内郡太子町石まくりや春日山に分布する礫の岩相の一部に酷似する。場所は限定出来ない。石英安山岩質軽石は発泡孔に充填物がないことから現在活動している火山の噴出物と推定される。斑晶が大きいことからアイラ火山の噴出物の可能性がある。軽石は現在の海岸でも見られるところから海岸で探石した可能性もある。玄武岩、塙基性凝灰岩、塙基性凝灰岩質片岩、塙基性凝灰岩質点紋片岩、砂質点紋片岩、泥質片岩は紀の川流域に分布する三波川帯の岩石の岩相の一部に酷似する。点紋ができかけた緑色岩は五条市南阿田から中牧にかけての付近に分布する。これより北になれば斑晶が大きくなる。露出する石よりも川原石の方が硬いことから五条市付近の川原石を採取したと推定される。花崗岩質岩砂岩は砂粒が角であり、チャートを含むことから和泉山脈に分布する和泉層群の砂岩の岩相の一部に酷似する。円礫と推定されるため泉南の海岸から紀の川の下流域にかけての付近に見られる砂岩礫に似ている。また、大阪府南河内を流れる石川の下流にも僅かに見られる。

#### 5. おわりに

鴨都波遺跡を中心として石器に使用されている石材の採取地を近距離で求めてみれば、北はドンヅルボーリー付近、南は紀の川と比較的広い範囲から用途に応じて石材が採取されている。石包丁は全て紀の川流域に見られる片理がある綠色片岩が使用されており、丹波帶の中・占生界にみられるような片理が僅かにみられる泥岩や頁岩は見られなかった。北河内の南部では泥岩や頁岩製の石包丁と綠色片岩製の石包丁とがあると言われているが、鴨都波遺跡では泥岩や頁岩はみられなく、全て紀の川流域で原石が採取されたと言える。

## 第2節 出土の動物遺存体

奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター

松井 章

京都大学大学院人間環境学科

内山 純藏

他の近畿地方の弥生時代の集落遺跡と同様に、鶴都遺跡から出土した動物遺存体の主体は、イノシシとニホンジカであった。今回の資料は発掘中に肉眼で確認できたものに限られているため細かな遺物が見逃されている可能性がある。水漬けで手元に搬入されてきた動物遺存体は183点にのぼり、そのうち168点の同定を行うことができた。イノシシが破片数で86点、ニホンジカの70点がこれに続く。その他ではムササビ3点、タヌキ1点、ニホンザル1点などがある。また、クマネズミ属の下顎骨、脛骨、大腿骨などがまとまって出土した例があるが、1個体分がまとめて出土しているので食用になったものではないだろう。ウシの臼歯が1点出土しているが、層位が不確かな包含層からの出土であるので、弥生時代のものとすることはできない。

今回の発掘区で動物遺存体が出土したのは、大溝6層と9層の有機質層とであった。弥生時代の集落に住んだ人々は集落の環濠の特定の部分や土坑をゴミ捨て場としており、今回の発掘でも、大溝の一部のゴミ捨て場に動物遺存体がまとめて捨てられていたのだろう。

### イノシシ

西本豊弘の言う弥生時代のブタが出土している。左右の下顎骨および右の上顎骨で、同一個体である。乳臼歯( $m_{1-2}$ )<sup>(1)</sup>が残っている。永久歯M1の摩耗がかなり進行しM2の摩耗がはじまっているが、M3はまだ姿を見せない。下顎前臼歯の歯槽周辺にも歯周病(歯槽膜漏か)の痕跡が見られる。確かにこのような所見は縄文時代のイノシシにはほとんど見られないものである。 $m_3$ の下からはPM4が萌出しかけているが、乳臼歯 $m_3$ がかなり咬合面が摩耗しながらも、抜け落ちないで存在する。右下顎骨の大歯は抜かれ、歯槽周辺に刃物の切傷が見られる。

肩甲骨に穴のあいた例がある。左肩甲骨で棘突起25×15ミリの隅丸長円形の穴をもつ。周囲が隆起していることと、穴の人大きさから見て、幼獣のうちに肩に槍様の傷を受け、治癒したものか。しかし、これも骨端部は癒着が終了しているものの、若獣には違ひ無い。縄文時代の遺跡から出土したイノシシではこのような例を見たことがない。このような穴が外傷以外に、細菌性の骨病変として現れるものは家畜病理学の研究者の鑑定をまたねばならない。

### ニホンジカ

図48-6・7は落角である。11は前頭骨で金属斧様の利器で角座の部分で折り取っている。9は尺骨と橈骨が癒着したもので、骨病変と見ることができる。

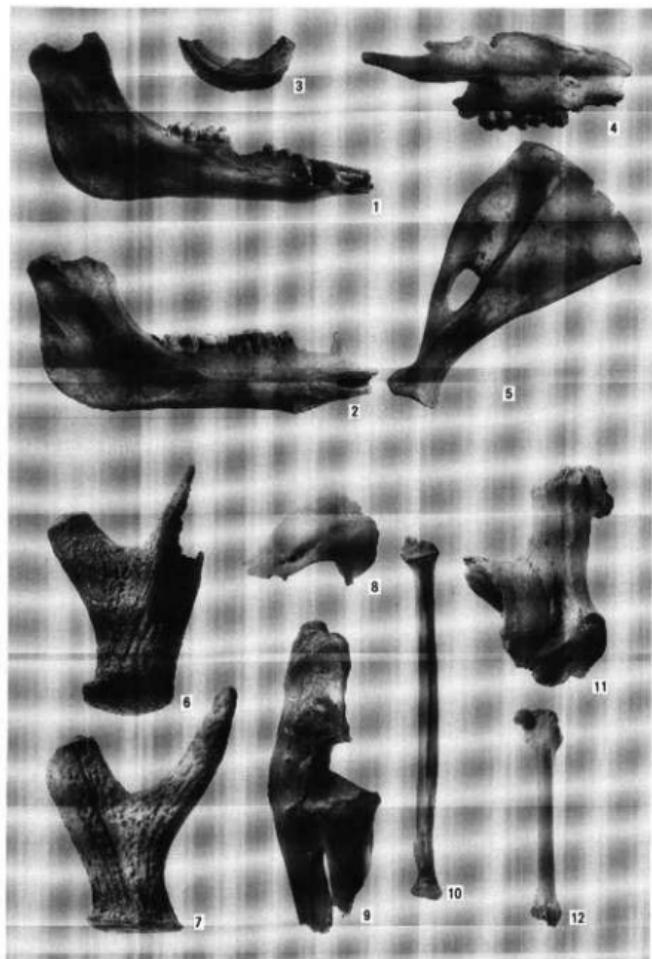


図48 出土の動物依存体

鹿角は2点が落角で、1点が落角以前のものである。ニホンジカも幼獣の頭蓋の破片が1点出土している。

#### ニホンザル

完形の橈骨が1点、出土している。近位端に金属製の刃物による鋭い切傷が見られることから食用とされたことは明らかである。大和盆地の弥生遺跡からは、ニホンザルが少量ではあるが出土す

1. イノシシ(ブタ?)  
下顎骨 右
2. イノシシ(ブタ?)  
下顎骨 左
3. イノシシ  
犬歯(オス)
4. イノシシ(ブタ?)  
上顎骨 右
5. 傷の施設した  
イノシシ  
肩甲骨 左
6. 鹿角(落角)
7. 鹿角(落角)
8. ニホンジカ  
幼獣  
頭蓋骨
9. ニホンジカ  
尺骨・橈骨  
(骨病変の為に  
両骨が癒着)
10. ニホンザル  
尺骨
11. ニホンジカ  
頭蓋骨と鹿角  
左
12. タヌキ  
大腿骨  
(1.、2.、3.  
は同一個体)

る。橈骨の遠位端の関節部には骨病変の痕跡が残る。

#### タヌキ

左大腿骨が1点出土している。縄文時代、弥生時代の遺跡からの出土は珍しいことではない。

#### ムササビ

左右下顎骨、左脛骨がそれぞれ1点出土している。縄文時代、弥生時代の遺跡からの出土例は量は少ないが珍しいことではない。

#### クマネズミ属の一種

上腕骨、脛骨など四肢骨が散乱状態で出土している。クマネズミ属にはクマネズミとドブネズミの2種が代表的であるが、四肢骨からはいずれとも区別がつかない。

#### まとめ

鶴都波遺跡の環濠を中心に、保存状態のよい動物遺存体が多数出土した。量的にも畿内の縄文時代の遺跡に劣らない。縄文時代の人々が、主として一段高い場所に住み、低地に向かって生活残滓を捨てていたことが多いけれども、弥生時代の人々は、集落の周囲を巡る環濠や、ゴミ穴を掘って捨てていた違いがある。沖積地のそうした環濠を掘る機会が増えたのは、つい最近のことである。弥生人が環濠に生活残滓を捨てる場合も、ところ構わず捨てていたわけではないことは、先年の大阪府教委による池上遺跡の発掘で、從来貝塚が発見され、多くの動物遺存体が採集されていた環濠の延長部を調査した際、徹底した土壤水洗にもかかわらず、イノシシの臼歯、焼けて無機質化した小型の魚骨など数点を発見したことにどまつたことからも明らかである。<sup>(1)</sup>

イノシシ、ニホンジカ、ニホンザルに骨折、又は異常な成長が見られる。

ニホンジカの橈骨、尺骨の場合（図48-9）は肘の部分が癒着して変形している。

イノシシの上下顎骨は、乳歯が摩耗が進みながらも脱落せずに永久歯の第3、4前臼歯を押えている。これは、上顎骨でも同じようである。このような乳歯が摩耗を進めながらも永久歯にはえ変わらない原因は何であろうか。また、乳歯の歯槽部には歯周病、多分、歯槽膿漏の痕跡が見られる。その他にも、イノシシの橈骨と尺骨とが癒着した例がありこれも縄文イノシシではほとんど見られないものである。西本の指摘する「弥生のブタ」に合致するものと思われる（西本1991）。ニホンザルの橈骨遠位端にも関節部が横に膨隆し多孔質となっている。手首を脱臼した痕跡かも知れない。<sup>(2)</sup>今後の骨の形態から見る骨病変の研究も必要とされる。

#### 註

(1) 西本豊弘1991「ブタの歯槽膿漏について」『弥生文化』大阪府弥生博物館。平凡社 PP.140-141。

(2) 今次調査の大溝は環濠的性格をもつものと考えられている。

(3) 松井 章1990「動物遺存体の分析（SD01堆積土壤の水洗選別）」『史跡池上曾根遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会 PP.117-122。

(4) 京都大学理学部片山一道氏の教示による。

表5 第11次発掘調査出土動物遺存体種名表

白銀 GLASS ALUMS

目・科不明 Ord et Fam. indet.

玻璃鋼 GLASS MAMMA ALIA

## 靈長目 Order Primates

## **卷尾猴科 Family Cercopithecidae**

云贵领攀蛾 *Messaga fuscata*

## 齧齒目 Odonata

## ムシ科 Family Mushiidae

タコカズミ属の一類

### 巨子科 Family Scionidae

#### 七、共社 *Potamogeton*

## 目 Order Carnivora

**ANALOGUE OF THE CANNONIC  
SYNTHETIC POLY(URIDYLIC ACID).**

## 犬科 Canidae

Nysten

## 目 Order Arctoedactyla

Family Sunday School

#### **Sus scrofa**

## Family Doves

*Bos taurus*

## ◎ 獐科 Family Cervidae

### ニホンシカ *Cervus nippon*

(1) ウシは山土層位不明。

表6 動物遺存體觀察表



### 第3節 堆積土・木材の樹種・種実遺体の分析

天理大学附属天理参考館

金原正明

大阪千代田短期大学

粉川昭平

環境文化研究所

金原正子

#### 1. 堆積土の分析

##### a 試料

今次調査で採取された堆積土の資料23点について、花粉分析法で分析を行った。6試料から比較的良好な結果が得られた。以下にそれらの試料を一覧する。他の試料は著しく花粉密度が低いか含まれてなく、堆積速度が速いか分解的な土壤生成作用の影響をうけたものと考えられる。

試料1 2区 土坑10 5層 (図13-3)

試料2 2区 土坑10 3層 (図13-3)

試料3 2区 土坑12 6層 (図22)

試料4 2区 土坑7 3層 (図12)

試料5 2区 溝28 2層 (図23-2)

試料6 2区 有機質含有土

以上の試料は、有機質の粘土質および砂質のシルトである。

##### b 方法

花粉分析は、水酸化カリウム処理、物理的分離、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理の順に施し、グリセリンゼリーで封入してプレパラートを作成した。検鏡は作製後直ちに行った。花粉遺体の分類は、基本的には現生標本との対比によって行った。イネ属花粉の分類は、表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴から分類を行ったが、個体変化や類似種も存在するため、イネ属型とした。計数は300個以上の範囲で行った。

##### c 結果と考察

分析の結果、以下の分類群が検出された。

樹木花粉 イスマキ属 *Podocarpus*、モミ属 *Abies*、ツガ属 *Tsuga*、マツ属 *Pinus* subgen. *Diploxyylon*、コウヤマキ *Sciadopitys*、スギ *Cryptomeria*、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科 *Taxaceae*—*Cephalotaxaceae*—*Cupressaceae*、ハンノキ属 *Alnus*、カバノキ属 *Betula*、ハシバミ属 *Corylus*、クマシデ属—アサガ *Carpinus*—*Ostrya*、クリーシイ属—マテバシイ属 *Castanea*—*Castanopsis*—*Pasania*、ブナ属 *Fagus*、コナラ属 *Quercus* subgen.

Lepidobalanus、コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* sabgen. Cyclobalanopsis、ニレ属—ケヤキ *Ulmus*—*Zelkova*、エノキ属—ムクノキ *Celtis*—*Aphananthe*、サンショウ属 *Zanthoxylum*、ウコギ科 *Araliaceas*、カエデ属 *Acer*、トチノキ *Aesculus*、グミ属 *Elaeagnus*、ニワトコ属—ガマズミ属 *Sambucus*—*Viburnum*

樹木と草本を含む分類群 クワ科—イラクサ科 *Moraceae*—*Urticaceae*、バラ科 *Rosaceae*

草本花粉 イネ科 *Gramineas*、イネ属型 *Oryza* type、カヤツリグサ科 *Cyperaceae*、タデ属サナエタデ節 *Polygonum* sect. *Persicaria*、アカザ科—ヒユ科 *Chenopodiaceae*—*Amaranthaceae*、ナデシコ科 *Caryophyllaceae*、アブラナ科 *Cruciferae*、セリ科 *Umbelliferae*、オミナエシ科 *Valerianaceae*、キク亜科、*Astroideae*、ヨモギ属 *Artemisia*

単条溝胞子と三条溝胞子の2形態のシグ植物胞子

結果は花粉組成図に示し、主要なものは写真に示した。

樹木花粉と草本花粉の割合は試料によって異なり、時期差もあるが遺跡およびその周囲は開けたところと樹木の多いところが存在したとみられる。樹木花粉からみてコナラ属アカガシ亜属を主にコナラ属コナラ亜属とエノキ属—ムクノキおよびクリーシイ属—マテバシイ属が多く、照葉樹であるアカガシ亜属（カシ類）とシイ属の樹木が中心に生え、周囲にもその森林が存在していたと推定される。エノキ属—ムクノキは成長が速く森林破壊の後に二次的な樹木として生えたと考えられる。このことは、本遺跡の弥生時代に森林を伐採して多くの木材が利用されたことを示している。

草本花粉からみると試料3などはイネ属型花粉が多く、近接して水田が営まれていたとみられる。

他に花粉分析途中に寄生虫卵が検出されたので報告しておく、試料3・4・5・6から鞭虫 *Trichuris* の卵、試料3から回虫 *Ascaris* の卵がみられた。試料4・5・6は極まれに見られる程度であり、汚染の範囲内である。当初寄生虫卵の分析を目的としなかったため、厳密な定量分析ではないが、試料3は相対的にやや多いといえ、糞便が混じった堆植物と判断され、試料3を採取した土坑の性格を考慮する必要があろう。鞭虫と回虫は汚染の及ぼし得る遺跡周辺に生育する生の野菜（草本）を食べていたことを示す。また、この土の寄生虫卵の汚染がみられるのは、定住農耕を示し、また今次調査地周辺が居住地であったことを示す。

（以上、金原 正明・金原 正子）

## 2. 木材の樹種

出土材38点について樹種同定を行った。一部は木製品より直接切片を採取し、他は採取された破片より切片を切りとった。カミソリによって横断面（木口面）・放射断面（弦目面）・接線断面（板目面）の切片を作り、顕微鏡観察を行って、解剖学的特徴によって識別同定した。同定は基本的には現生の木材標本との対比によって行った。

結果は以下に一覧する。

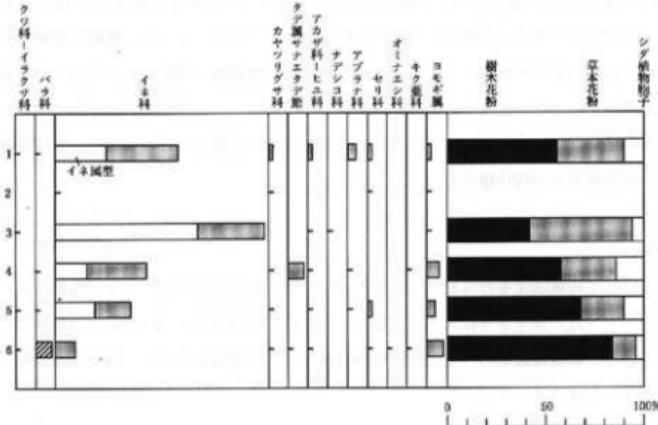
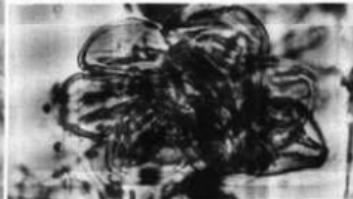


図49 花粉粒成因

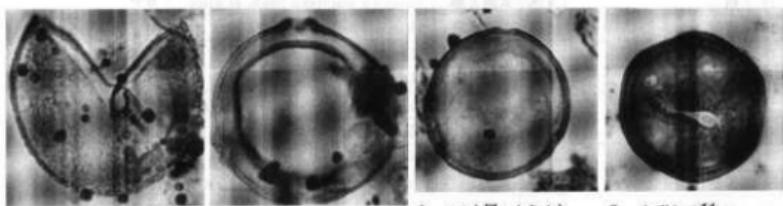


1. ツガ属

2. マキ属



3. コナラ属 アカガシ亜属

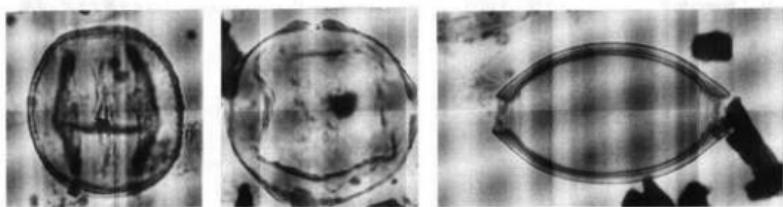


4. スギ

5. クマシデ属-アサダ

6. エノキ属-ムクノキ

7. ナデシコ科



8. コナラ属 コナラ亜属

9. ニレ属-ケヤキ

10. 鞭むぎ



11. カバノキ属

12. クリーシイ属

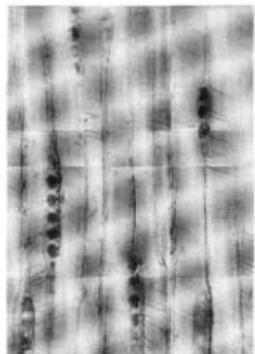
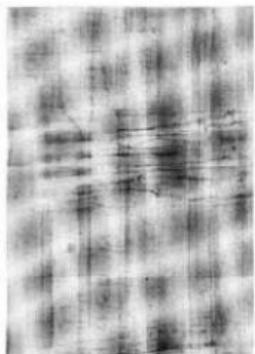
13. コナラ属 アカガシ亜属

14. キク属

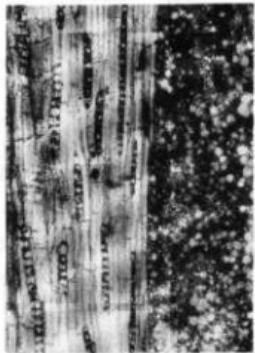
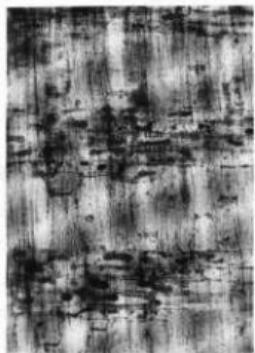
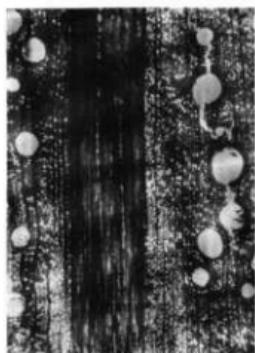
15. ヨモギ属

図50 花粉の顕微鏡写真

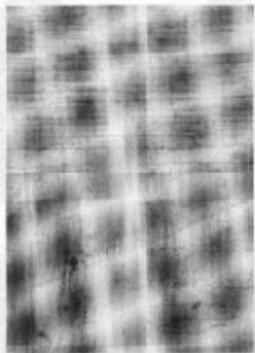
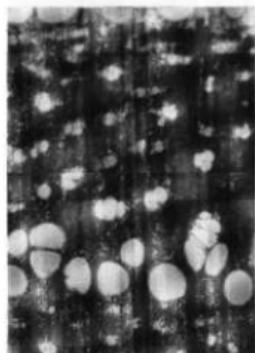
(×800)



試料10 カヤ（横断面×20、放射断面×100、接線断面×100）



試料5 アカガシ亜属（横断面×20、放射面×100、接線断面×50）



試料19 ヤマグワ（横断面×20、放射断面×100、接線断面×50）

図51 出土材の顕微鏡写真

### 3. 種実遺体

種実遺体は5試料採取されていた。同定の結果、下に示す3分類群同定された。以下に一覧する。

オニグルミ Juglans ailanthifolia Carr. 核

モモ Prunus Persica (L.) Batsch. 核

ムクロジ Sapindus mukorossi Gaertn. 種子

表8 種実遺体 出土地点と個数

出土地点	個 数
1区 住居1 壁溝	モモ核 1
4区 大溝6層	オニグルミ核 半2
2区 溝28	オニグルミ核 半8・破片3
2区 土坑10	モモ核1・半1
2区 土坑12	モモ核3、オニグルミ核片1、ムクロジ種子1

オニグルミ・モモは明らかに食用となるものである。モモ核は金原・粉川（「モモ核を中心とする古代の有用植物の変遷」『日本文化財科学会第9回大会研究発表要旨』1992年）が分類したA類にあたり、最も古くから存在するタイプである。オニグルミ・ムクロジは小河川沿いの適潤地に多く、周間に生育していたとみられる。モモは現状では栽培されていたと考えるのが妥当であろう。

（以上、金原 正明・粉川 昭平）

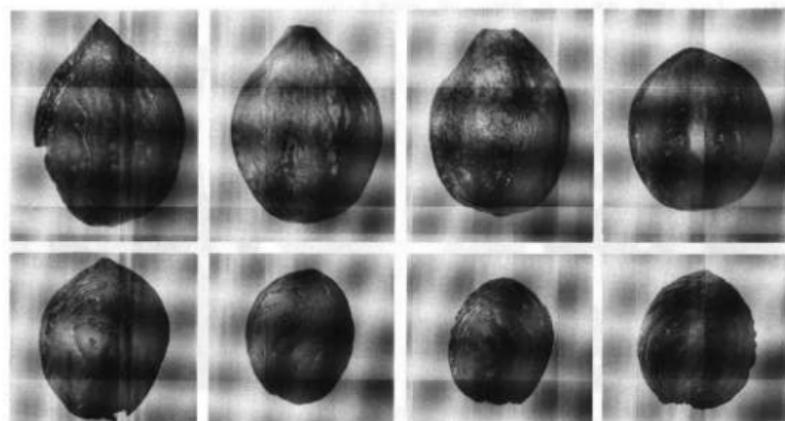


図52 オニグルミ核・モモ核 ( $\times 1$ )

## 第4節 長頸壺からみた今次調査出土一括資料の占める位置

### (1) はじめに

今次調査においては、第Ⅰ様式新段階から第Ⅴ様式に至る、多くの一括資料を得ることができた。その内容については既に第5章第1節に述べたところであるが、特に第Ⅴ様式のものについては土坑2・7・9・10、溝14などで良好な一括資料を得た。とりわけ土坑出土のものはその廃絶に伴う祭祀にかかわって埋置もしくは投棄された土器であり、その一括性は極めて高い。これらの構造すべてに共通して出土した器種は長頸壺AまたはBと分類される土器であるので、これを中心に検討し、これらの構造の編年的位置付けを考えたい。また、そこから派生して、従来、一括資料として扱われてきた土器群の一部がいかに信頼性の低いものであったかを述べる。

### (2) 長頸壺に関する既往の編年観

第Ⅴ様式の土器については、既に詳細な土器分類および編年細分案が提示されているが、ここでは長頸壺について概観しておく。

森岡秀人氏は、第Ⅴ様式を前後半の2期に分け、さらに前半を2分、後半を3分して、都合5期区分された。今、長頸壺に限ってその器形の変化を概略的にたどると、「体部の高さが腹径にほぼ等しく、底部が著しく突出しないものが古い段階の特徴である」という佐原眞氏の従来からの指摘に加えて、口頸部がほぼ直口を呈するものがより古いとされ、口頸部が直口のものから外反するものへという変遷を示された。また器形に関しては、後半Ⅰ期には、大型化するものと頸部が短く聞くものに分化する兆しが認められるとされる。また、近年、森岡氏は、山城地域の弥生土器の編年を提示されたが、この中で述べられた第Ⅴ様式長頸壺に関する器形変化についてみると、頸部についてはその長さが体部の高さに随分外傾して聞くものから、口頸部が体部に比して短くなるものへと変遷することを示された。また体部については球形のものから偏平なものへという変遷を考えておられる。

一方、寺沢薫氏は、大和の第Ⅴ様式土器の細別<sup>(4)</sup>を行うに際して、当該期の土器を詳細な基準で分類された。長頸壺に限ってこれをみると、寺沢氏によるA形式は様式3をもって消滅し、B形式はバラエティーに富んでいるが、初現的なものは体部高が高く口頸部は長く外傾する。B形式のより新しいものには体部が球形化し、くびれ部が不明瞭となるものがある。D形式は第Ⅴ様式当初から存在し、体部高が高く肩がはったものが古い。口頸部は外傾するもの、外反するもの、直立するものの順に変化すると言う。

また、甲斐忠彦氏は、四分遺跡出土の第Ⅴ様式土器を細分するに際して、長頸壺・高杯の法量、形態変化、調整の変化を基準とされた。長頸壺に関してこれをみると、法量についてはより新しいものは小さくなることを指摘された。形態変化については、長頸壺の体部および頸部形態を、頸腹

指数（体部最大径を100としたときの頸部径の値、頸部径／体部最大径×100で示される）として数量化され、より新しいものはこれが高くなるとされた。頸腹指数は、より高いものは体部の張りが少なく、体部から頸部への移行がなだらかであり、土器のプロポーションとしては頸部が太いものである。調整手法の変化については、より新しいものは、ヘラ磨き手法が衰退するなど調整手法が粗略化することを指摘された。

### （3）一括資料中における口頸部諸形態の混在

今次調査では、土坑2・7～10および溝14で長頸壺を含む第V様式の一括資料を得ている。ここでは、複数の長頸壺が出土している土坑7・9・10の長頸壺の特徴およびその個々の組み合わせを、まず、口頸部の形状の特徴を中心に簡単に顧みよう。

土坑7（図32-86～89）では、器高30cmを越えるもの（86）と、24.8cmとこれに比べるとやや小形のもの（87）が共伴した。両者は頸部の形態が直線的に外傾して開くという点ではほぼ同様であるが、外反して開くもの（88）も同一層で出土している。

土坑9（図33-95～98）では、頸部が直立して立ち上がる（95）に共伴して、頸部がやや短い（96）や、頸部の長さが体部高の $\frac{1}{3}$ 程度になる（97）（98）が出土した。また（97）の頸部は（98）のそれに比して開いており、くびれ部分は（98）より明瞭である。

土坑10（図33-100、図34-101～107）では、さらに複雑な状況がみられた。まず器高が相対的に高いもの（100）とやや低いもの（101～105）があり、それらが器高との比率でみて頸部が長いもの（100・101・102）と、それより短いもの（103・104・105）に分けられた。また口頸部の形態や体部の形態もバラエティーに富んでおり、くびれ部分については、頸部が長いものは縦じて明瞭であるが、短いものでは、比較的明瞭なもの（104）と不明瞭なもの（105）があった。外面の調整においても、タタキ痕を残すもの、ハケメ調整するもの、ヘラミガキを重ねるものがあった。

これらの長頸壺が同一土坑の同一層で、それぞれ重なり合って出土したのであり、今次調査の土坑一括資料としての長頸壺は、從来新旧の関係でとらえられてきた頸部の外反の度合やその長さ、くびれ部の明瞭さ、体部の形態の諸特徴ではバラエティーに富むものの混在が著しいことが判る。うち、土坑7の（86）、土坑9の（95）（96）、土坑10の（100）を寺沢氏の長頸壺Aに、他を長頸壺Bにあてるによりバラエティーの豊富さを説明することは可能であるかも知れないが、それではこれらの良好な一括資料は、先後関係を決定できず、いずれもが第V様式前半部分に位置することを述べているに過ぎないことになる。

実は、このような混在の状況は今次調査の鶴都波遺跡に限らず他でも広汎に認められる。例えば、唐古・鍵遺跡第33次調査のSK-125では7層出土の長頸壺A・Bも、体部高が高く口頸部が外反する（10）と共に均整のとれた形状で口頸部が外傾する（8）（11）もみられ、また、上層の3層から出土したものは、ほぼ直立する口頸部の（3）（6）と共に大きく外反する（14）なども認められ、

長頸壺の口頭部などの特徴のみでは、その編年的位置付けを行うことは困難な資料となっている。

#### (4) 頸腹指數と底腹指數による先後関係の検討

以上から、口頭部などの諸特徴による長頸壺の分類は、一括資料中における混在の著しさから、少なくとも細分された編年の基準としては、ふさわしいものではないことが確認できた。

そこで、長頸壺A・Bは、精美な均整のとれた形態のものが次第に崩れ、最後には体部の張りが少なくて精美さを失うと共にその存在価値を失い、消滅していくとの変遷過程を想定する。この場合、個々の長頸壺から受ける精美か否かの印象に、最も視覚的な影響を及ぼすのは体部最大径の全体に占める比率の大小であると考えられ、また、当時の土器製作者にとって最も省力化が図られやすい部分が、この体部の張りを少なくする方向であるとみられるので、その変化を重視する。

この場合、甲斐氏が、形態変化を追うために体部径と頸部径の比率を数量化されたもの（頸腹指數）もある程度有効であると思われるが、頸部径はそれ以外の要素としての体部高や体部の形状（体部最大径の位置）などに規制される側面があり、土器製作者の嗜好がより入りやすい要素である。従って、ここでは甲斐氏の頸腹指數に加えて、底腹指數とも呼ぶべきものを設定する。底部径は、その機能の上で一定以上の大きさが必要と考えられ、長頸壺A・Bに限って言えば、ほぼ同様の実測値を示している。つまり、一方の数値がある程度固定している点が特徴であり、個々の土器の全体的なプロポーションの中で、体部の張りが次第に少なくて行くことを示すためには最もふさわしいものと思われる。

底腹指數は体部最大径を100としたときの底部の値（底部径／体部最大径×100）で示す。底腹指數は、数値が低いものが土器全体のプロポーションとして体部がより張っているもので、高いものは長胴の傾向にあるものである。つまり、数値のより低いものが、形が精美なものである。この点は、頸腹指數についても同様で、数値の低いもののほうが精美さを保っていることになる。

さて、図53のうち実線は頸腹指數の範囲を、破線は底腹指數の範囲をそれぞれ示している。また黒丸で表したポイントは計測で得られた長頸壺A・Bの数値を示している。

鶴都波遺跡の今次調査で得た土坑一括資料の長頸壺A・Bについて、まず底腹指數についてみると、土坑9は27.4～31.7、土坑7は26.9～35.9、土坑10は30.1～39.2となる。つまり、最低値は土坑9と7がほぼ同じで上坑10が高く、最高値は土坑9が最も低く、次いで土坑7、10へと、順次高くなっていくことが判る。その他、土坑2・8では、計測可能なものが1個体のみであったので図上には示さなかったが、土坑2の土器は36.7となり、土坑8の土器は、最も高い土坑10のものをさらに上回って、43.8という数値が得られた。このように底腹指數については、互いに重なり合う部分を持ちながら、土坑9、7、10の順に高くなり、土坑2が土坑7と10の間に位置し、土坑8が土坑10を上回ることが判る。なお、土坑9の(96)は搬入品であり、土坑7の(86)とのわずかながらの逆転はそのためであろうと考えている。

次に、頸腹指数をみると、土坑9の土器と土坑7の土器ではほぼ同様の数値を示すが、土坑9の土器は45.3から58.3である。土坑7の土器は2個体しか数量化できないが、46.2から58.6と、その最低値と最高値はいずれも土坑9の土器を上回っている。これらの土坑の土器に対して、土坑10の土器はより明確であり、最低値は52.6、最高値は62.1と、土坑9・7を上回っている。その他、溝14では、計測は可能であるものの、土坑2および8と同様の理由で図上に示さなかったものが1個体あるが、頸腹指数65.8と、他を凌駕している。このように、頸腹指数についても、互いに重なりあう部分を持ちながら、土坑9、7、10、溝14の順に、高くなっていく傾向が認められた。

このように、底腹指数と頸腹指数のいずれか一方の数値しか得られなかつた土坑2・8と溝14といった遺構もあるものの、いずれの場合においても、土坑9、7、10の順に数値が高くなっていくことが確認できた。数値は、低いものがより精美な形態を、高いものがより形態が崩れたものを示すものであるから、得られた数値の低いものから高いものへと時期的に変遷しているとみて良い。従って、長頸壺A・Bの底腹指数・頸腹指数をみると、これらの遺構は、土坑9→土坑7→土坑2→土坑10→土坑8・溝14の順に形成・廃棄されたものと考えられる。

これを検証するために、大和における第V様式期の土坑一括資料のうち、上下層にわたって長頸壺A・Bを複数個体含んでいるものを同様の方法で指数化し、図54の一部に示した。以下、各部位の数値については、公表されている実測図によって計測し指数化することを原則としたが、四分遺跡出土資料の頸腹指数については、報告書には個々の資料の数値は記されていないものの、遺構ごとの最低値、最高値が示されている。この数値と掲載されている実測図を計測したものとは必ずしも合致しない場合があるので、記されている数値によってこれを補正したものを図上に記した。また報告書には、小型壺Gと呼称されるものの数値が示されていないが、ここでは時期的変遷の中での小形の長頸壺の出現を評価して、図上に白丸で示している。なお、ここで小形の長頸壺と呼ぶものは、器高が15cm程度より低いもので、頸部長の器高に占める割合が少しだけそれよりやや短いものを指す。

ここで検討の対象とできる遺構は、大和では田原本町唐古・鍵遺跡の第33次調査SK-125、権

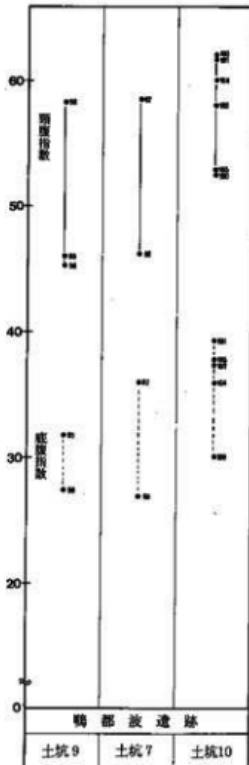


図53 今次調査出土一括資料の  
底腹指数と頸腹指数

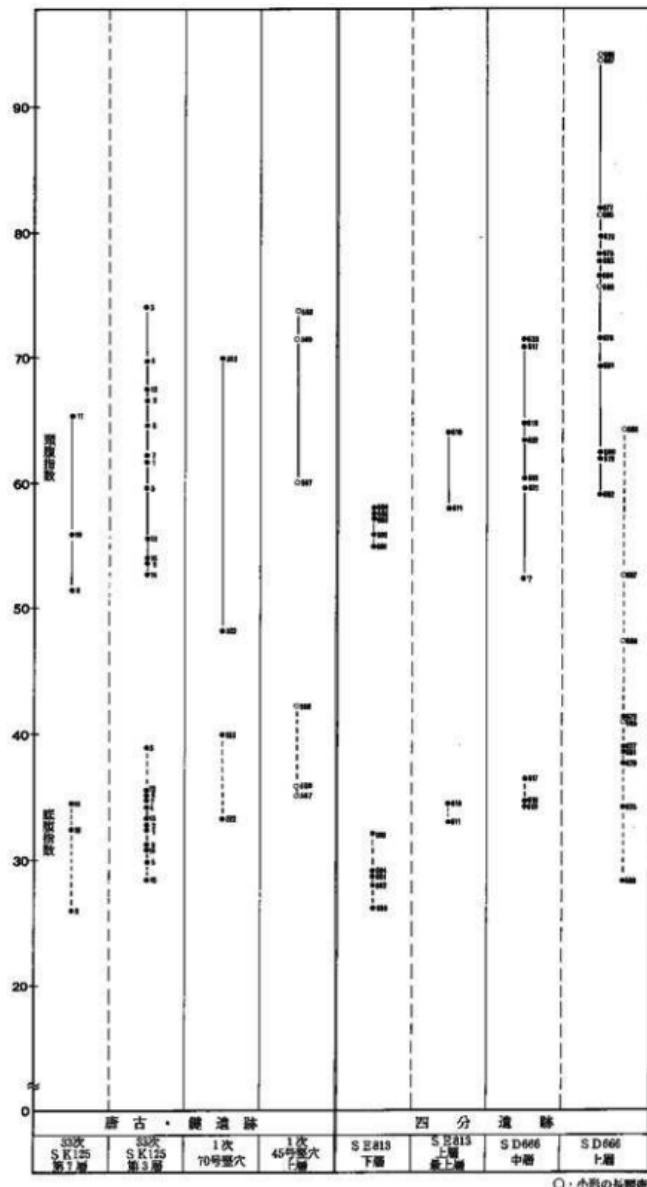


図54 大和各遺跡出土一括資料の底頭指数と頸頭指数

原市四分遺跡のS E813の2例のみである。この他、四分遺跡S E1480は、「最下層から完形品を含む第V様式の土器が多量に出土している」とされ、資料としては良好なものと思われるが、この遺構が深さ2.3mに達し、埋土は3層に分けられて各層から土器が出土しているにもかかわらず、その出土土器は一括して説明、実測図の掲載がなされているため、どの土器が最下層の出土資料であるかの追認ができなかったので、ここでは検討の対象から除外せざるを得なかった。

唐古・鍵遺跡S K-125は、埋土が7層に分けられ、第3層と第7層（最下層）から完形品を中心として土器が多く検出されている。第7層の上器を見ると、底腹指数は26.0から34.5である。より上層である第3層の土器の底腹指数は28.4から38.9であり、最低値・最高値共に、7層の土器を上回っている。頸腹指数も同様に、第7層の土器が51.6から65.5、第3層の土器が52.7から74.1と、第3層の土器が第7層の土器を上回っている。

四分遺跡S E813は、埋土が4層に分層される。最下層および上層・最上層で壺を中心に土器が検出されており、中層ではほとんど出土遺物を見ないという。なお報文では上層・最上層の土器は一括して説明、実測図の掲載がなされている。当面の目的としては上下層に分けられる土器群の形態の違いを見ることがあるので、ここでは一応上層・最上層出土土器を一括資料とみなして記述を進めることにする。底腹指数は、下層の土器が26.2から32.4、上層の土器が32.9から34.3となる。頸腹指数は、下層の土器が55.0から58.0、上層の土器が58.0から64.0となって、いずれも重なる部分がなく、上層が下層を上回っていることが確認できた。

以上から、層位的に一括資料の新古が確認できる土坑においても、底腹指数、頸腹指数共に、数値が低いものがより古いものであり、逆に高いものが新しいものであることが検証できたといえ、これは、先に記した今次調査の一括資料の時期的変遷についても、その妥当性を示すものである。

#### （5）一括資料の先後関係

次に、一括資料の先後関係を遺跡ごとにみてみよう。この場合、それぞれの一括資料の中で低い値を示すものは、一括資料が廃棄もしくは使用の同時性を示すものである以上、より古い形態のものが残されていた可能性や、仮に土器が同時期に製作されたものであっても、土器製作者によって、より古い伝統的な形態を指向して作られた可能性を考慮しておく必要があろう。つまり、このことを検討する際としては、一括資料の中で最も形が崩れたもの、すなわち、最も高い数値を示すものをより重視する必要があると考える。

まず、唐古・鍵遺跡については、底腹指数ではSK-125第7層、SK-125第3層、第70号地点竪穴、第45号地点竪穴上層の土器の順に高くなる。なお、第45号地点竪穴上層の土器はいずれも小形の長頸壺であり、通常の長頸壺A・Bと同列に比較することはできないが、この小形の長頸壺は後述する四分遺跡においても指標の最高値が最も高いSD666上層において見られるものであって、より後出のものといえるだろう。

頸腹指数の最高値は、小形の長頸壺のみで構成される第45号地点竪穴上層を除くと、SK-125第7層、第70号地点竪穴、SK-125第3層の土器の順に高くなる。SK-125第3層と第70号竪穴の位置が、底腹指数の場合とは逆転するが、この場合、頸腹指数は、前述したように、土器製作者の嗜好がより入りやすい要素を持っているので、ここでは底腹指数の順位を採って、SK-125第3層の土器に第70号地点竪穴の土器がわずかに後続するものと考えたい。

次に四分遺跡の各遺構についてみると、底腹指数・頸腹指数のいずれにおいても、各遺構の土器の最高値は、SE813下層、SE813上層、SD666中層、SD666上層の土器の順に数値が高くなり、この順に時間的に各資料を位置付けられると考える。また、このことが認められれば、小形の長頸壺はSD666上層にのみ含まれており、これを除外してもその順位は変わらないので、従来から指摘されるように、小形の長頸壺がより後出のものであることが首肯される。

以上のように、一つの遺跡の中では長頸壺A・Bが、精美なものから次第に崩れていくとの方向と過程は、ほぼ同じ早さで進んだと仮定することにより、各遺構の先後関係を決定できた。

しかしながら、これらの資料の各遺跡を越えての先後および併行関係について検討しようとするとき、各遺跡間でこの崩れ方がほぼ同じ早さで進んだとの仮定は受け入れられることはないだろう。

なぜなら、ここに挙げたもの多くは厳密な意味での一括資料でありながら、遺跡を越えて検討しようとすると、実際には底腹指数・頸腹指数ともに各遺構ごとにばらつきが大きく、同様な数値の分布を見いだすことはできないからである。これは、サンプル数が少なく2個体しか数量化できなかったものがあることも一因であろうが、このほか、土器の形態が崩れるのに要する時間がより短い、いわば革新的・先進的な地域あるいは遺跡では指数の分布範囲が狭く、逆に伝統的・保守的な部分を多く残す場合には広くなるといったこともあったのかもしれない。

このような制約を承知のうえで、この方法に基づき、敢えて一括資料の先後関係に言及しようとするならば、この項の冒頭に記した理由により、一括資料の中で最も形態が崩れたもの、すなわち指数が高いものに着目することによって一定の見通しを述べることは可能であろうと考える。今、形態変化をたどるためにより有効であると考えた底腹指数についてこれをみると、まず、鴨都波遺跡土坑9のものと四分遺跡SE813下層のものが指数32程度で同様の数値を示している。次に、鴨都波遺跡土坑7のものと唐古・鍵遺跡SK-125第7層および四分遺跡SE813上層・最上層のものがいずれも指数35前後の数値を示す。さらに、鴨都波遺跡土坑10のものと唐古・鍵遺跡SK-125第3層のものが指数39前後の数値を示している。このことから、これらの一括資料の先後関係・併行関係については、一応の見通しを得ることができたといえるだろう。

#### (6) いわゆる一括資料に関する若干の疑問

最後に、これまで検討の対象としてきた一括資料そのものの「一括性」について述べておく。

そもそも編年作業の中で一括資料が重視されるのは、そこに含まれる遺物の廃棄・埋置・埋納・

副葬・供獻などの、主として人為的行為の目的と同時性が明らかであり、それらが同時併存していたことを容易に確認できるからである。目的という点では副葬を除き、若干割り引いて考える必要があるが、いずれにせよ「一括性が高い遺物」とは、このことが明確なものでなければならない。

そうしたなか、環濠をふくめた溝資料は、土器等の編年を組み立てて行くうえで一括資料のひとつとして重視する立場があったが、以前から指摘され、また、以下に述べるように、その遺構の性格上、含まれる遺物の一括性は決して高いものといえない。

一例として、四分遺跡で検出された溝、S D 666を取り上げる。この溝は埋上が4層に分層されている。最下層からは中期の土器が出土しており、第V様式の土器は上・中・下層から出土する。この遺構の長頸壺A・Bについて、まず、頸腹指数からみると、中層の土器は52.3から71.4の数値が得られており、一方、上層の土器は58.6から94.1で、小形の長頸壺を除けば82程度までとされるが、いずれにせよ重なる部分が多い。そして、底腹指数についてみたとき、上層の上器の中に、中層の土器の最低値34.2の(619)より低い、28.6の数値を示している土器(680)が含まれていることに注目される。このような逆転現象は、これまでみてきた土坑の上・下層の土器の関係にはなかったことである。また、一見して判る通り、特に上層の土器の指数は、他の遺構のそれに比して、その分布範囲が非常に広い。当該資料の上位の数値を占めるものは小形の長頸壺であるが、それを除外しても、底腹指数の最高値と最低値の差は13.1にもなる。他の土坑出土一括資料の、この差の平均は6.5になるので、当該資料の分布範囲が異常に広いことは明らかである。このことは頸腹指数についても同様であり、当該資料の内、小形の長頸壺を除いた頸腹指数の最高値と最低値の差は22.5であるに対して、他の土坑出土資料の、この差の平均は10.4になる。指数の分布範囲が異様に広いということは、取りも直さずそこに含まれる資料の時間幅もかなり広いことを示している。

ここに挙げた2つの現象は、当該資料が溝出土遺物であるために、古い遺物が混入して生じたものと理解でき、溝出土の資料の一括性は、明らかに低いことを示すものといえるだろう。

さらに、土坑出土の資料でも、土坑の上位・中位などから出土した資料の中には、厳密な意味での一括性の疑わしいものがある。例えば、唐古・鍵遺跡SK-125第3層の土器は、底腹指数の最高値と最低値の差が10.5であり、頸腹指数のそれは21.4となって、それぞれ土坑出土資料の中では最も分布範囲が広いものである。加えて当該資料のうち、底腹指数28.4、31.0と低い数値を示す(15)と(9)の土器は、報告書に掲載された実測図によれば、頸部もしくは口縁部を欠損しているものであることに注目したい。他の、計測が可能であった土器はすべて完形品もしくは図上での完形復元が可能なものであった。このことからすると、この2個体は底腹指数が下位にあり、しかも欠損品であることから、古い土器の混入とみなすことができるのではないだろうか。なお、この2個体は頸腹指数においても下位から3位までに入るものである。そして、このような混入品が認められる以上、たとえ完形品であっても先述の(15)と(9)の間にある点で、他に比して底腹指数が特に低いといえる(5)や(14)については、混入品として含まれている可能性を考慮してお

く必要があるといえるだろう。

以上、今次調査で検出した第V様式の一括資料の編年的位置付けを試みる作業から派生して、溝出土遺物あるいは土坑出土遺物でも中位もしくは上位から出土するものや特に欠損品については、その一括性を疑ってかかる必要があることを主張してきた。

近年、土器様式区分の見直しや、さらなる細分が盛んに行われているが、そこで基準とされてきた一括資料は、果たして信頼するに足るものばかりで占められていただろうか。今一度、再考の必要があると考える。

#### 註

- (1) 寺沢 薫「大和におけるいわゆる第五様式土器の細別と二・三の問題」(寺沢 薫ほか「奈良市六条山遺跡」『奈良県文化財調査報告書』第34集所収、1980年)
- (2) 森岡秀人「畿内第V様式の編年細分と大師山遺跡出土土器の占める位置」(網干善教ほか「河内長野 大師山」『関西大学文学部考古学研究』第5冊所収、1977年)
- (3) 佐原 真「近畿地方」(『弥生式土器集成』本編2、1968年)
- (4) 森岡秀人「山城地域」(寺沢 薫・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年』近畿編II、1990年、木耳社)
- (5) 寺沢 薫(前掲書(1))
- (6) 甲斐忠彦「E、弥生後期土器の細別」(『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ』『奈良国立文化財研究所学報』第37冊所収、1980年)

なお、頸腹指数について、四分遺跡の報文中には、頸部のどの部分を計測したものか明記されていないが、その下端部(くびれ部分)を計測したものと思われる。小稿ではこの部分を計測し数量化した。

- (7) 寺沢 薫(前掲書(1))

(8) 以下、各遺跡・各遺構および出土土器の内容については、文末に引用・参照文献として掲げた各文献に掲っている。なお、本文中および図54で引用または付した土器番号も各文献に掲げる。

(9) 溝出土資料の一括性の低さについては、同様の方法で河内地方でも検証できる。例えば、若江北遺跡の第IV遺構水田耕作土に埋置された嚴密な意味での一括資料と認められる長頸壺A・Bの底腹指数は29.6~34.1の4.5の幅に、頸腹指数は55.5~61.0の5.5の幅に収まるのに対して、龜井遺跡の溝、SD12・14では底腹指数は27.0~38.2の11.2の幅を、頸腹指数は41.2~61.8の20.6の幅を持っており、溝出土資料は倍以上の幅をもつものとなっている。なお、恩智遺跡の溝、SD13では肩に沿って土器が列をなして意図的に置かれていたとされるが、その底腹指数は、24.0~50.0の26.0の幅を、頸腹指数は47.6~75.0の27.4の幅を持っており、異様に広いものとなっている。これは出土状態の評価と共に、資料の一括性が疑わしいことを示していると言わざるを得ない。

#### 引用・参照文献

##### 《唐古・鎌遺跡》

末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』(『京都帝國大学考古学研究報告』第16冊、1943年)

藤田三郎編『昭和62・63年度唐古・鎌遺跡第32・33次発掘調査概報』(『田原本町埋蔵文化財調査概要』11、1989年)

##### 《四分遺跡》

木下正史編『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ』(『奈良国立文化財研究所学報』第37冊、1980年)

##### 《若江北遺跡》

尾上実・大谷治孝・高橋雅子『若江北』(1983年、大阪文化財センター)

##### 《恩智遺跡》

今村道雄・阿部幸一・曾我恭子ほか『東大阪市 恩智遺跡I』(1980年、瓜生堂遺跡調査会)

## 第7章　まとめ

当該調査地の遺構について第4章で詳述している。最後に、遺構の形成時期をより細別して、集落の時期的変遷について改めて顧みることにより、まとめとしたい。

図55は、当該調査地の遺構を形成時期別に示した模式図である。

図55-1は弥生時代前期後葉から中期初頭にかけての遺構である。1区で検出した住居3は、前述のように第I様式（新）の一括資料を床面から得ており、一方、4区から1区にかけて検出した大溝の埋土中からは第II様式（新）から第III様式の古相を示す土器が出土しているので、その形成当初においては住居と時期的に並行していたと考えられる。同時にこの大溝より南に遺構が存在しないことから、この大溝は当該期の集落の南端を画する環濠的性格を持っているものと考えた。また、この大溝は調査区の西端では北西方向に伸びる傾向が認められるので、集落の西端をも画するものと考えられよう。今回の調査では当該期の遺物包含層が全く認められなかったが、西から東に傾斜する微地形の尾根上に立地する当該地においてこれが存在しないのは、この時期の集落が西側には広がっていなかったためとも考えられる。つまり、住居3は当該期の集落の西端近く、すなわちこの尾根上に存在するであろう同時期の遺構群の中で最高所近くに位置していたことになる。住居3は大溝および樁によって囲まれる占有の空間をもつて他の住居跡との違いが際立っているが、住居3の上記のような立地はのこととも関連するものであろう。

図55-2は、同1に続く弥生時代中期前半までの遺構の配置を示している。溝や、素掘りの井戸と考えられた土坑などが見られるが、遺構密度は全体として未だ低い。井戸の周囲には住居跡が存在しなかったが、井戸が所在する地点は、第3章で述べたように、微地形としては南に傾斜する斜面地もしくは谷部分に相当する。このような地点に井戸を設置するのは、涌水点が高く容易に水を汲むことができたためであるかも知れない。ただし、宇野隆夫氏は住居からやや離れた地点に設ける井戸を「集落付属型井戸」と名付けて、そのような地点に設ける理由を単に「自然的要因によつてのみ説明できるわけではない」とされている。宇野氏は、このような井戸が個別の住居に付属するのではなく共同の井戸であることを重視して、「ムラビトの生活に密着し、かつその紐帶になつたであろう」と述べられる。<sup>(1)</sup>

また注目すべきこととして、集落全体の規模について、大溝の埋没後はその南まで遺構が広がり、新たに集落の南端を画する溝45が掘られている。さらに、当該期の遺物包含層（図4の7層）の存在から、より高所の西側にまでも集落が拡大していたものと推定できよう。当該期には既に集落の西および南方向への規模拡大の意識が見て取れる。

図55-3は、第III様式（新）の上器が出土する遺構の配置を示した。同図にはピットの広がりが多く見られるが、第3章の冒頭に述べたように、この種の遺構については時期の特定が困難であったため、前後する時期のものが同時に記されている可能性がある。しかし、そのことを差し引いて

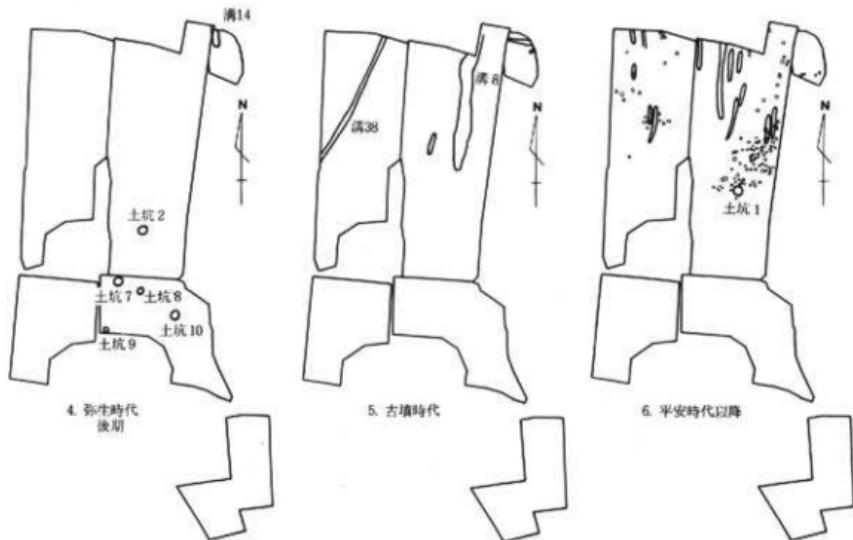
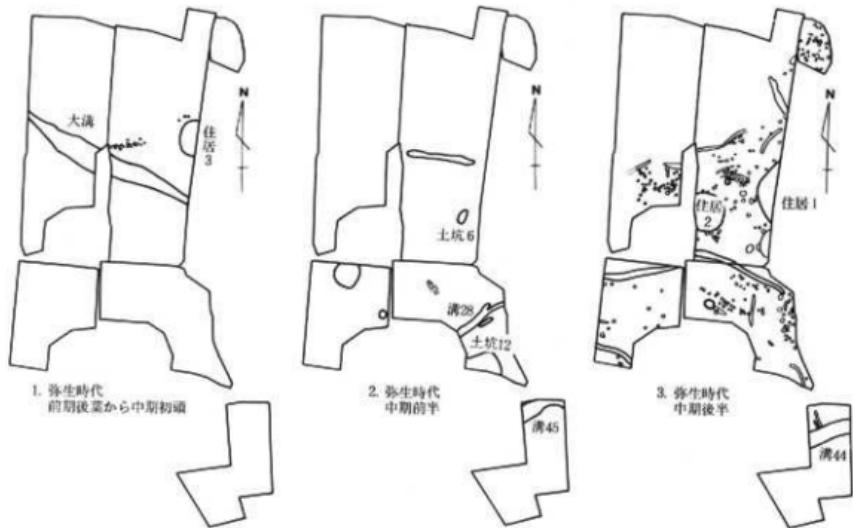


図55 遺構変遷模式図

も住居、溝など当該期になると遺構の密度が一挙に高くなり、集落としては活況を呈するといえよう。ただし、中期前半のうちに見られた集落の南への拡大は、南側の丘陵に阻まれてこれ以上伸びず、溝45が埋没した後には南接して同様の性格を有すると考えられる溝44が掘られている。

なおこの段階の、住居と溝44の並行関係については出土土器によっているが、住居出土のものについては、床面での一括資料ではないため、厳密には住居形成期もしくは廃絶直後の時期を示すものではない。しかし竪穴内の埋土の堆積状況が明らかである住居1と溝44の埋土（図7・図16）を比較すると、住居1の埋土は、下層の3・4層は上屋の構造物と共に堆積したためであろうか、黒もしくは褐色系の粘土となっているが、最上層は住居・溝ともに黒灰色粘土で共通する。しかも、溝44に近接した位置にあって、この溝より古い溝45の最上層の土は暗灰色砂質土であり、住居1・溝44とは異なっている。のことからもこの両者が時間的に併存していたものとみなし得よう。

弥生時代後期の遺構は図55-4に示した。1区では祭祀土坑（土坑2）1基、溝1条が、2区では井戸と考えた4基の土坑（土坑7～10）が検出された。周辺には、住居跡を初めとして当該期の他の遺構は存在しなかった。このような他の遺構との関係から、祭祀土坑が検出された地点は、集落の広場としての位置を占めていたものと考えられよう。また2区の井戸群は、前述した宇野氏の分類による「集落付属型井戸」に相当するものである。

さて、古墳時代の遺構は、図55-5に示した。溝を認めたのみであるが、前述のようにビットについては時期の特定が困難であったために、当該期のものも、次の同図-6に記入している可能性がある。当該期の遺構としては溝があるが、溝8・38は、その規模から集落内での区画溝であった可能性がある。また、遺構配置で注目できるのは、弥生時代中期以降調査区に南接する丘陵近くまで遺構が認められたにもかかわらず、この段階ではもはや調査区の南半にはそれが存在しないことである。この部分は、図3で示した6層の分布範囲にほぼ重なる。出土した遺物から古墳時代においては既に6層の堆積があったと認められるが、同層は検出した時点では水分を多く含んだ軟質な粘土であった。当時においても居住区としては適さなかったものと考えられる。あるいは、耕作地として利用されていたのかもしれない。

図55-6には平安時代以降の遺構の配置を示している。同図のうち、井戸と考えられた土坑1およびビットが平安時代のものである。この段階においても、調査区の南半には遺構はみられないが、古墳時代と同様に耕作地として利用されていたのかもしれない。

中世に入ると、北半の地盤の安定した部分に素掘り溝が掘られる。この種の遺構は畑作等耕作にかかるものと考えられている。当地においては、地盤が西から東に向かって傾斜しており、水平面を得るために削平を行っている点は注目できよう。

以上のように、古墳時代以降についてはなお不明な点も多いが、今次調査において、弥生時代前期以来の鴨都波遺跡の集落の一端を伺い見ることができたといえよう。

註（1）宇野隆男「3 井戸」『弥生時代の研究』7 1986年)



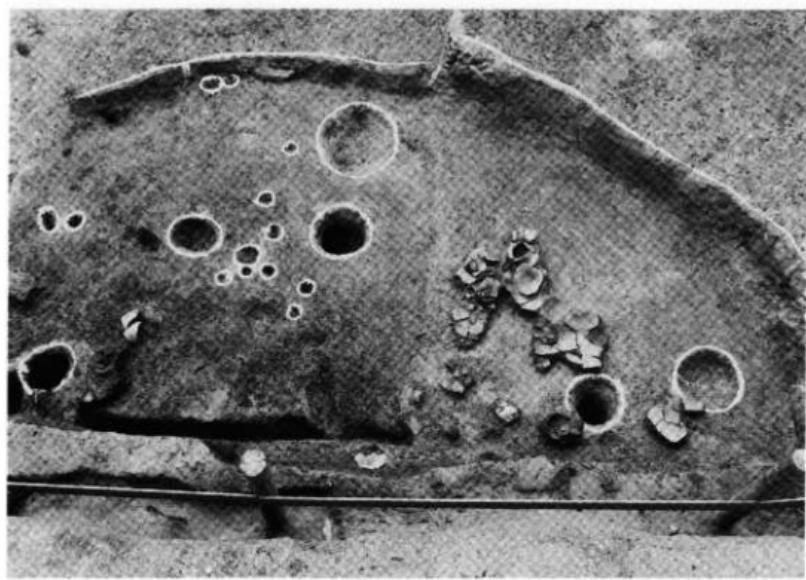
1. 1区全景（南から）



2. 住居1 検出状況



1. 住居 2 検出状況



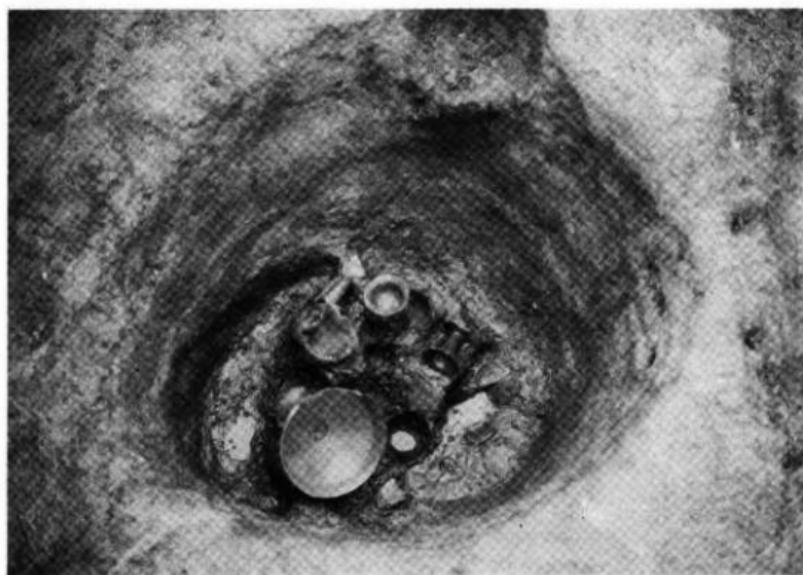
2. 住居 3 検出状況



1. 1区 大溝・住居3・ピット（西から）



2. 4区 大溝と南半の遺構（東から）



1. 土坑 2 遺物出土狀況



2. 埋甕檢出狀況



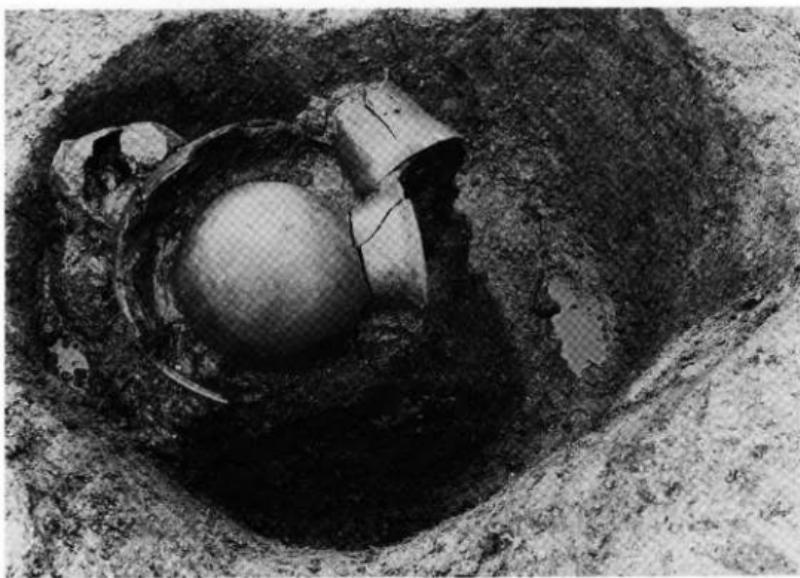
1. 1区拡張区全景（北から）



2. 2区全景（北西から）



1. 土坑 7 遺物出土狀況



2. 土坑 8 遺物出土狀況



1. 土坑9 遺物出土狀況



2. 土坑10 遺物出土狀況



1. 土坑12 検出状況



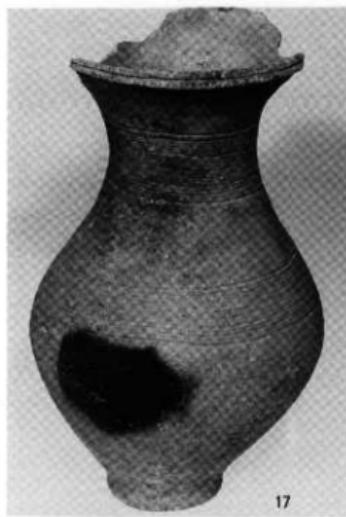
2. 3 区全景（北から）



1. 滅44 檢出狀況



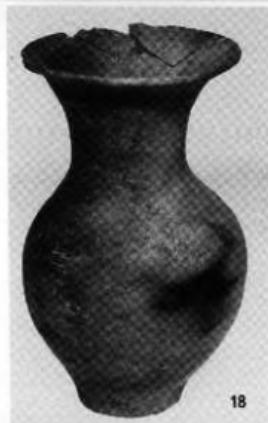
2. 滅45 檢出狀況



17



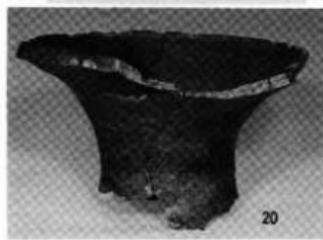
19



18



23



20

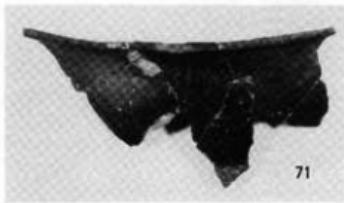
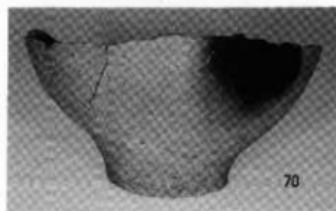
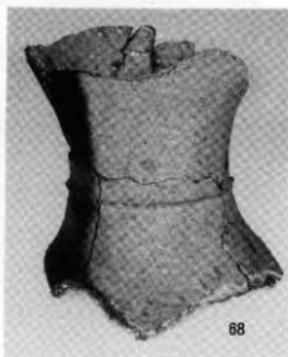


22

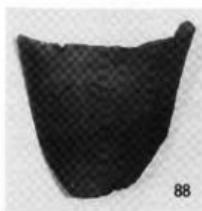
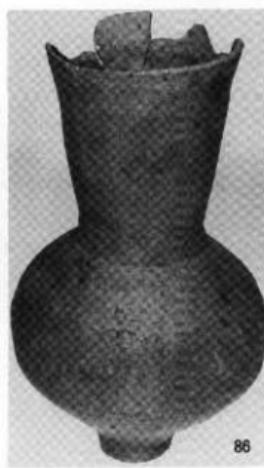


26

出土遺物 大溝 2 層 (S. 1/4)



出土遺物 住居 3 (S. ≒ ¼)



出土遺物 81~85；土坑2、86~88；土坑7、90；土坑8 (S. = 1/4)



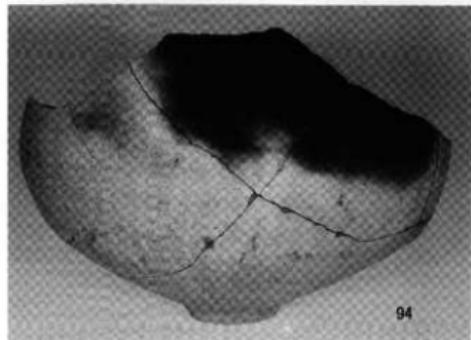
91



92



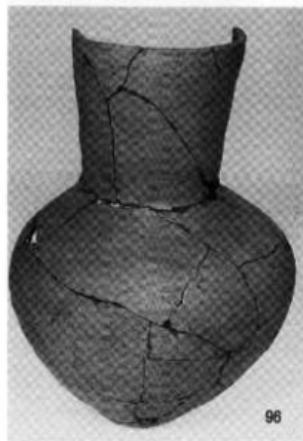
93



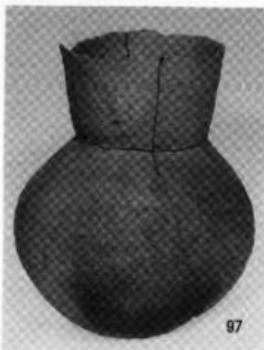
94



95



96



97

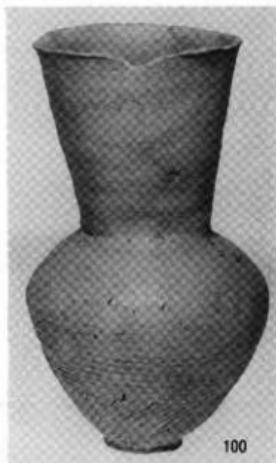


98

出土遺物 91~94；土坑 8、95~98；土坑 9 (S. ≈ 1/4)



99



100



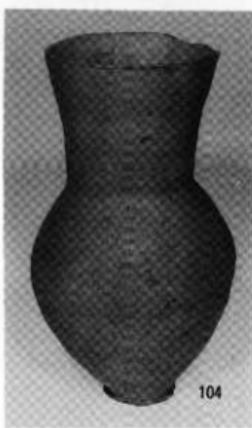
101



102



103



104



105

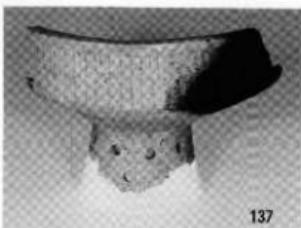
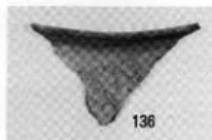
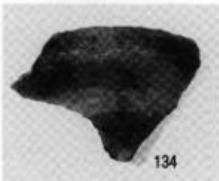
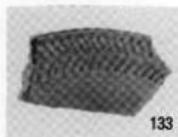
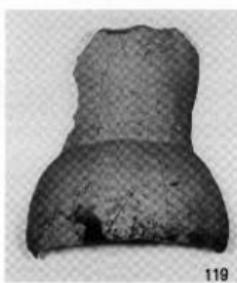


106

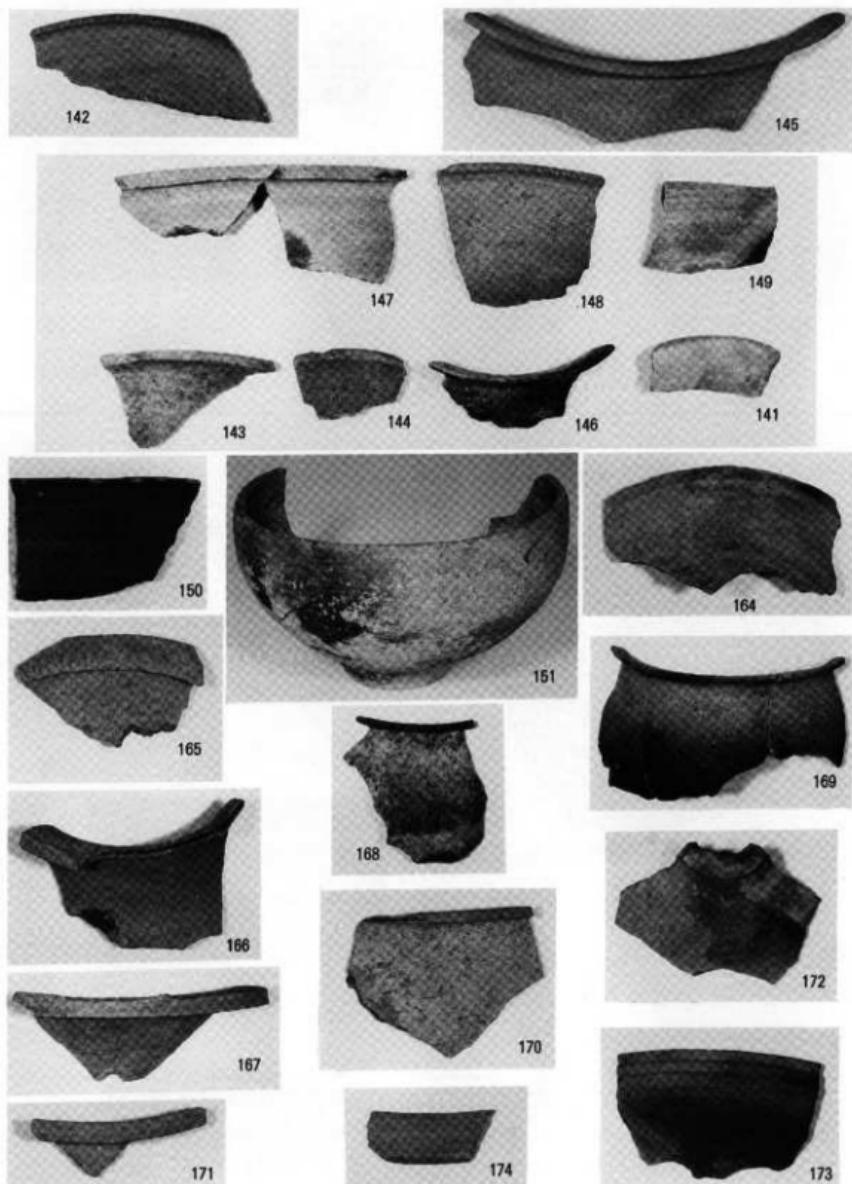


107

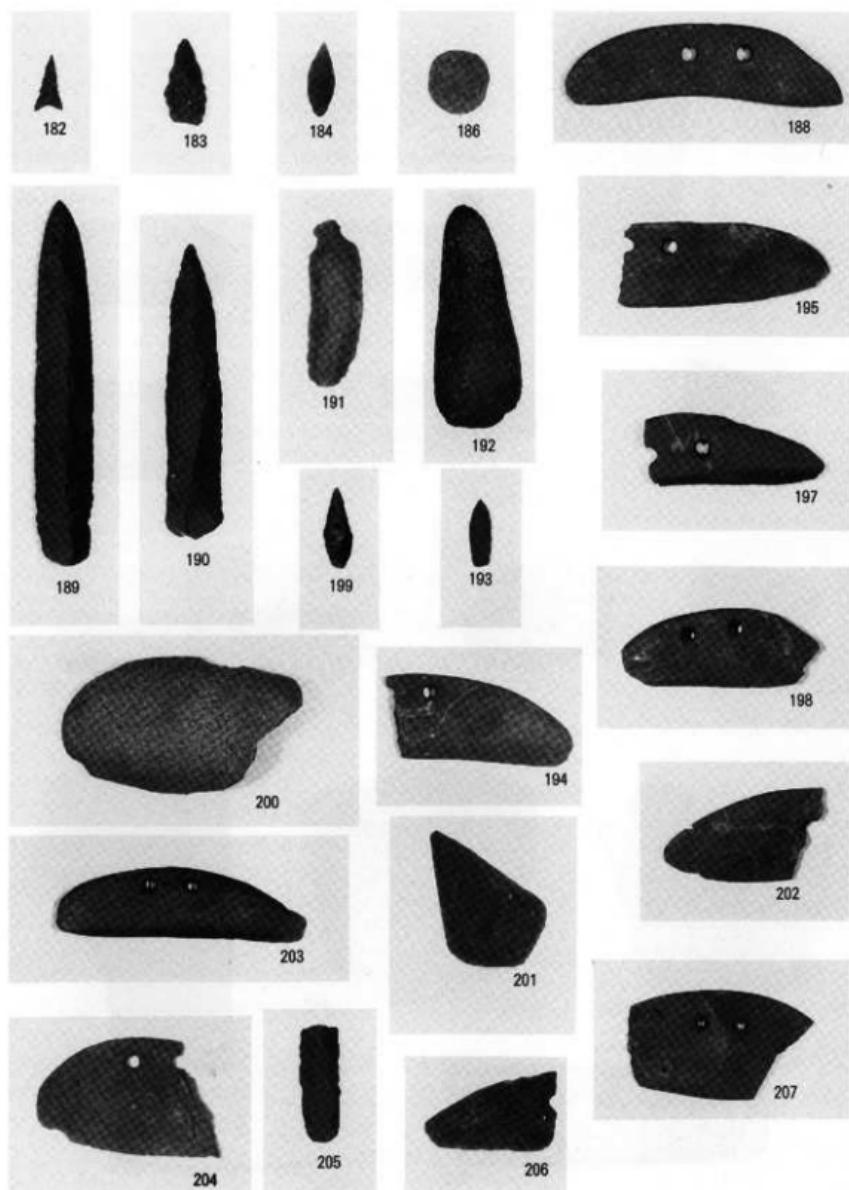
出土遺物 土坑10 (S. 二分之一)



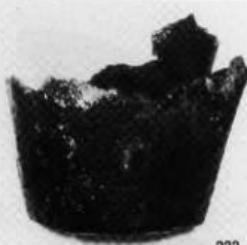
出土遺物 111~113; 土坑12、118~120; 溝14、132~140; 溝23 (S. 1/4)



出土遺物 141~151; 满28、164~174; 满44 (S. ≒ ¼)



出土遺物 石器 (S. ≈ 1/4)



出土遺物 石器：S. =  $\frac{1}{2}$ 、木器：223～226：S. =  $\frac{1}{4}$ 、227：S. =  $\frac{1}{2}$

奈良女子大学附属図書館

奈良県御所市

鴨都波 11次 発掘調査報告  
御所市文化財調査報告書 第11集

平成4年3月31日

編集・発行 御所市教育委員会  
御所市三室117番地

印 刷 明新印刷株式会社  
奈良市南京終町3-464番地

別添図1 1区の遺構 (S. = 1/50)



-24.450

-24.445

-24.440

-24.435

-24.430

-171.295

-171.295

-171.300

-171.300

-171.305

-171.305

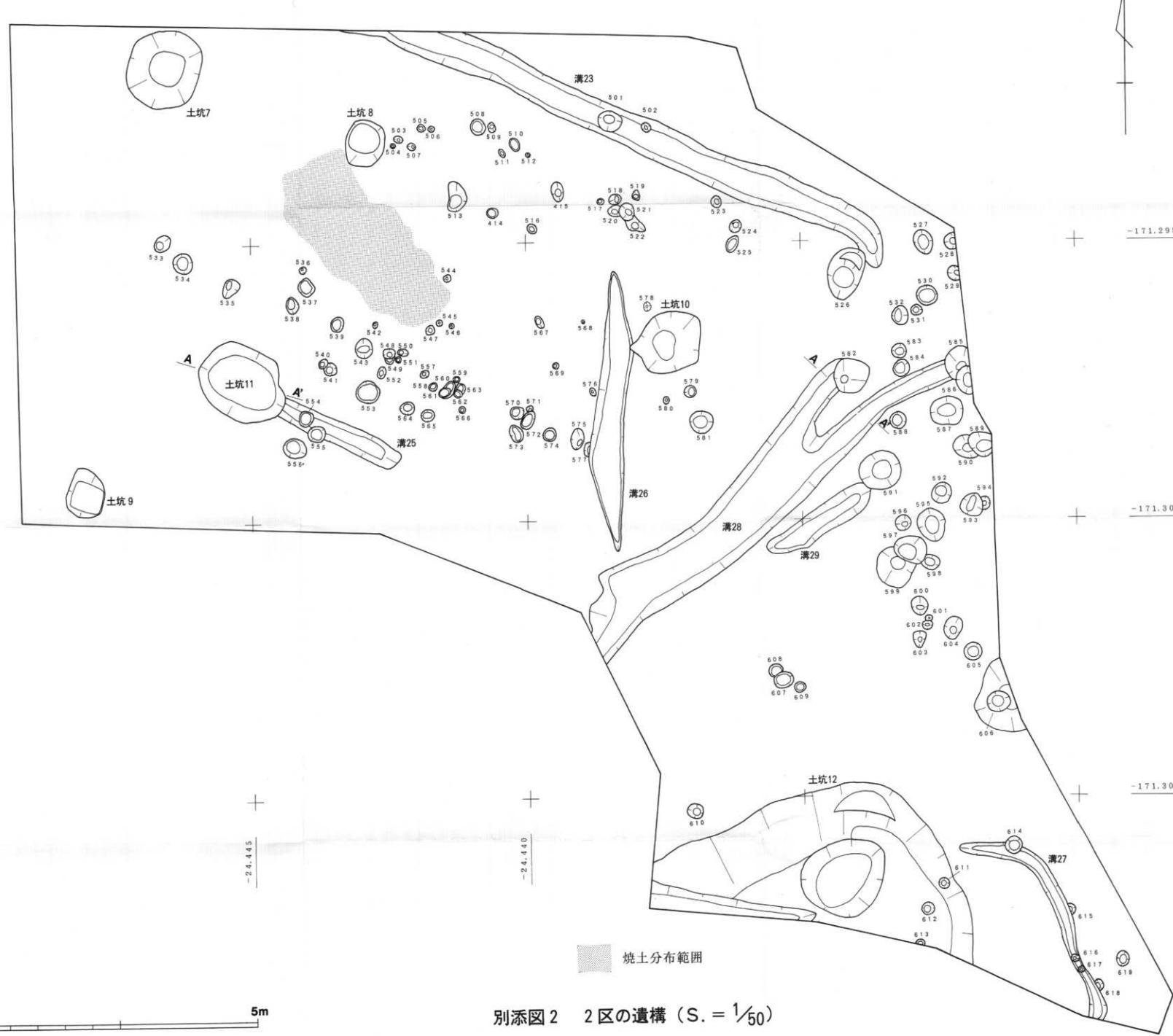
-24.450

-24.445

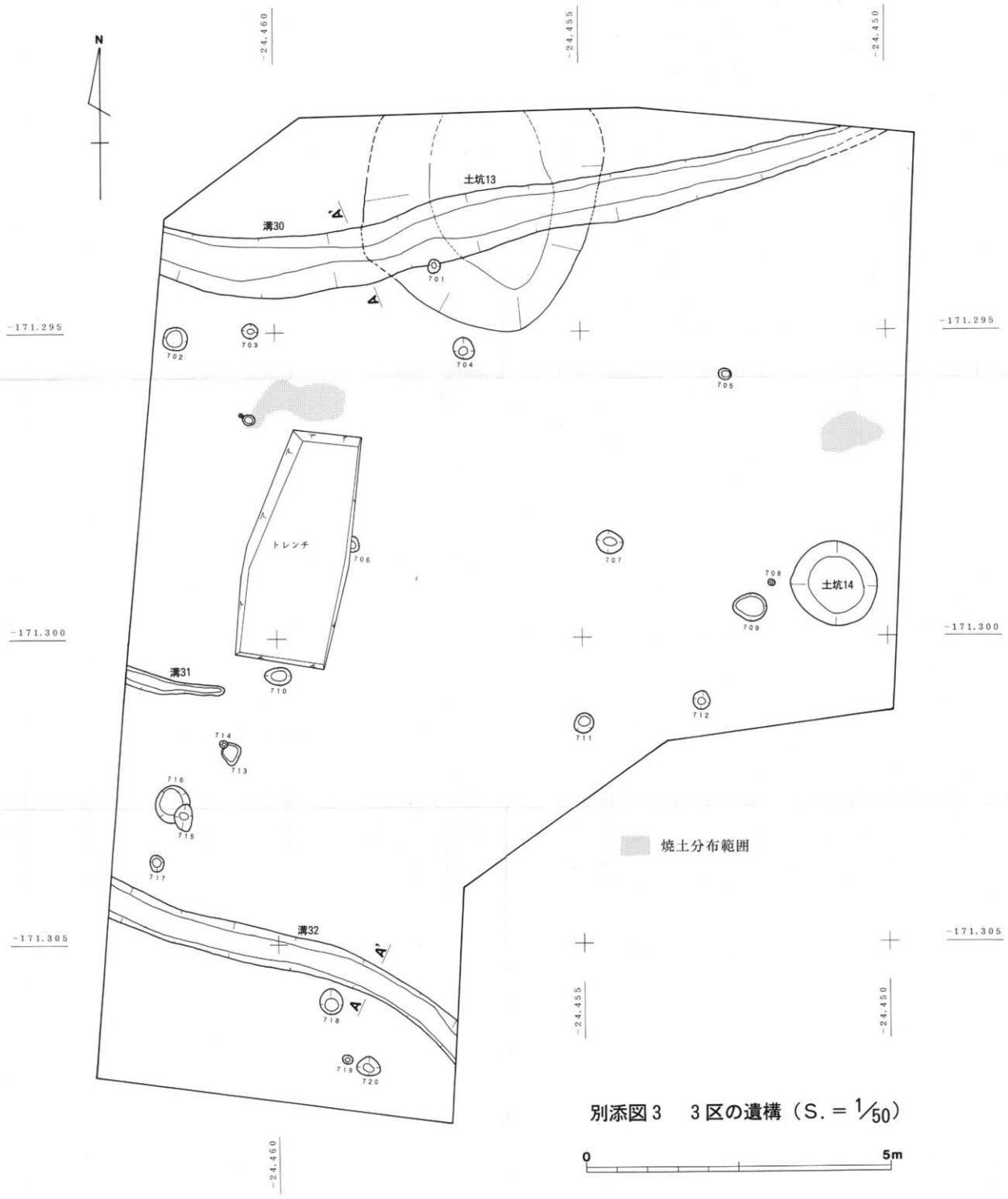
-24.440

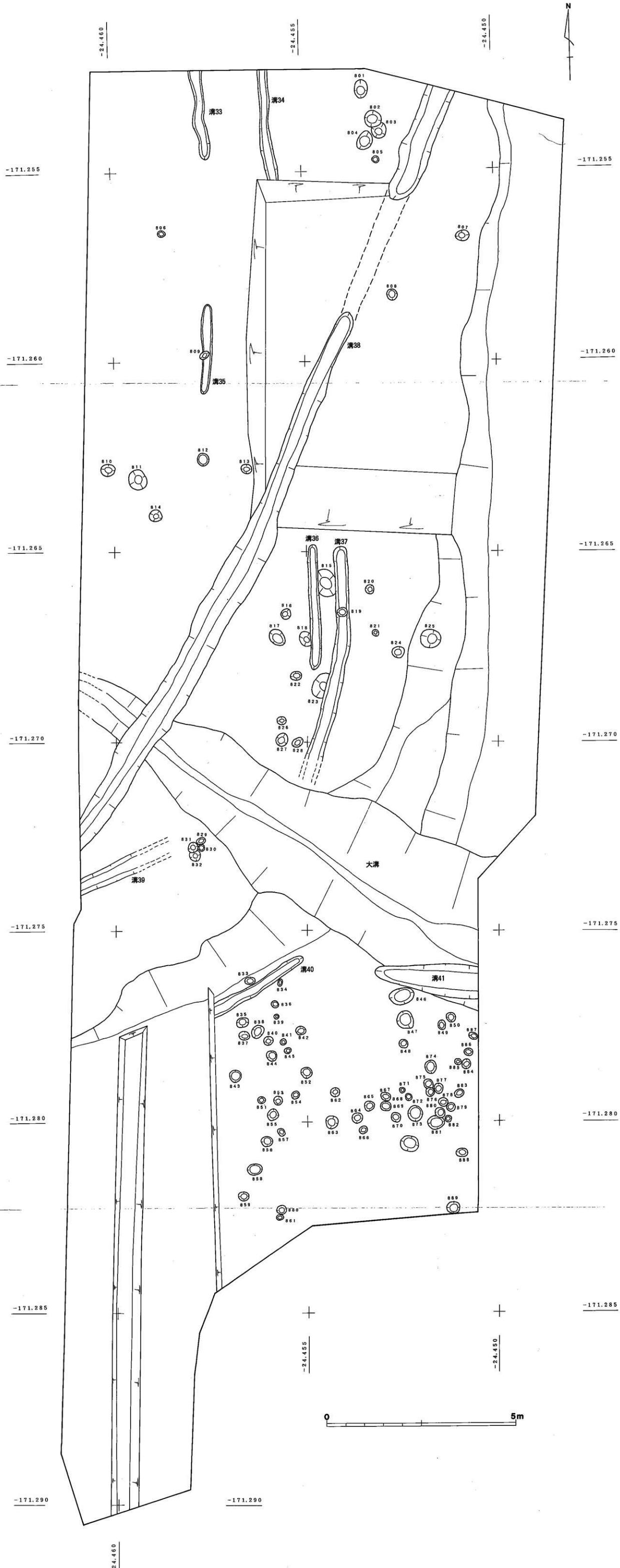
-24.435

-24.430

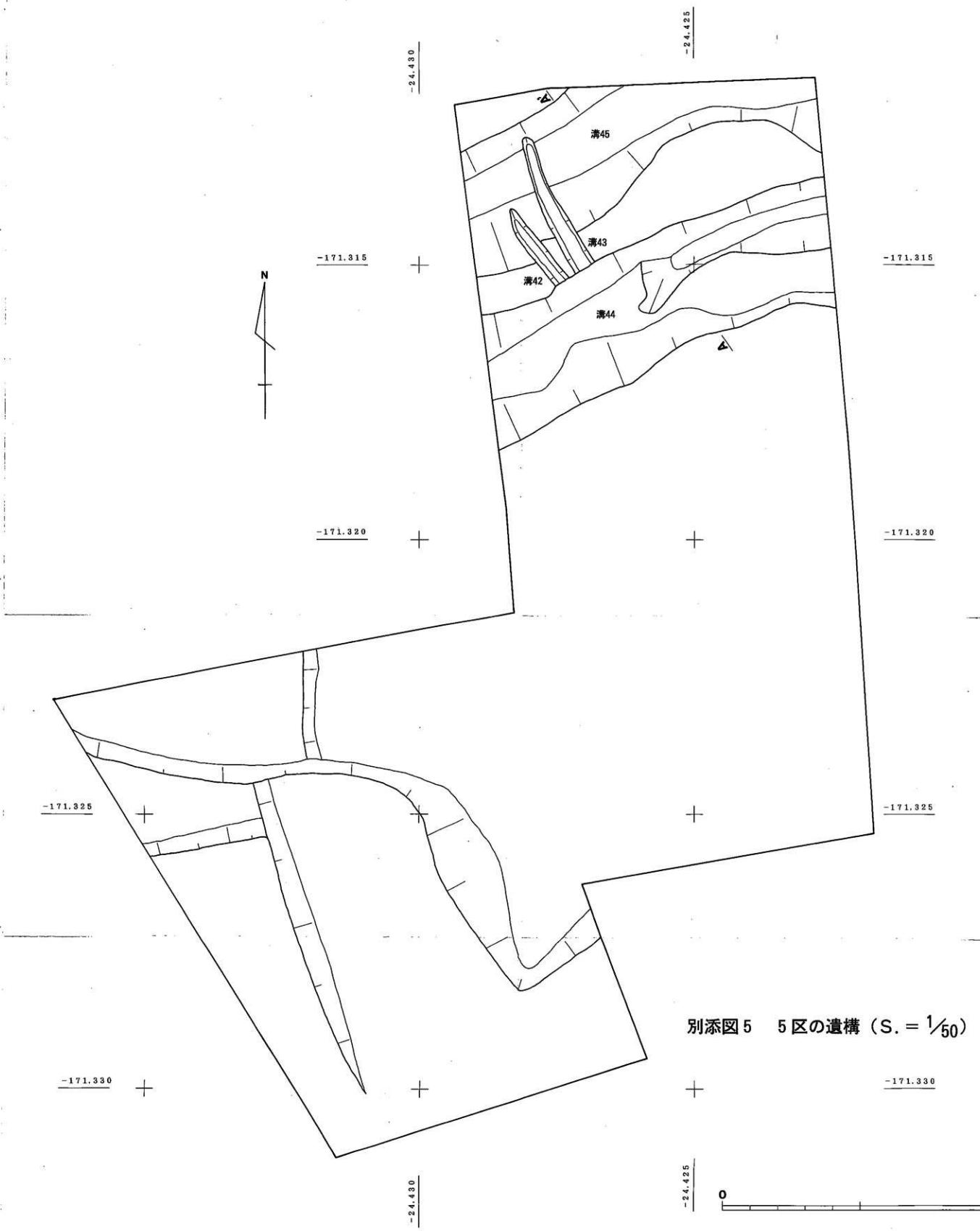


別添図2 2区の遺構 (S. = 1/50)





別添図4 4区の遺構 (S. = 1/50)



別添図5 5区の遺構 (S. = 1/50)